
三顧の零 ～ 伏龍、魔法使いに召喚されるのこと～

家康像

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三顧の零 ～伏龍、魔法使いに召喚されるのこころ～

【Nコード】

N4712P

【作者名】

家康像

【あらすじ】

太平要術を封印し、都洛陽での宴を終えてそれぞれのねぐらへと帰る乙女たち。そんな乙女の中の一人、諸葛孔明は、妹弟子の鳳統や、仲間の劉備たち三義姉妹とともに恩師、水鏡先生の元を訪ねようとしていました。その途中、霧が立ち込める森の中で、うっかり足を滑らせ、気付いた時には。

この作品は、アニメ版の『真・恋姫＋無双～乙女大乱～』と『ゼ口の使い魔』とのクロスオーバーで、アニメ版恋姫の朱里が才人の代わりにルイズに召喚されるお話です。恋姫関連はアニメ終了後の

キャラや世界観に基づいています。ゲーム版の恋姫シリーズのキャラや世界観とは異なります。また、作者の独自解釈や、辻褃合わせのためにオリジナル要素を入れたりもします。アニメ版恋姫のように、笑いあり、涙ありの展開でいくつもりなので、ゼロ魔側のストーリーは原作から大きく逸脱すると思います。ご注意ください。

プロローグ（前書き）

ゼロ魔と恋姫のクロスは全然無いので、とうとうやってしまいました。

でも、後悔はしません。

「なければ作ればいい」をモットーにやっています。

小説自体、初心者ですが、よろしくお願いします。

プロローグ

時は後漢も末の頃。この世は乱れに乱れておりました。

そんな世の乱れに乗り、悪しき力を以て天下を我が物にしようとした妖術使いがいました。

その妖術使い、于吉の野望を阻止し、忌まわしき太平要術の書を封印せんと、集いし群雄たち。

激しい戦いの末、ついに勝利を収めたのです。

そして都、洛陽での勝利の宴を終え、群雄、すなわち恋姫たちは各々の帰るべき所へと向かうのでした。

久々の平穏を楽しもうと、桃花村へと向かう劉備たち、義勇軍の一行。

しかし、その平穏を楽しむ間もなく、霧に覆われた森の中で、事は起こったのです。

一難去って、また一難。

乙女と乙女が出会う時。

世界の壁を越えた、新たな出会いと戦い、そして友情の物語の始まりです。

乙女たちを待ち受ける運命や、いかに
。

プロローグ（後書き）

どこまでいけるか。

でも、なんとかやれるだけやってみます！

第零席 ルイズ、三顧の礼にて孔明を迎えるのこと（前書き）

就活、大学と忙しいですが、皆さんのご期待に添えるよう、がんばります。

第零席 ルイズ、三顧の礼にて孔明を迎えるのこと

「朱里ちゃん、どこ……？」

霧が晴れたばかりの森の中で、大きな三角の帽子を目深にかぶった、いかにも大人しそうな雰囲気の小柄な女の子が、おそらくは彼女にとっては精いっぱいであろう声で、大切な人の名前を呼んでいた。

彼女の名前は鳳統。字はあさな土元。彼女が今必死に捜しているのは、彼女の大切な真名である『ひなり雛里』で呼ぶことを許している、数少ない親友にして、姉弟子である少女だ。

その親友、諸葛亮（字は孔明）がいなくなったのは、都・洛陽での宴を終え、二人で一緒に恩師にして、母親代わりでもある水鏡先生の家に行く途中の森の中のことだった。水鏡先生への挨拶と、万が一のためにと、孔明の友達たちである、桃花村の人たち（劉備、関羽、張飛）がわざわざ一緒に付き添ってくれていたにもかかわらず。

やけに深い霧の中を進んでいた時、孔明は誤って足を踏み外し、崖から転落してしまったのだ。すぐに友人の一人である張飛が助けに降りたのだが、どういうわけか孔明の姿がどこにも見当たらない。霧が晴れてから、皆で捜し続けて今に至るが、おかしいことに崖の下には孔明が転落した様子は無かったし、足跡などの手がかりさえ無かった。

「朱里ちゃん……」

今にも泣き出しそうな表情で、鳳統　　雛里は孔明の真名を呼び続けた。ひどいケガをしているんじゃないか、あるいは恐ろしい猛獣に襲われているんじゃないか　　。心配であった。

一刻も早く、無事な姿を見せてほしい。一刻も早く、返事をしてほしい。

残念ながら幼き少女・雛里の願いはその時その場で叶うことはなかった　　。

*

「また失敗だぞ！」

「これで二回目だ」

「いい加減にしてよね」

「後、何回失敗するか、数えてみるか？」

遠くに石造りの大きな城を臨んだ緑豊かな草原で、爆発の炎と黒

煙が噴き出すたびに、少年少女たちのヤジが飛んだ。

ここはハルケギニアにあるトリステイン魔法学院。トリステイン王国の貴族の子弟たちが魔法を学ぶための学院である。

その日の学院では、今年の春に晴れて二年生に進級する生徒たちによる、使い魔の召喚の儀式が執り行われていた。生徒たちの大半は使い魔の召喚に成功し、彼らの隣りには三者三様、様々な種類の使い魔たちが佇んでいた。ただ一人、桃色がかったブロンドの髪の少女を除いて。

「うるさいわね、気が散るから黙ってなさいよ！」

その少女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは鬱陶しそうに怒鳴り散らした。彼女は焦っていた。

周りにいる連中は、とつくに召喚を済ましたというのに、自分だけが上手くいかないからだ。

そうでなくても、もともとルイズはまともに魔法を成功させたことが一度も無い。だからせめて、この度の「サモン・サーヴァント」だけでも成功させたいのに、すでに二度も失敗 どちらもただ爆発しただけだった。

ルイズという少女の性格を一言で表現するなら、彼女は短気である。その上、失敗の度に周りのはやし立てるものだから、とうとう焼けっぱちになってしまったのだ。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！ 宇宙の何処かにいる、賢く、華麗で美しき使い魔よ！」

お願いだから、私の前に姿を現しなさい！」

極度の苛立ちと願望のあまり、ルイズは呪文というよりは、もはや嘆願に近い言葉を吐きながら杖を振り下ろしたのだ。三度目の正直と言わんばかりにである。

またしても爆発が起こり、誰もが失敗だと思った。ところが、そうではなかった。徐々に煙が晴れるに従って、何かが地面に転がっているのが皆の眼に入らざるを得なくなったのだ。

「おい、そこに何かいるぞ！」

信じられないという表情で見ている生徒たちを後目にルイズは、やったという表情で煙の中の「何か」に目をやった。やがて煙が晴れ、そこにいるものの正体はつきりと映った。

そこには一人の女の子が目を回しながら、大の字になって倒れていた。

その日、その後のことについては、特筆すべきことは特にない。何があったかを掻い摘んでみれば、この召喚を見ていた他の生徒たちが、ルイズが平民の女の子を召喚したぞ、とはやし立て、笑い飛ばしたこと。彼らの教師である、コルベールにすすめられるがままに、ルイズが自分よりも年下であろう、肩口で切りそろえた金髪の少女（気絶したままの）と「契約」を交わしたこと。直後に幼き少女の額の上に、極小さくて目立たないながらも、妙な模様の印が刻まれたこと。すべてが完了して、コルベールがルイズ以外の生徒たちを先に城に帰し、使い魔となった少女をその主と共にベッドまで運んだことくらいである。

このことは、日常生活から世界の歴史に至るまで、後に様々な影響を及ぼすことになるのだが、この時点では当事者を含め、誰も気づく者はいなかった。

ただ一つ言えることは、召喚された少女、諸葛亮（字は孔明。真名は朱里）にとっては幸か不幸か、「契約」の口づけが気絶していた間に行われた、ということであろう。

*

余談だが、実は霧の森の中に、もう一人行方知れずになった者がいたのだが、孔明搜索に夢中な劉備たち一行がそれに気づくのは、まだずっと先の話。

第零席 ルイズ、三顧の礼にて孔明を迎えるのこと（後書き）

思ってたより堅苦しい文になったような。

なんとかいい話ができるよう挑戦していきます！

ちなみに、どうして朱里にしたのかというと、個人的に好きなキャラだからです。優しいし、賢いし、何より可愛い。

あとアニメ版にした理由は、作者がもともとアニメからハマったことと、ゲーム版よりアニメ版の雰囲気（ゲーム主人公がいない世界）の方が、ゼロ魔世界と絡ますに当たって障害が少ないと、勝手に判断したためです。

どのキャラがいいかも迷いました。武将キャラは好きだけど、ゼロ魔世界にいくならともかく、使い魔として召喚されたらどうなるかは、作者の貧弱な頭では想像ができない。そこで、あえて力の強くない軍師キャラから朱里を選びました。故事成語があって、題名的にも使いやすいそうだったので（苦）。

さて、これからどうなるか、作者自身楽しんでまいりたいと思います。

ご指摘等、ありましたら、よろしくお願いいたします。

第一席 孔明、ルイズと初めて会話を交わすのこと（前書き）

やっと書けました。
しかし、難しい！

第一席 孔明、ルイズと初めて会話を交わすのこと

「鈴々ちゃん。孔明ちゃん、見つかった？」

夕暮れの森の中、桃色の長い髪でおっとりとした感じの、出ることは出た体つきの少女、劉備（字は玄德。真名は桃香）が息をきらしながら尋ねる。

「ダメなのだ」

そう答えたのは、赤い髪に虎のワッペンが特徴のチビツ娘、張飛（字は翼徳。真名は鈴々）だ。

「朱里のやつ、どこを捜しても見つからないのだ」

何の成果もなく困る二人。そこに、きれいな黒髪をサイドテールにした、やはり起伏のある体つきをした少女が駆けつける。

「義姉上、鈴々！」
あねっえ

「愛紗ちゃん」

「愛紗　　！」

桃香と鈴々がその少女、関羽（字は雲長。真名は愛紗）のもとに寄った。彼女は雛里を引き連れて、急いで水鏡の家に行ってきたところだった。

「今、鳳統殿と一緒に、水鏡殿に事の次第を話してきたところだ。もうすぐ来られるだろう。ところで朱里は？」

そう尋ねるが、桃香も鈴々も首を横に振らざるを得ない。

「ダメだよ。孔明ちゃん、見つからないの」

「全然わからないのだ」

これには三人とも、溜め息をつかざるを得なかった。

「朱里、どこにいるのだ！」

鈴々の声が夕焼け空に、むなしく響き渡った。

*

既に夜も更け、空には大小合わせて二つの月が昇っている。

トリスティン魔法学院の女子寮の一室にて、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは困っていた。

どうして困っているのかというと、今日、自分が召喚した使い魔
今、目の前の自分のベッドに寝かせてあげている女の子のこと

だ。

「どうしてこんな『平民』の子どもなのよ……。おまけにさっきからずっと、この調子だし……」

そう、召喚して以来、ずっと気を失ったままなのだ。時々、その口から「はわ……」という、まるで何かに脅えるかのような、小さな声が漏れるくらいで。

「まったく、感謝しなさいよね。本来、平民の子どもがここまで貴族に面倒見てもらえることなんて、まずないんだから」

誰に言うのでもなく、ポツリと独り言を漏らす。たしかにルイズはずつと、この気絶した少女の面倒を見ていたのだ。ただし、決して自分の意思ではない。彼女の先生の一人で、召喚に立ち会った、コルベールの判断で、いくら平民とはいえ、流石に気絶したままの女の子を放置しておくのはまずい、ということ、召喚のあとの授業を免除する代わりに、目が覚めるまでついていてあげるように言われたからである。

ルイズ一人が、この少女に大恩でも売ったつもりになっていた。

動きがあつたのは、その時　　ルイズが独り言を呟いたときだ。ついに目の前のやや短い金髪の少女のまぶたが、ゆっくりと開いたのだ。

「う……ん……」

まぶたを開けるにしたがって、ゆっくりと視界が開ける。

「あれ……ここは……？」

気がつけば、暖かい布団の上にいた。いったい、どれだけ寝ていたのだろう。意識がぼんやりする中、なんとか時間を確かめようと手掛かりを探す。幸か不幸か、少女、諸葛孔明　朱里の目にとまったのは、窓の向こうの夜空に輝くお月さまだ。

「もう夜……！？」

月を見るや否や、眠気は吹っ飛んだ。朱里は咄嗟に自分の右手で両目をまぶたの上からごしごしとこすり、そして再び見る。お月さまの数は、二つだ。

「はわわ、お月さまが二つ、二つも！？」

見たことのない光景に、朱里は驚く。彼女は今まで、いろいろな所を旅してきたが、どこへ行っても月は一つだった。その時一瞬、自分が霧の森の中で、崖から転落したときのことか頭の中をよぎる。

「ここはいつたい……まさかあの世……」

「そんなわけあるかー！」

「はわ!？」

突然横から怒鳴られて朱里はベッドの上から転げ落ちそうになった。辛うじて転落だけは免れる。

「まったく、人を散々てこずらせておいて、何が天国よ!」

「す、すみませ……!？」

咄嗟に謝りそうになった時、朱里はすぐ横で仁王立ちをしている、年は自分と同じか少し上であろう、桃色の長い髪の少女の存在に気付いた。

ほんの一瞬だけ、沈黙が続いたが、すぐに破られる。

「すみませんが、どなたですか？」

「それはこっちのセリフよ!」

これが、これから長い付き合いとなる、二人の少女が初めてお互いに会話を交わした瞬間だった。

第一席 孔明、ルイズと初めて会話を交わすのこと（後書き）

やっと、初対面にこぎつけました。

本当はもつといろいろ書く予定でしたが、どうしても話がおかしくなってしまう。

よって、この夜の出来事は、二つにわけて書くことにしました。

でも、予想はしていたけど、恋姫キャラがルイズの性格について行くのは、やっぱり難しい。この次の話は、間違いなく対立的な話になると思います。

でも、このお話の本分は、笑いあり、涙ありの王道でいくべきだと思っています。

アニメ版恋姫の朱里を起用したのは、その人づきあいの経験や、生まれ育ちの設定などから、彼女ならそれを成し遂げられると思ったからです。

もちろん、最初からうまくいくわけがないので、いろいろな展開を挟んで、より面白い話にしていこうと思います。

いろいろと、ご都合な展開もありますでしょうが、彼女たちの活躍を見守ってあげてください。

なお、ハルケギニアに行くのは、朱里以外にも何人かいる予定です。誰かとは言いませんが、アニメ版恋姫が桃花村メンバーを主役に行っている以上、魏や呉は出せないですし、出したらややこしくなると思います。言えることは、シリ阿斯面で重要なキャラと、ギャグ面で重要なキャラがいるということです。どこまでいけるかわかりませんが、よろしく願います。

第二席 孔明、ルイズに詰め寄ること（前書き）

長かった。

そして、性格の違うこの二人を絡ませるのが難しかった。
それではどうぞ。

第二席 孔明、ルイズに詰め寄ること

山中にある水鏡先生の屋敷の中。雛里は眠ることができず、ぼんやりと夜空の月を眺めていた。

朱里が行方不明になって、半日が経っている。あれから水鏡先生も加わって、搜索を続けたのだが、なんの手掛かりも得られていない。先ほどは愛紗が、先に義勇軍と共に桃花村へと帰っているはずの馬超、黄忠たちに急を報せに行った。また、桃花、鈴々、水鏡先生たちが夜通し交代で手掛かりを捜し続けている。

雛里は悲しくなった。今日は本来なら、朱里と一緒に先生に甘え、一緒に料理をしたり、お風呂に入ったり、一緒に本を読んだりして楽しんでいたはずだった。今頃は一緒に布団の中にいるはずだった。そして、明日は一緒に薬草を摘みに行くはずだった……。

それなのに、こんなことになっている上に、自分にはどうすることもできない。それが、まだ幼い雛里にはとても耐えられないことだったのだ。

不安は新たな不安を呼ぶ。それが間もなく、彼女にとんでもない行動をとらせることになった。

その夜、トリステイン魔法学院の女子寮の一室では、決して後世の史家によって記されることのない、凄まじい論争の嵐が吹き荒れていた。それは、

「すみませんが、どなたですか？」

「それはこっちのセリフよ！」

という二人の少女のやり取りから始まったものだった。

召喚したルイズと、召喚された朱里。お互いにとって不幸だったことは、育った環境も、慣れ親しんだ国、土地の文化も全然違ったことだった。それが遠因となって、自分の名前を言うだけで大変苦労したのだ。しかも、ルイズが自分の召喚した少女のことを、ただの平民の女の子にすぎないと思ったことが、さらなる不幸を呼んだのだ。それをいちいち書き記してはキリのない話であるため、いくつか掻い摘んで話を進めることにしよう。

例えば名前を言った時は、ルイズが字を知らないがゆえに、面倒事が起こったし、ルイズが名乗った時は、朱里が長い名前に舌をかむ羽目に陥った。

朱里が自分の出身について述べた時には、ルイズは朱里の言った国や土地の名前（漢帝国、桃花村など）は全然知らず、信じようとしなかったので、朱里は証拠として、自分の鞆ヒンクのリュックサックの中から、巻物の地図を見せて、なんとか認めてもらうことができた。

しかし、これらのことは、朱里が魔法のこと、そして自分の置かれた状況を知ったときに起こった論争からみれば、取るに足りないものだった。

「ルイズさん」

朱里が尋ねた。

「なによ」

「ここはその、『魔法学院』とかといいましたよね？」

「そうよ。ここがかの有名な、トリステイン魔法学院よ」

「それで、あなたが、その『魔法』とかいう妖術をここで勉強する、えっと……」

「『メイジ』よ。何度も言わせないで。それにヨウジュツってなに？」

「こちらの話です。とにかく、あなたがその、『めいじ』とかいう術使いなんですね？」

「そうよ。そして、わたしはあんたのご主人様で、あんたはわたしの使い魔として、ここに呼ばれたのよ」

「『使い魔』ってなんですか？」

「文字通りの意味よ。わたしが主人で、あんたは召使いみたいなものよ……」

「なっ!？」

それを聞いたとたん、朱里は自分でもわからないほどの勢いで、ルイズに詰め寄った。

「ルイズさん。私はあなたにお仕えするなどと、言った覚えはないのですが」

「知らないわよ！ わたしだって、あんたみたいな平民を呼びだした覚えはないわ！ 本当は、ドラゴンとかグリフォンみたいなカッコいいのがよかったのに！」

「その『どらごん』や『ぐりふおん』が何かは知りませんが、それなら、私はあなたの召使いなど、やる必要はないじゃないですか！」

「うるさいわね、平民の分際で貴族に逆らうの!？」

「今は身分の話なんかしていません！ だいたい、なんですか。いくら、あなたの意志ではないとはいえ、勝手に人を呼び出しておいで、しかも召使いになれなんて。お断りします！」

「なんて生意気なの」

「誰が生意気ですって!？ それなら聞きますが、ルイズさん。あなたが今、私に言っていることを、逆にあなたが他の人から言われたらどうなんです？ 『はい、やります』といますか？」

「言っわけないじゃない！」

「同じことです。誰も認めるわけがないでしょう」

「う、うるさい！」

激しい論争の末、怒ったルイズは、何やら手鏡みたいなものを朱里に投げ渡した。朱里は、一瞬呆けて、「はわ!？」と言って、落としそうになりながらもキャッチする。

「それで、あなたのおでこを見てみなさい！」

「おでこ?」

憤りながらも、前髪をかきあげ、確認してみる。そして見た。前髪に隠れたおでこのど真ん中に、極小さく目立たないながらも、朱里が見たことのない文字が模様みたいなものが描かれているのを。

「はわー、これはいつたい !?」

驚きのあまり、一瞬我を忘れるものの、すぐにルイズを見据えていう。

「なんですか、この黥げい（刺青のこと）みたいなのは!？」

「使い魔のルーンよ」

ルイズが答える。

「とにかく、それがある以上、あんたはわたしの使い魔ということなの」

「誰が認めるものですか！」

「わたしだって認めたくないわよ！」

「それなら取り消してください！ その契約とかいうのを！ そして、わたしをもといた場所に帰してください！ それで、あなたがきちんとその、『どらこん』とか何かを呼べばいい話じゃないですか！」

「できないのよ！」

「えっ……？」

悪い予感が朱里の頭の中をよぎる。

「どういう意味ですか？」

「言葉通りの意味よ！ 『サモン・サーヴァント』は一回しか使えないし、呼び出すことしかできないの！」

「どうしてですか？ ルイズさん。あなたはその、『めいじ』とかいう術を使う人なんでしょう？」

「知ったような口を聞かないで！ あのね、もう一度『サモン・サーヴァント』を使おうと思ったらね、一度呼び出した使い魔が死ななきゃならないの！」

「そ、そんな……」

口にかけては誰にも負けない朱里も、これでは言い返すことができなかった。名軍師、諸葛孔明とはいえ、朱里はまだ子どもなのだ。これが恐ろしくないわけがない。

「わかった？ だからあんたは死ぬまでわたしの『もの』よ」

「認められるわけが……」

「まだ言つの？ 別に構わないのよ。わたしのもとからいなくなっても。そうなればどうなるかくらい、わかるでしょう？ 野たれ死ぬだけよ」

「ええ……」

悔しいほどわかった。どんなに頭がよくても、名軍師と言われようと、朱里のような子どもが、自分の知らない国で、親しい人が誰もいない状況で生きていくのは酷というものだ。まして、朱里は水鏡先生の師匠にあたる人に拾われる前、両親を亡くし、親戚中をたらい回しにされ、姉や妹とも離れ離れになった経験がある。だからこそ、よけいに恐いのだ。しかも、元の世界で、せっかく真名を授けあえる友が大勢出来始めていただけに、そこから引き離された衝撃は計り知れないものだった。次の瞬間朱里は、分担してとはいえ、かつて三万もの大軍の指揮を執ったこともある名軍師、諸葛孔明としての恥も外聞も捨て、ただ一人の孤独な女の子としての行動を取った。

「わかったでしょう。だから不本意だけど、主人であるわたしのために、しっかり働いた分、食べさせてあげることくらい……」

そう言いかけて、ルイズは異変に気付いた。なんと、自分が使い

魔にした女の子、「コウメイ」がその場におり崩れたかと思うと、その両目からポロポロと涙が流れたのだ。

「ちょ、何泣いてるのよ!」

これにはルイズも慌てた。

「わたしが泣かしたみたいじゃない!」

事実そうなのだが、ルイズにしてみれば、完全な不意打ちだったのだ。

「う、うわーん!」

とうとう、声をあげて泣き始めたのだ。

「ちょ、落ち着きなさい!」

流石に放っておけず、思わず抱きしめる。あまりに不憫だったからだ。

*

その夜、ルイズは自分が召喚した少女、「姓はシヨカツ、名はリ

ヨウ、字はコウメイ」と一緒に寝てあげたのだった。

なおルイズが、自分が召喚したものの大切さに、自ら気付くのは、
まだずっと先のお話。

第二席 孔明、ルイズに詰め寄ること（後書き）

こんなに難しいとは思いませんでした。

どうしても、暗い話になる。

でも、そろそろ抜け出さないといけないと思います。

ルイズのためにも、朱里、雛里のためにも。

そして、皆さんのためにも、しっかりとやってまいります。

第三席 孔明、師と友に慰められること（前書き）

今回の話とはにかく長いです。また、一種のご都合主義かもしれない。それでも読んでいただける方々に、幸あらんことを。

第三席 孔明、師と友に慰められること

「朱里、起きなさい、朱里」

懐かしい声をする。朱里はゆっくりと体を起こした。空が目映る。満天の星空だ。しかし、おかしい空だった。朱里から見ても前の方の彼方には、たった一つの月が浮かんでいる。ところが後ろを振り向くと、そこには二つの月があるのだ。

それだけではない。朱里の後ろ、二つの月の下には、彼女の育った国にはない石造りの大きな城がそびえ立っている。反対に前の方、朱里が見慣れたお馴染みの、一つだけのお月さまの下には、緑に囲まれた、小高い丘の上に建つ屋敷、朱里の大好きな人の家がそこにあった。

朱里は急いでその家の方に向かって走った。しかし、途中で気付く。なぜか、行けども行けども、そこにはたどり着けず、同じ草原を走り続けていることに。とうとう、何かに躓いて転んでしまった。

「はう……」

足に痛みを感じ、ケガをしていないか調べる。すると、そこに懐かしい人が現れた。

「朱里、大丈夫？　どれ、見てあげましょう」

その声を聞いた朱里は、うれしさのあまり、涙が流れる。

「先生……」

足の痛みも忘れ、その人に抱きついた。

「水鏡先生！」

「あらあら」

抱きつかれた、清楚で母性的な女性が朱里の頭を撫でてあげる。
彼女こそ、朱里にとって恩師であり、何より母親代わりだった恩人で、その名は司馬^{しはま}徽。すなわち水鏡先生だ。

「先生、遅くなってごめんなさい。会いたかったです。」

「お帰りなさい、朱里。その様子だと、いろいろお話がしたいみたいね」

「はい！」

「でもね、まずはちゃんと足を見せてくれるかしら？」

「はわ……、そうでした」

そういうわけで、朱里はすりむいた右足を見てもらう。水鏡先生は慣れた手つきで、傷の上に砕いた薬草の湿布をし、包帯を巻いてくれた。

「これでよし」

「ありがとうございます、先生」

そうして落ち着くと、朱里は水鏡先生に向きあい、そして話したいことを話し始めた。

崖から誤って滑り落ちてしまったこと。それで気を失い、気がついたときには、今自分の後ろにあるような、「月が二つある国」にいたこと。そして、自分はルイズという名前の、全然見知らぬ女の子に、「使い魔」として呼び出されたい、ということ。話しているうちに、涙さえ出てくる。

朱里は自分の置かれている状況について、一つ一つ、ありのままに話した。傍から見れば、愚痴とも言えるような話も見受けられたが、水鏡先生は丁重に全部聞いてくれた。

「とんでもないことになっているわね」

「はい、そうなんです」

そこまで言って、朱里は表情を暗くする。

「いくら、あのルイズさんが、わざとじゃないとはいえ、私を全然知らない国に連れ出して、その上、召使いをしろと言っんです。先生、私、どうすれば……」

しょんぼりとする朱里。すると、水鏡先生がポンと、頭の上に手を置く。

「そうね。確かに納得できる話ではないわ」

そう言って、頭をゆっくりと撫でながら、優しく話し続ける。

「でもね、朱里。一つだけ憶えておきなさい」

「はい」

「確かに朱里は今、すごく辛い目に遭っていることはわかります。でも、そのルイズちゃんという女の子のことを怨んではいけませんよ」

「えっ……？」

首を傾げる朱里に、水鏡先生は優しく諭す。

「朱里の話を聞く限りだと、ルイズちゃんって子は、一生懸命になつてその『使い魔』という動物を呼び出そうとしていた。その時、ルイズちゃんは、朱里を呼ぶつもりは全然なかった。それなのに、なぜか朱里が呼ばれた」

「朱里。私はね、これはきっと、何か意味のあることじゃないかな、と思うの」

「意味のあること、ですか？」

「そうよ。それが何かまでは先生にもわからない。だけど、ルイズちゃんが一生懸命にやって、そして朱里が呼ばれた。それは、朱里がルイズちゃんに必要とされているからではないかな、て」

「でも、ルイズさんは、私なんかより、その『どらこん』とか『ぐりふおん』とかいう動物の方が良かったというんです」

それを聞いた水鏡先生は、少し目を瞑った後、ゆっくりと首を振った。

「朱里。たとえ話をしましょう」

「例えば、石が二つあるとします。片方は綺麗な宝石で、もう片方は一見ただの石にしか見えない石。どちらかをあげると言われたら、朱里はどっちをもらうかしら？」

「綺麗な方の石です」

「そうですね」

水鏡先生は答えを聞いてほほ笑むと、話を続けた。

「朱里だけじゃなく、たいていの人はそう答えると思います。でもね、朱里。一見汚い石にしか見えない石を、しっかりと磨いてみたらどうかしら？」

「あっ！」

朱里は息を呑んだ。それを見た水鏡先生は楽しそうに笑みを形作る。

「わかったでしょう？ 本当に綺麗な石というのは、最初はただの汚い石にしか見えないの。それを磨いて、初めて綺麗で立派な石になるのよ」

「そうです。その通りです。でも……」

朱里はやはり不安そうだ。

「本当に私、ルイズさんに必要とされているのでしょうか？」

「大丈夫ですよ。必ず必要とされるはずですよ。いえ、むしろ、朱里の方から必要とされる人になればいいですよ」

「でも先生……」

「朱里は昔からそういう子。先生はちゃんと見ていますよ」

「鈴々もなのだ！」

「はわわー！？」

突然目の前に割って入った顔に驚き、朱里は尻もちをついてしまった。

「んもー、鈴々ちゃん。驚かさないでください！」

「へへ……、ごめんなのだ」

頬を可愛らしげに膨らまして怒る朱里に、笑いながら謝るのは、朱里にとっては初めての同年代の友達となってくれたチビツ娘、張飛鈴々だ。水鏡先生を除けば、朱里が初めて真名で呼べた友達。そして、少し時間はかかったけれど、初めて朱里のことを真名で呼んでくれた仲間だ。

「話は全部聞かせてもらったのだ」

鈴々はそう言うと、朱里を勇気づけようと言葉を続ける。

「朱里、おまえはおっぱいはちっちゃい「余計なお世話です！」はにゃー!? と、とにかく、お前は頭もいいし、優しいし、働き者だし、料理も上手いのだ。だから、もっと自分に自信を持つのだ」

「もし、それでもお前のことをいじめるヤツがいたら、鈴々がお前の所に行つて、そいつらをケチヨンケチヨンにしてやるのだ。だから、朱里は何も心配しなくていいのだ」

「鈴々ちゃん、ありがとう……」

朱里は思わず鈴々にしがみつく。鈴々は一瞬顔を赤らめたが、すぐにプイとそっぽを向くと、

「別に、当たり前のことを言っただけなのだ……」

とだけ、答えた。朱里にはそれだけで嬉しかった。

「あら、いけないわ」

水鏡先生が困ったように言った。

「もうすぐ夜が明けます。朱里、そろそろ戻らないといけませんよ」

「そんな、先生……」

すると水鏡先生は、よりしっかりと朱里を抱きしめてあげた。

「大丈夫です。私は、先生はちゃんと見ていますよ」

「鈴々もなのだ！ だから、しみったれた顔はするなのだ」

「はい！」

おかげで元気がでた。

「朱里！」

鈴々がそう言って、ニコリと元気な表情を見せる。

「はい、鈴々ちゃん！」

朱里もそれに応え、微笑み返す。また次に会う時のため、お別れのときの顔を覚えておくのだ。

やがて、地平線の先に光が差し込み、夜空は徐々に晴れていく。日の出の時間だ。

「それでは、先生、鈴々ちゃん。お元気で！」

「気をつけてね」

「頑張れなのだ！」

別れの挨拶を済ますと、朱里は後ろの石造りの城へと向かって駆け出した。

（水鏡先生、そして鈴々ちゃん。ありがとうございました。私、頑張ります！）

決意を新たに、朱里はお城へと走るのだった……。

＊

朱里が目を覚ました時、そこはルイズのベッドの上だった。窓からは光が差し込み、小鳥のさえずりが聞こえる。そして、隣では昨日口論した相手、ルイズがぐっすりと眠っていた。

「夢だったんだ」

そう思った朱里は、ふと右足を見る。そこには、丁寧ではなかったが、包帯が巻かれていた。

「あれ、誰が巻いてくれたんだろう……？」

訝しげに思ったが、結局わからない。実は昨日、泣き崩れて寝込んでしまった後に、今はぐっすりと寝ている「ご主人様」が、すりむいた傷に気付き、巻いてくれたのだが、もちろん、朱里は知らない。

「それにしても、夢の中で、水鏡先生や鈴々ちゃんに、ずいぶんと勇気づけてもらったな……」

夢の内容を思い出し、嬉しく思う朱里。

「でも、どうせ夢なら、雛里ちゃんにも会いたかったな……」

そう言って、夢には出てこなかった親友の顔を思い浮かべる。

「皆、心配しているだろうな……」

再び、しみりしかけるが、そこで思いとどまる。

「いけない。せっかく先生や鈴々ちゃんに勇気づけてもらったのに、約束してきたのに……」

そして、誰にでもなく、自分に言い聞かせるかのように、呟いた。
大好きな人たちや、大切な友達、仲間たちの顔、一人一人を思い浮かべながら。

（水鏡先生、鈴々ちゃん、雛里ちゃん、愛紗さん、劉備さん、星さん、翠さん、馬岱ちゃん、魏延さん、紫苑さん、そして璃々ちゃん。私、頑張ります！）

朱里にとって、ハルケギニアでの生活、第一日目の始まりだった。

第三席 孔明、師と友に慰められること（後書き）

いかがでしたでしょうか？

個人的には、朱里はよき友、よき師に恵まれていたと思います。

前話であんなことになっただけに、こうでもしないと、すぐには立ち直れない、と思い、こういう話を入れました。

さて、気を取り直したところで、いよいよ学校生活のスタートです！
さあ、どうなることやら。

第四席 ルイズ、孔明の畏を恐れるのこと（前書き）

やっとできました。

それでは、お楽しみください。

ちなみに、あとがきにて、キャラクターたちによる「ムダ知識講座」をお試しに始めてみます。

それでは、どうぞお楽しみください。

第四席 ルイズ、孔明の畏を恐れるのこと

「恐くない……、暗いところなんて、全然恐くない……」

自分を懸命に励ましながら、暗闇の森の中を、雛里はたった一人で歩いていった。

彼女は今、一生懸命になって、親友である朱里の手掛かりを捜していた。だが、傍目から見れば、彼女の今やっていることは無謀そのものであった。

そもそも、雛里は水鏡先生の家で待っていないといけないはずなのだ。それがどうしてこんな真夜中に、何が出るのかわからない森の中にいるのか。

答えは、自分だけが何もできないことに業を煮やした雛里が、なんとかしても親友を見つけないとの思いで、こっそりと先生の家を抜け出したからだ。

下手をすれば、自分の身まで危険にさらす危ない行為である。それに、大好きな水鏡先生や、朱里の友達たちにも迷惑がかかるに違いない。しかし、雛里にしてみれば、朱里が見つからないことの方が重大だった。

「朱里ちゃん……」

小さいけれど、それだけに友達を心配する気持ちのこもった声で、雛里は親友の名前を呼び続けた。

しかし、その声は漆黒の闇の中に消えるばかり。もはや、雛里の努力ではどうにもならないかと思われた。だが、運命のいたずらであるうか。搜索を続ける彼女の目に、奇怪なものが目に入ったのは。

「あわ……？」

雛里が思わずつぶやいた。そして、自分の目を疑った。

幸か不幸か、雛里の視線の先には、金色の光を放つ、小さな虫
いや、虫ではない。そこには、小さいが、れっきとした龍みた
いなものが飛んでいた。

雛里はそれをしばらく、恐れと好奇心の入り混じった目で見つめていた。だが、その光る龍みたいなのが、森の奥の方へと飛び去ろうとする。

「待つて……」

雛里は急いでその後を追った。なぜ追いかけるのかはわからない。だが、どうしても追いかけなければいけない気がしたからだ。

*

どこへ行っても朝は早い。ハルケギニアに来て初めてのお日様を見た後、朱里は洗濯物を抱え、ルイズの部屋を後にした。昨日の夜は、あんなことがあって、ルイズと口論した揚句、いっぱい泣いてしまった彼女だったが、結果としては、それがかえってよかったようだ。自分の感情を一気に前に押し出すことができたので、胸の内にあつた何か、もやもやしたものが、だいぶ取れたような感じがあつた。それに、いつまでもいじけていてはいられない。夢の中とはいえ、水鏡先生や鈴々に励ましてもらい、そして約束したのだ。頑張ります、と。だから朱里は、明るく、前向きに進む道を取ることができたのだ。それに彼女は家事が好きな性格である。何かをせすにはいられず、朝起きて身支度を整えると、脱ぎ散らかされていたルイズの衣服を籠に集め、洗濯に向かったのだ。

まずは第一歩である。しかし、いつの世もそれにトラブルはつきもので、朱里も例外ではなかった。

「はわ……、どうしよう」

朱里は困った。彼女は今初めて、魔法学院の中を歩いているのだ。洗濯できる場所など知らない。すなわち、道に迷ったのだ。

「そうだ、誰かに聞こう」

彼女はもつとも単純かつ、一番有効な方法で、この問題を解決することにした。

幸運なことに、人を探すのに、そんなに時間はかからなかった。少しその辺の廊下を歩いていると、黒髪を力チューシャで纏めたメイド（朱里の世界用語では「侍女」と言うべきであろう）らしき女性

が、朱里と同じように洗濯物の入った籠を両手に抱えて歩いているのを見つけた。

「すみません」

朱里は丁寧な声をかけた。その声に気付いた、黒い髪のメイドが振り向く。

「はい？ あら、どうかしました？」

素朴な顔立ちの人だった。

（はわゝ、優しそうな人だなゝ）

そう思った朱里は、安心して尋ねた。

「私、今からお洗濯に行きたいのですが、その、洗濯ができる場所が分かりませんでして。よかつたらご一緒させていただいてもいいですか？」

「いいですよ。今から、私も行くところですし」

「ありがとうございます！」

朱里は笑顔になると、ちょこんと可愛らしげに、一緒に付いて行くのだった。後ろから見れば、仲のいい姉妹のようにも見えただろう。

「ところで、変わった恰好ですね」

少し歩いた時、その朱里より年上なメイドの少女が言った。

「はわ？　そうですか？」

言われてみれば、朱里の恰好（頭に被った長い薄緑のリボン付きの帽子に、やはり長いリボンで腰をとめた、襟元に鈴の飾りの着いたワンピース状のロングスカート）はこの辺では珍しいようだ。（元々いた世界でも、周りの同年代の子どもたちの恰好からは浮いているというツツコミはナシにしてみらいたい）

「あ、もしかして……」

メイドのお姉さんが解ったという顔をする。

「あなた、ミス・ヴァリエールの使い魔になったという……」

「知っているのですか？」

「ええ。なんでも昨日、召喚の魔法で平民の可愛い女の子を呼んでしまったって。噂になっていますわ」

「可愛い……」

一瞬、朱里は照れくさくなったが、ふとお互いに相手の名前を知らないことに気付いた。

「申し遅れましたが、私は諸葛孔明といいます。『孔明』と呼んでいただければいいですよ」

昨日のルイズとの会話で、名前のことでややこしいことになった

ので、もう同じ轍は踏まないと、あえて、できるだけ簡単にいう。

「コウメイちゃんね。ちょっと変わった名前ね。私はシエスタっていいです。よろしく」

「シエスタさんですね。はい、よろしくお願いしましゅ、あう……」

最後の最後に舌を噛んでしまう朱里。そんな朱里を、シエスタと名乗ったメイドの少女は、微笑ましげに見つめた。

ちなみに、洗濯場へ行く途中、朱里が何もなかったところで二、三回ほど転んだことや、洗濯のときに、朱里が子どもらしく自作の「お洗濯の歌」を歌い、それをシエスタが微笑ましげに見ていたことなどは、また別のお話。

*

「おはようございます」

窓から朝日の光が差し込む中、ルイズはその声で目を覚ました。

「ルイズさん、朝ですよ。さあ、早く起きないと」

「う、うるさいわね。あと、もう少し……」

「ダメですよ。朝寝坊は、お肌の大敵ですよ」

「い、言われてみればそうね、て……」

そこでやっと、寝ぼけたままだが、ルイズは我が身を起こした。

「あれ、あんた誰……？」

「孔明です」

「ああ、使い魔ね。昨日召喚した、名前のややこしい……」

そう言っであくびをしたところで、ルイズは気付いた。

「おはようございます」

そこには、昨日自分が召喚した、「使い魔」がいた。しかし、その表情は昨日の様子とは打って変わっていた。

「お、おはよう」

ルイズは思わず片言で挨拶する。

（おかしい）

ルイズは思った。彼女の知っている「コウメイ」は、昨日、あんなに自分に対して猛反発し、ものすごく怒ったかと思ったら、狂ったように泣き出すなど、まるで嵐をそのまま人間にしたかのような感じだった。

しかし、今ルイズの眼に映る彼女は、まるで嘘のように静まり返っている。そればかりか、その表情は、なにか楽しいことでもあったかのように、活き活きとしていた。

「あの、コウメイ……?」

ルイズは訝しげに聞いた。

「はい?」

「その、あんた、怒ってないの?」

「怒っていませんよ?」

思ってもいない返答だった。ルイズは慌てる。

「え? いや、だって、ほら。その、昨日……」

「ああ、昨日のことですね?」

目の前の少女は、ニッコリと可愛らしげに微笑むと、言った。

「過ぎたことをいつまでも気にしていても、仕方のないことです。それに、昨日はお騒がせして、申し訳ございませんでした」

律儀に、ぺこりと頭を下げる。それを見たルイズは、変な気分になった。

（ちょっと待って。なんなのよ、この子。昨日はあんなに怒ってい

て、泣き叫んでいたのに、この変わりよう……。まさか、なんかのワナなの？ コウメイのワナ？)

なぜか、自分でも意味のわからない言葉が咄嗟に思いつく。しかし、そんなルイズなどお構いなしに、目の前の女の子は言葉を続けた。

「そこに脱ぎ散らかされていた服とかは、先ほど洗濯しておきました。他に何かすることはありますか？」

「そ、そう……。ありがとう。なかなか気が利くじゃない。と、とりあえず、服よ、服。服を着せてちょうだい」

「はい」

ニッコリと微笑みながら、ルイズに服を着せてあげる、「コウメイ」こと朱里。そんな朱里の献身的な姿を、最後まで警戒し続けるルイズであった。

*

夜空に上る月は一つ……。

ここは漢帝国十三州の一つ、益州えきしゅうにある漢中郡かんちゅうぐん。

漢王朝の始祖である、高祖・劉邦が宿敵の西楚霸王・項羽を打倒する出発点となった地にして、前後合わせて四百年近く続く、漢王朝の名前の元にもなった地。

そこから、とある一人の人物が、「諸葛亮行方不明」で騒いでいる、水鏡先生の家へと向かい、出発して行くのだった……。

第四席 ルイズ、孔明の畏を恐れるのこと（後書き）

第一回「ルイズと孔明の、ムダ知識講座！」

ルイズ「なにこれ」

朱里「まあまあ、落ち着いてください、ルイズさん。多分ですが、自慢したがりな作者さんのうんちく話なんて、どうせすぐに終わると思いますよ」

ル「それならいいけど」

朱「それでは、話を進めていきましょう。今日のお題はこちらでしゅ、あう……」

『封建制と郡国制』

ル「なにかしら、これ」

朱「つまりですね、ルイズさんの国、トリスティンと、私の生まれた漢王朝の制度の違いということですね」

ル「そういうことなの」

朱「では、ルイズさん。先にお願ひします」

ル「わかったわ。しっかり聞いていなさい！ ま、知ってるとは思うけど、わたしの国はもちろん、ハルケギニアの国々はほぼ全部、魔法を使える貴族が自分たちの領地を持って治めているわ。中には、

ゲルマニアのように、平民が金で領地を買い取って貴族になるという、野蛮なところもあるわね。貴族の当主は当然、爵位を与えられているわ。上から、公爵、侯爵、伯爵、子爵、そして男爵。それ以外には、実績でしか与えられない『シュヴァリエ』があるわ。そしてわたしの実家は名高き公爵家よ」

朱「典型的な封建制の国なんですね」

ル「そうよ。そして当然、爵位も領地も次期当主に継がれるわ。ちなみに、各貴族は、王軍とは別の、自分の軍も持っているし、平民から税金も思い思いに取っているわ」

朱「見方によっては、一種の国みたいですね」

ル「そうね」

朱「ありがとうございます。それでは、次は私が『郡国制』について説明しますね」

ル「わかったわ」

朱「郡国制は、各地を治めるのに、中央が交代で派遣する『太守』が治める『郡』と、皇族や功臣たちが与えられた領地『国』とに分かれている制度のことです」

ル「どうしてそんなややこしいことするのかしら？」

朱「ルイズさんの国のように、各地に諸侯を封じるやり方が、結果として400年にも及ぶ戦乱の時代を招いた教訓から、こういうやり方が生まれました」

ル「400年で、長いわね」

朱「元々は、その戦乱を治めた秦の始皇帝が、定めた『郡県制』に基づいています。このやり方は、諸侯のような存在は生み出しません。しかし、それでは王朝の危機に国を守る基盤がありません」

ル「そりゃ、どこの誰かわからない人間の命令なんか、聞きたくないわよ」

朱「ですから、漢の始祖で、農民出身の劉邦さんは、自分たちが滅ぼした秦みたいにならないよう、皇族や功臣たちを各地の諸侯に封じ、一方で、国の都周辺の要地には『郡県制』を敷きました」

ル「農民が始祖で皇帝？ 意外とやるじゃない」

朱「なお、皇族や功臣たちの中に『王』に封じられた人たちがいました。これを『諸侯王』と呼びます」

ル「諸侯王？」

朱「ルイズさんで言う、『公爵』みたいなものと思ってください。ただし、皇族でない功臣たちの『王』は、ほとんどが劉邦さんの生きている間に、『謀反』を理由に取り潰され、以降、『王』の爵位は皇族に限定されます。皇太子以外の皇子は、この『王』に封じられました」

ル「やっぱり農民だけに、やり方が汚いわね」

朱「結果としては、戦乱で民が苦しむ要素が減ったわけです。しか

し、皇族の王たちも、ハルケギニアの領地を持った貴族たちみたい
に、好き勝手やるようになり、それを劉邦さんの孫にあたる、景帝
さん（劉備のご先祖様と言われる）の時代に抑えようとしたところ、
七人の王による反乱が起こります」

ル「メチャクチャやるわね」

朱「ですが、作戦がお粗末だったことと、民衆が支持したわけでは
ないので、二か月で鎮圧されます」

ル「早っ！」

朱「その後、二度と同じことが起こらないように、各地の王の領地
は削られた上、皇族の『諸侯王』や功臣の『列侯』には通常、軍隊
を組織する権利や税率を決める権利は与えられず、その土地の軍政、
民政は中央から交代で派遣される『相』が行うようになります。そ
して、諸侯たちは、ただ領地から上がった税金を受け取るだけの存
在となりました。次の武帝さんの時代になると、各諸侯王は自分の
男子全員に領地を分割して与えることができるようになりましたが、
結果として、諸侯はますます力を失います。要するに、事実上の『
郡県制』となったわけです」

ル「お父様が聞いたら、顔をしかめそうな話ね」

朱「ちなみに、私の知り合いの劉備さんは、先ほどの景帝さんの息
子、『中山（靖）王・劉勝さま』の末裔と言われています」

ル「へえ、あんたの知り合いに、皇帝の末裔がいたんだ」

朱「はい。ただし、建国から四百年も経っていますので、『皇帝の

子孫』の数は凄いことになっているはずですよ。まして、中山王さんは……」

ル「な、どうしたのよ!」

朱「い、言えません!」

ル「なによ、気になるじゃないの!」

朱「これはだめです! 絶対に言えません! だって、中山王さんの子供の数がゴニョゴニョ……」

ル「なによそれ! 王様どころか、どこのイヌよ!」

朱「はわわ……、と、とにかく以上で講座はお開きです!」

ル（ゲツソリ……）

おしまい

長々とすみませんでした。

続けるか否かは、皆さんの意見に従います。

それでは、次の話をお楽しみに!

第五席 孔明、ルイズと張り合つのこと（前書き）

いろいろあつて遅れてしまい、すみませんでした。
本当はルイズの魔法の失敗まで行きたかったけど、無理でした。
今回はふざけたギャグです。
それでは、どうぞ！

第五席 孔明、ルイズと張り合うこと

「待つて……」

雛里は暗闇の森の中を懸命に駆けた。彼女が今追っているのは、一匹の、虫みたいに小さな、金色の龍だ。しかし、どんなに追いかけても、その距離は一向に縮まらない。

それでも、雛里は追うのを諦めなかった。どうして、ここまでおかしいことをするのか、もはや、彼女自身わかっていないようだ。いや、わかっているからこそ、追っているのかもしれない。

「あつ……！？」

追いかけるのに夢中だったせいだろう。雛里は木の根に躓いて、前のめりに転んでしまった。幸い、たいしたケガはなかったが、起き上がるのに時間がかかった。

「うつ……」

泣きそつになる雛里。

異変が起こったのは、その時だ。突然、目の前の小さな龍が、逃げるのをやめた。

「え……？」

思わず、立ち止まる。すると、金色の龍は、突然、その場で何度

も、とぐろを巻くかのように、周回し始めたのだ。

「あわ……？」

雛里は小さい声を漏らしながら、その奇妙な光景に見とれていた。

と、その時。周回していた龍の光が強くなつたかと思うと、まるで、急に朝日が昇つたかのような眩しい光が辺りを照らしたのだ。雛里は思わず、両手で顔を押さえた。だが、眩しいのも一瞬だった。光はすぐに収束し、夜の森に再び闇が戻つたのである。雛里の目の前を除いて。

「あわー……、これは……？」

目の前にあるものを見て、彼女は目を疑つた。自分のすぐ前、先ほどまで小さな龍のいた所には、まるで大きな鏡のような、縦に細長い、金色の光を放つ物体が現れていたからである。それは、あたかも「こつちに来い」と誘っているかのようにだった。

*

ルイズは朝から機嫌が芳しくなかった。理由は簡単である。身支度が済んだので、朝食のために食堂へと向かうべく、自身の「使い魔」とともに部屋を後にした矢先に、自分にとって「嫌な奴」と出

会ったからだ。

「おはよう。ルイズ」

出会うやいなや、そう挨拶してきたのは、燃えるような赤い髪の、ルイズとは（ついでに朱里とは）身長の高さも、胸の大きさも正反對の、褐色肌の少女だった。

「おはよう。キュルケ」

ルイズは顔をしかめて、嫌そうに挨拶し返した。

「おはようございましゅ、あう……」

嫌そうな顔をしている「主」に一步遅れて、朱里がお行儀よく挨拶した。もっとも、すっかり舌を嚙んでしまったが。

それを見た、キュルケと呼ばれた少女が、クスクスと笑った。

「あら、お利口さんね。ルイズ、あなたの使い魔って、その子？」

「そうよ。それがなに？」

「あつはっは！ 本当に人間なのね！ すごいじゃない！ しかも、こんなにお利口さんとするなんて！ まるで『誰かさん』とは大違いだわ！」

キュルケのこのセリフに、ルイズはますます不満そうに顔をしかめた。しかし、お構いなしと言わんばかりに、キュルケは言葉を続ける。

「いずれにしても、『サモン・サーヴァント』で、平民喚んじやうなんて、あなたらしいわ。さすがはゼロのルイズ」

「うるさいわね」

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って、一発で呪文成功よ」

「あつそ」

「はわわ、ケンカはだめです」

「大丈夫よ、お嬢ちゃん。ま、お嬢ちゃんみたいなお利口さんもいけど、どうせ使い魔にするなら、こういうのもいいんじゃないかしら。ねえ、フレイムー」

こんなやり取りの後、勝ち誇ったかのような声で、キュルケは自分の使い魔を呼んだ。キュルケの部屋からのっそりと現れたのは、真っ赤で巨大な、むんとした熱気を放つトカゲだ。それを見た朱里は、驚いて腰を抜かしかけた。無理もないであろう。元いた国でさえ、クマや虎などの猛獣に追いかけられたり、出くわしたりしたことがあるからだ。

「はわわわー!?!」

「おっほっほ！ 驚かなくても大丈夫よ、お嬢ちゃん。あたしが命令しない限り、襲ったりはしないから。臆病ちゃんね」

「なんなのですか、これ!?!」

朱里が聞く。

「あら、もしかしてお嬢ちゃん、この火トカゲを見るのは初めて？」

「はい！ それより、そばにいて、熱くないのですか？」

朱里の言うとおりだ。虎ほどの大きさのある、その火トカゲは、尻尾が燃え盛る炎でできている上に、口からもチロチロと火炎がほとばしっていた。しかし、火トカゲの「主」たるキュルケは気にしている様子はない。

「あたしにとっては、涼しいくらいね」

「これって、サラマンダー？」

ここでようやく、ルイズが口を開いた。気のせいかな、悔しそうな表情が見て取れる。

「そうよー。火トカゲよー。見て？ この尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ？ ブランドものよー。好事家に見せたら値段なんかつかないわよ？」

「そりゃよかったわね」

「『ぶらんど』が何かはわかりませんが、とにかく、すごいですう」

「素敵でしょ。あたしの属性ぴったり」

「あんだ『火』属性だもんね」

「ええ、微熱のキウルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱。でも、男の子はそれでイチコロなのですわ。あなたと違ってね？」

キウルケは得意げに胸を張った。ルイズが負けじと胸を張り返したとき、朱里は召喚されて以来、初めて「ご主人様」に同情することになった。ルイズの方でも同じことを考えたかはわからない。それはともかく、かなりの負けず嫌いらしいルイズは、ぐっとキウルケを睨みつけた。

「あんたみたいに、いちいち色気振りまくほど、暇じゃないだけよ」
キウルケはにつこりと笑った。余裕の態度だった。それから朱里の方を見つめる。

「そつえばお嬢ちゃん、お名前は？」

「あ、はい。諸葛孔明といいます」

「シヨカツコウメイ？　ヘンな名前」

「あう。その、呼びにくかったら、孔明でいいですう」

「コウメイちゃんね。わかった。それじゃ、頼りないご主人様をよろしくー」

「一言多いわよ！」

「じゃあ、お先に失礼」

こんなやり取りの後、キュルケは颯爽と去って行った。ちょこちよこと、大柄な体に似合わない可愛い動きで、サラマンダーがその後を追う。

「くやしー！」

キュルケがいなくなると、ルイズは拳を握りしめた。

「なんなのあの女！ 自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって！ ああもう！」

「はわわ、お、落ち着いてください！」

朱里が懸命になだめようとするが、ルイズの怒りは収まらない。

「落ち着けるわけじゃないの！ メイジの実力をはかるには使い魔を見ろって言われているぐらいよ！ なんてあのバカ女がサラマンダーで、わたしがあんななのよ！」

「お気持ちはわかりますが、落ち着いてください！」

「うるさい！ 平民なんかはわたしの気持ちがわかるわけなくせに。だいたい何よ、胸なんかツルペタのくせして」

「なんですって！？」

今のは、流石の朱里も力チンときた。他のことはともかく、胸のことを言われる筋合いはないからだ。朱里は顔を真っ赤にして怒った。

「貴族か平民かはともかく、なんで急に胸の話になるのですか！」

「なによ、本当のことをいっただけじゃない！ わたしはあの女と比べたら全然及ばないけど、それでもあんたよりはあるわよ！」

「それが『めいじ』の実力とどう関係があるのですか！？」

「うつ。いや、それは。と、とにかく、あんたみたいな『お子様』なんかよりは、わたしのほうがまだあるの！ これは変えられない事実よ！ わかったら、さっさと認めなさい！」

「誰が認めるのですか！」

「うるさい！ 事実は事実なの！」

「負けませんよ！」

「何を！」

ドングリの背比べもいいところであろう。朝ご飯前だというのに、二人の間には、「グラマーな女性」には絶対に見えることのない、凄まじい火花が飛び散っていた。

もつとも、同じ「お子様体系」でも、とある青い髪の少女は、この争いを見て「今日も平和」と言わんばかりに無視して通り過ぎていたが……。

その後、朝ごはんの際、自棄食^{やけ}いする少女の姿が見られたという。

＊

余談だが、流石のルイズも、育ち盛りの女の子である朱里に、使
い魔の動物たちのような餌をあげるわけにはいかず、かといって貴
族専用の食堂のテーブルで食べさせるわけにもいけないので、どう
しようかと困っていたところ、たまたまずれ違ったメイド（偶然に
もシエスタ）に頼んで、厨房で適当に食べさせてあげることにした。

その際、料理が得意な朱里は、厨房のコック長、マルトー親父を
はじめとした料理人たちと意気投合し、そのことが、人知れず、魔
法学院内の、後にはトリステイン王国の食文化史上、大きな影響を
与えることになるのだが、それはまた先のお話。

第五席 孔明、ルイズと張り合つること（後書き）

第二回「ルイズと孔明のムダ知識講座！」

ル「また始まつたわね」

朱「まあ、大目に見て付き合つてあげましょう。それでは、今回のお題はこちらでしゅ、あう……」

ル「また噛んでるわよ」

『○○が無いなら？？を食べる』

ル「今度はなにかしら」

朱「なんでも、まずは次の小劇場を見てほしいそうです」

（小劇）（出演者の名誉の保護のため、匿名にてお送りします）
ナレーター「あなたは次の映像をどう思いますか？」

Gさん「麗〇様！ 大変です！」

Eさん「あら、斗〇。どうしましたの？」

G「領内で農作物が不作で、民たちは皆困っています！」

E「そんなこと私に聞かれても知りませんわ！」

Bさん「でも、流石にまずいっすよ。あたいらの食べるものも減っちゃうんですから」

E「大丈夫ですわ、猪〇子。解決策は、ちゃんとあります！」

G「本当ですか？」

B「さすがは麗〇様！ それで、解決策は？」

E「農作物が不作なら、お肉を食べればいいじゃありませんか！」

B「さつすが麗〇様！」

G「うえーん。ダメだよ、これー……」

（小劇おしまい）

ル「いや、なんていうか……」

朱「救いようのないとは、こういうことをいうのでしょうか？」

ル「で、これが今回のテーマとなんの関係が？」

朱「はい。今の上の劇の話ですが、作者さんいわく、似たような話が、洋の東西を問わず、あるとのことですよ。」

ル「例えば？」

朱「はい。まずは西から行きましょう。作者さんの話によると、ルイズさんのトリステイン王国は、実際の歴史における、『ブルボン朝フランス』を元になっているそうです」

ル「それで？」

朱「ブルボン朝を襲った事件と言えば、『フランス革命』ですが、その直前、飢えに苦しむ民衆に王妃が言ったと言われるのが次の一文です」

マリー・アントワネット『パンが無いならお菓子を食えばいいじゃない』

ル「いや、無理でしょ」

朱「そうですね。小麦がないなら、パンもお菓子ありません。ただし、この話は、王朝の悪を誇張するための作り話であったという説が最近は有力だそうです」

ル「それじゃ、次は東をお願いするわ」

朱「はい。次は東ですが、こちらは私たちの元になった、『三国志の正史』の少し後のお話です。正史において、私の元になったのが、『諸葛孔明さん』ですが、その宿敵として有名なのは、魏の軍人、『司馬仲達さん』です。問題のセリフを言った人は、この仲達さんの『ひ孫』にあたります」

ル「英雄の子孫が、ね。よくあるパターンじゃないの」

朱「はい。仲達さんのひ孫、晋の二世皇帝、恵帝さんが問題の発言をした人物です。飢饉で穀物が不作で人々が困っているときにした発言が問題となっています。その発言は次の通りです」

晋の恵帝（司馬衷）『（穀物が無いなら）どうして貧民どもは、肉粥を食べないのか？』

ル「本当に救いようがないわね」

朱「この話は、どうやら実際に言ったと言われています。私の元になった人の『宿敵』の血をひく人間とは、とうてい思えません。余談ですが、その恵帝さんの父、武帝さん（司馬炎、仲達の孫、司馬昭の子）も食べ物に関するお話があります。ある日、家来の方に酒宴に行った時の話です。それがこちら」

晋の武帝（司馬炎）「うむ」

家来「どうです、この蒸し豚料理は」

武帝「うまいじゃないか。そうだ、どうしたらこんなにうまくできるのだ？ 何か、調理法にコツでもあるのか？」

家来「はい。その豚は、『人の乳で育てた豚』にございます」

武帝「……ウゲ……！？」

ル「聞いただけで、吐き気の話ね」

朱「はい、いくらルイズさんが高慢でぜいたくな食事をされているとはいえ、ここまでではされないですからね」

ル「何気にひどいこと言ってるじゃないの！」

朱「とにかく、いつの世も、下々の生活を知らない為政者とは、かわいそうなものだと言っておきましょう」

ル「無視しないでよ！」

朱「ルイズさん。あなたもこの話を聞いた以上、贅沢は慎んでくださいね。でないと、あなたの料理に『例の豚』を……」

ル「わ、わかった、わかったからー！」

朱「さて、今日はここまでです。みなさん、食べ物は何に粗末にしてはいけませんよ」

ル「……心得たわ……」

おしまい

第六席 ルイズ、大失敗すること（前書き）

さて、今回は初めての授業です。
どうぞ！

第六席 ルイズ、大失敗すること

「今、すつごく光ってたけど、なんだったのかなー？」

暗闇の森の中で、桃香は松明を片手に、恐る恐る歩いていた。

彼女は朱里の手掛かりを求め、松明の明かりを頼りに搜索を行っていたのだが、先ほど、自分のいるところからやや離れた場所で、突然、不自然な光が辺りを照らしたのを目撃したのだ。いったい何事かと思った彼女は、その光の発生源と思しき所へと向かうことにした。

その場所に着くのに、そんなに時間はかからなかった。だが、桃香はそこで、思いもよらないものを見ることがとなった。

「あれは、鳳統ちゃん？」

彼女が見たのは、水鏡先生の家で待っているはずの、幼き少女、
鳳統　　すなわち雛里だった。

「どうしてこんなところに？」

疑問に思いつつも、すぐに声をかけようとした。だが、その時、
どうも様子がおかしいことに気付いた。

「ん、あれは？」

一瞬、声をかけるのをためらった。桃香が次に見たのは、雛里の

すぐ前にある、金色に輝く、得体のしれない鏡みたいな物体だった。そして、次の瞬間、彼女は目を見張った。なんと雛里が、その鏡み
たいなものに向かって歩き出したのだ。

それを見た桃香の背筋に緊張が走った。なぜかはわからないが、
嫌な予感がしたからだ。

「待つて、鳳統ちゃん！」

慌てて止めようと、松明を放り出して走りながら、声を振り絞つ
て叫ぶ。だが、もう遅かった。桃香が声をあげたとき、すでに雛里
の小さな手は、金色の物体に触れてしまっていた。

その時である。再び、辺り一帯が眩いばかりの光に包まれたのは。

「うっ、な、なに!？」

眩しさのあまり、桃香は目をつぶり、その上から両手で覆った。
それは強烈な光であった。しかし、それもすぐに止む。やがて、夜
の森は、再び暗闇を取り戻した。

「うっ、眩しかったよー。あれ？」

ようやく眩しさから解放された桃香が異変に気付く。

「鳳統ちゃんは、どこ？」

思わず、その名前を口にして、自分の目の前を確かめる。

そこには、何もなかった。先ほどまで目の前にいた、雛里の姿はど

こにも見当たらない。そして、ついさっきまであった、金色の鏡みたいなものもなかった。唯一動いているのは、後ろにある、先ほど桃香自身が落してしまった松明の残り火だけだった。

「まさか、鳳統ちゃん……鳳統ちゃんまで……」

桃香はすべてを悟った。朱里に続き、雛里までもが姿をくらましたということに。

その後、桃香は辺りを懸命に捜してみたものの、何一つ手掛かりを見つけることができなかったため、今見た光景を皆に伝えるべく、急いで水鏡先生の家へと向かうこととなる。

*

「はわー、大きな部屋ですう」

魔法学院の教室に初めて入った朱里は、感嘆の息を漏らした。

元いた世界でも、いろんな所を旅してきたが、このように、大勢の人間が集まって、授業を受ける場所を見るのは初めてだったからだ。朱里とて軍師である以前に、好奇心旺盛な子どもである。思わず、あちらこちらに目線が行ってしまう。そんな普通の子どものような朱里を見て、ルイズは自分でも気付かないうちに、思わず微笑

ましくなりそうだったが、すぐに表情を引き締める。

「いろいろ見るのは構わないけど、あまり騒がないでよ」

「わかっていますよ、もう」

子ども扱いされたためか、まだまだ子どもな朱里は、可愛らしげに頬を膨らませた。シエスタの時もそうだったが、傍目から見れば、また別の意味で姉妹のようにもみえたことであろう。

部屋の奥に入っていくにしたがって、次第に人の数が増えていく。そこにいるのは、ルイズと同じように、黒いマントを着た少年少女たちである。皆、それぞれの使い魔を連れていた。フクロウ、ヘビ、カラス、猫など、朱里の世界でもいる動物から、全然見たことのない生物もいる。これでは、見とれるなという方が無理である。

「あの足のいっぱいあるトカゲはなんですか？」

「バジリスクよ」

「あの目の玉お化け見たいなの？」

「バグベア」

と、まあ、このような会話が繰り返しているうちに時間が過ぎたのである。

まもなく授業が始まるというので、朱里はとりあえず、教室の後ろの方に控えることにした。（ルイズ曰く、使い魔は椅子に座ってはダメとのことなので）

やがて、扉が開いて、先生らしき女性が入ってきた。紫色のローブに身を包み、形だけなら雛里のそれに似た三角の帽子を被った、温厚そうなおばさんだ。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

その先生は、満足そうに微笑みながらこう言った。そして、ふと後ろの方にちょこんと控えている朱里の方を見ると、再び口を開いた。

「おやおや。中には可愛らしい使い魔を召喚した人もいるみたいですね」

シュヴルーズという先生は、半分褒め言葉で言っただつもありだったらしい。だが、これが思わぬ火種となったようだった。

「おい、ゼロのルイズ！ 召喚できないからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

そう言ったのは、ややぼつちやりした体系の少年だった。直後、教室中がどつと笑いに包まれる。

「違うわ！ きちんと召喚したもの！ そしたらこの子が来ちゃっただけよ！」

ルイズが負けじと言い返す。

「嘘つくな！ 『サモン・サーヴァント』ができなかったんだらう？」

教室中の生徒が、ゲラゲラと笑う。朱里は最初、何が起こったかわからなかったが、やがて理解した。ルイズが皆からバカにされているのだ。それにしても、わからないものである。何が可笑しくて、皆こんなに笑っているのか。始めのうちは黙っていたが、とうとう口を開かずにはいられず、朱里は自らの声を張り上げた。

「静かにしてください！」

思わぬところからの大声に、一瞬、何事かと呆気にとられた生徒たちが、一斉に朱里を見た。急に集まった視線に、思わず恥ずかしくなるものの、朱里は元々、正しいと思ったことは、面前に刃を突き付けられても言い通す性格である。勇気を振り絞って、次のセリフを口にした。

「皆さん、いったい、ここに何をしに来ているのですか！？ 魔法の勉強しに来たんでしょう！ それがいっ、他人の悪口を言う勉強になったんです！？ 恥ずかしいと思いませんか！」

しばらく、教室中が沈黙に包まれた。誰も、うんともすんとも言わない。

一番初めに、我に返ったのは、先生であるシュヴルーズだった。彼女はコホンと咳をする振りをすると、皆に言った。

「そうですよ、皆さん。ケンカしている場合ではありません。それでは、授業を始めましょう」

その後の授業は、しばらくは順調だった。

*

ルイズは複雑な気分だった。自身の使い魔の「コウメイ」のことのせいである。

（あの子、いつたい何者なのかしら？）

そう思わずにはられない。今朝になってからというものの、前日の嵐のような態度とは打って変わって、自分のためによく働いてくれたかと思ったら、くだらないことで張り合う。教室や生物を見て、見かけどりの子どものようににはしゃいだかと思えば、たった一言、二言で貴族だらけの教室を静かにさせてしまう。そして今は、後ろの方に控えながら、真面目に授業を聞いている。先ほど、シュヴルーズが「鍊金」の魔法で赤土を真鍮に変えた時には、新しい玩具を与えられた子どものように、小さく歓声を上げながら興味津津と見ていた。

（なんと言うか、ただの子どもにしては、いろいろと凄すぎる）

そんな風に、頭の中が朱里のことではいっぱいだった。だから、ついつい余所見をしてしまったのである。

「ミス・ヴァリエール！」

シュブルーズの注意が飛んだ。余所見しているのを、見咎められてしまったのだ。

「は、はい！」

「授業中にどこを見ているのです？」

「すみません……」

「余所見をする暇があるのなら、次のお手本をあなたにやってもらいましょう」

「え？ わたし？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてもらなさい」
気まずい沈黙が流れた。

*

（そう言えば『ぜろ』ってなんだろう？）

朱里は考えていた。なんでも、この世界の魔法使い「メイジ」には、それぞれ「二つ名」というものが存在するらしいことは、人の会話を聞いているうちにわかった。それが「微熱」だの、「風上」だの、「赤土」だのならば、その人の得意な魔法に由来するものであることは、容易に想像がついた。

しかし、朱里は「ゼロ」という単語の意味を知らない。ただ、先ほどの言い争いから想像するに、あまりいい意味ではないようだった。（そうだ。授業なら、きつとルイズさんも魔法を使う機会があるはず。その時にわかるかも）

そう思った朱里は、ルイズが魔法を使う瞬間を、今か今かと待っていた。そして、ついにその時がきたのだ。だが、どうも様子がおかしかった。

「ミス・ヴァリエール。どうしたのですか？」

先生が催促する。しかし、ルイズは困ったようにもじもじするだけだ。その時、朱里の知っている顔が立ちあがった。朝に出会った、キュルケだ。

「先生、やめといたほうがいいと思いますけど」

「どうしてですか？」

「危険です」

（危険？）

疑問に思っ朱里。そんな彼女をよそに、教室中の生徒全員が、キ
ユルケに同調して、うんうんと頷く。

「危険？ どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いています。さあ、ミ
ス・ヴァリエール。気にしないでやってごらんなさい。失敗を恐れ
ていては、何もできませんよ？」

「ルイズ、やめて」

キユルケが蒼白な顔で言ったが、ルイズは諦めるどころか立ち上が
ったのだ。

「やります」

緊張した顔で、教室の前へと歩いて行くルイズ。そして、先生の
指示の元、杖を振り上げた。

朱里は思わず見とれていたが、その時、足元の方から声がした。

「コウメイちゃんだっけ？ 早く隠れた方がいいわよ」

言ったのはキユルケだった。彼女は既に椅子の下に避難しており、
そのすぐ隣では、眼鏡をかけた、青い髪の女の子が同様に隠れなが
ら、「コクリ」と頷いていた。

「え、それってどういう」

聞き返そうとしたときだった。凄まじい爆発が起こったのは。

何が起こったのか、確認する暇もなかった。教室の後方にいたにもかかわらず、朱里はもろに被害を受けることになった。爆発の際の爆風をもろに受けたため、朱里の被っている帽子が吹き飛んだばかりか、彼女の小柄な体は床に叩きつけられた。幸い、たいしたケガはなかったが、床に叩きつけられた朱里は、またしても目を回して気絶する羽目になり、おまけに煤と煙で服も汚れるという、踏んだり蹴ったりな目に遭ったのであった。

周りで様々な使い魔たちが暴れまわり、阿鼻叫喚の地獄が繰り広げられる中で、朱里が唯一わかったことは、「ぜろ」の意味が、「成功率が零^{れい}」である、ということだけだったのである。

（拝啓、皆さん。私、頑張ると約束しましたが、やはり先が思いやられるようです）

意識が薄れゆく中、朱里はこう思った。

第六席 ルイズ、大失敗すること（後書き）

第三回「ルイズと孔明のムダ知識講座！」

ル「もう三回目？ しぶといわね」

朱「そうですね。はたして何回まで続くのでしょうか？」

ル「そんなの知らないわ。まあ、百回続けば、ほめてあげてもいいわ」

朱「そうですね。それでは、今回もそろそろ始めましょう。今回のお題はこちらでしゅ、あう……」

ル「『二度あることは三度ある』て本当みたいね」

『錬金術』

ル「錬金、ね」

朱「はい。本編でもやっていましたが、今回は錬金についてやりたいと思います」

ル「それじゃ、頼むわよ」

朱「はい。『錬金術』は、これも洋の東西を問わずに行われたもので、名前の通り、金を作り出す技術を、やがては不老不死の薬を作ることが目的になって、盛んに行われたものです」

ル「魔法があるハルケギニアなら、金属を作るための錬金は当たり前に行われているけど、不老不死の手段は流石に無いわね」

朱「はい。ですが、昔の人々は、様々な金属や鉱物、薬を研究し、それをもとに、人工的に金や『霊薬』を求めたといいます。ことに、西側の錬金術師たちの目標は、ありとあらゆる物を金に代え、さらには永遠の命を与える霊薬『エリクサー』を生み出す、『賢者の石』を作るのに躍起になっていたといえます」

ル「凄いことするわね。で、結果は？」

朱「もちろん、上手くいくわけはありませんでした。ただし、様々な金属や物の研究には役に立ったことでしょう。さて、次は東の話をお願いします」

ル「わかったわ」

朱「漢の高祖、劉邦さんがまだ一人の農民だったころ、時の大陸を支配していたのは、秦王朝の『始皇帝』でした。始皇帝は、天下を統一し、すべてを我が物とした頃から、不老不死を求めるようになります」

ル「それで？」

朱「そういうわけで、始皇帝は『神仙』を説く『方士』たちを大勢抱え込むようになり、彼らに薬を探させたり、作らせたりします」

ル「なんか、胡散臭いんだけど」

朱「はい。実際に、徐福という人が、仙人の島から不老不死の薬を

もらってくると、始皇帝を説き伏せ、大量の金銀財宝と大勢の童男童女を連れて、東にある仙人の島へと船で出発したきり、行方不明になったという話もあります」

ル「もし、最初から騙すつもりだったなら、とんでもない詐欺ね」

朱「そうですね。なお、一説では、徐福は倭国（日本）で無くなっただとも言います。さて、話を錬金術に戻しますが、始皇帝が作らせた『不老不死』の薬とは何だったのかを見ていききたいと思います」

ル「あまりいい予感はないわ」

朱「その通りと言わねばなりません。その不老不死の薬は、『仙薬』、『金丹』などいいましたが、その材料は以下の通りです」

材料

・水銀

・ヒ素

・鉛

・強酸性の液体

その他

ル「て、全部毒じゃない！」

朱「そうです。しかし、いつの世にも迷信があり、特に水銀などは不老長寿の霊薬とされていました。ですから、始皇帝の食事には水銀が混ざってありましたし、始皇帝のお墓、『始皇帝陵』の地下宮殿には、水銀の海と河が作られ、機械仕掛けで絶えず流れるようにしてあったといえます」

ル「ぞつとするわね」

朱「ですから、そんな状況で、始皇帝が49歳まで生きれたことが不思議と言わなければなりません」

ル「そりゃ、驚くわよ！ それにしても、不老不死を求めているのに、なんで自分のお墓を作るのかしらね」

朱「昔の人のことはよくわかりませんので……」

ル「ま、とにかく、わたしはそんな変な薬なんかいらないわ」

朱「そうですね。たとえば、貴族であろうと、平民であろうと、一生懸命、楽しく生きるのが一番ですね」

ル「なかなかいいことじゃないの。よし、それならこれからも楽しく」

朱「ルイズさん。楽しくと言っても、朝からお酒を飲んだり、脂っこいものばかり食べてはいけませんよ。自分の体、くれぐれも大事にしてくださいね」

ル「わ、わかってるわよ！ それくらい！」

朱「それでは、皆さん、また次回会いましょう」

ル「見ないと許さないんだからあ！」

おしまい

第七席 孔明、ルイズを慰めんとすること（前書き）

やっとできました。

今回、恋姫世界はギャグです。

それでは、お楽しみください。

第七席 孔明、ルイズを慰めんとすること

ここは、？州泰山郡^{えんしゅたいざん}。名前の通り、道教の聖地、五岳^{こがく}の一つである、泰山のそびえ立つところである。この聖地は、かつて秦の始皇帝、前漢の高祖・劉邦やその曾孫の武帝・劉徹、そして後漢の始祖、光武帝・劉秀などの偉大な歴代皇帝たちが「封禅」の儀式を行ったことで知られている。

孔明、鳳統の両名が行方不明になって三日後。水鏡宅にて未だに懸命の搜索が続いている中、そんなことは知らない者たちが、呑気にもこの山の麓に集まっていた。

「美羽^{みづ}さん！　なんであなたがここにいますの？　小娘はさっさとお家に帰って、蜂蜜でもなめていればいいのですわ！」

「それは妾^{めかけ}の台詞^{だいし}じゃ。麗羽^{れいふ}義姉^{あね}さまこそ、なんでここにいますのじゃ？」

片方は見事な金髪ロールの、見るからに高飛車そうな外見の女性。もう片方は、さらっとした長い金髪を青いリボンで飾った、見るからにわがままそうな小娘。

金髪ロールの女性は言うまでもなく、冀州^{きしゅう}一帯の太守にして、名門「袁家」の当主こと袁紹（字は本初。真名は麗羽）。家柄を鼻にかけて、傲慢で贅沢ばかりしている、無能な領主として有名だ。

もう一人の小娘の方の名は袁術（字は公路。真名は美羽）。袁紹こと麗羽の従妹で、幼い外見に似合わず、一応は荊州^{けいしゅう}の南陽郡の太

守の肩書きを持つのだが、外見通りの幼い性格で、非常にわがままで、蜂蜜を舐めることにしか能がないが、何故か歌だけは非常に上手な女の子である。

どうして、名門出身のこの二人が、わざわざ自分の領地を遠く離れた泰山の地まで来ているのかというと、それは次のような経緯からであった。

『某月某日に、泰山の頂上にて、神への祈りを捧げし者、宝を手にしん』

大陸のあちらこちらで、このような怪しげかつ、胡散臭い予言が広まっていた。いつもあるような馬鹿馬鹿しい話で、こんなうまい話があるわけがないと、誰もが無視していたのだが、ちょうど、洛陽での宴会から自分の領地に帰ってきたばかりの、袁家の両頭は、さっそくこの噂に飛びつき、わずかなお供だけを連れて、のこのこと泰山までやって来たのである。

仮にも太守である者たちが、自分の領地を放り出して、わざわざ遠き泰山に赴くなど、暇にもほどがあるというものだが、この二人にはそのようなことを言っても通用しないようだった。

ただし、麗羽にしろ、美羽にしろ、互いに想定していないことがあった。山の麓で鉢合わせになったことである。

従姉妹同士であるこの二人は、犬猿の仲で、しばしば張り合うこととで有名であった。

「いいですか、美羽さん。名門たる袁家の当主はこの私なのです。よって、この高貴な私こそ宝を手にする資格があるのですわ」

「なにを言うのじゃ！ そんなのは全然関係ないのじゃ！ 妾にだってその宝を手にする資格くらいはあるのじゃ！」

「いいえ、ありません」

「あるのじゃ！」

「ありません！」

「あるのじゃ！」

キリのない喧嘩を繰り広げて、睨みあう二人。そこへ、袁紹軍の「知力36」こと、顔良（真名は斗詩）が割って入る。

「麗羽さま、それから袁術さまも落ち着いて。このままケンカばかりしていると、日が暮れてしまいますよ」

「そうでしたわ。こんな小娘にかまっている暇などありませんわ」

「一言多いのじゃ」

「まあまあ、お二人とも」

斗詩の懸命の取りなしのおかげで、ひとまずその場は収束する。

「それより、さつさと登っちゃいましょうよ。どうせ頂上まで行かないといけないんだしさ」

そう言ったのは、袁紹軍二枚看板のもう一人である文醜（真名は

猪々子）である。彼女たちは、麗羽や美羽が言い争いをしていた間、ずっと待たされていたのだ。

「それに、山登りはいい運動になるし、ちょうど斗詩のおなかの肉も」

「余計なこと言わないで！」

「おっと」

「そうですね。先手必勝、さっさと登るに限りますわ。まあ、もつとも……」

そう言つて、麗羽は美羽の方をチラッと見る。

「こんな足腰の弱そうな小娘、どうせ半分も登らないうちに、くたばってしまうでしょうけど」

「むう、なにを！」

「おーほっほっほー！」

言いたい放題である。

「さて、猪々子、斗詩。さっさと行きますわよ！」

「「はい、麗羽さま！」」

好きなだけ言いまくと、麗羽は猪々子と斗詩を連れて、泰山の頂上を目指して先に出発していった。

「むうー、馬鹿にしおって！ 張勳！」

悔しくなった美羽は、すぐ後ろにいる側近の張勳（真名は七乃）を呼んだ。

「はい、美羽さま」

「妾たちもさっさと登るのじゃ！」

「ですが、美羽さま。何の準備もなしに、こんな険しい山道を登れば、冗談抜きに途中でへこたれてしまいますよ」

たしかにその通りだ。泰山はただでさえ険しい山で、まして美羽のような子どもが簡単に上り下りできるような山ではない。

「むう、たしかに。それなら張勳。お主がなんとかせい」

「ご心配なく。実はこんなこともあるつかと、きちんと対策もとっています」

そう言って七乃は一枚の地図を広げる。

「さすがは張勳。で、対策とはなんなのじゃ？」

「はい。じつは袁紹さまたちの知らない、秘密の抜け道があるんです」

「ほう、それなら楽勝ではないか！」

美羽の顔が、ぱあつと輝く。

「よし行くぞ、張勳。宝は全部、妾のものじゃ！」

「さっすが美羽さま。終わりよければすべてよし、な横着な考え方。聞いてて惚れ惚れしますわ」

「わっはっは！ 苦しゅうない、もっと褒めてたも」

こうして、欲望の詰まった登山レースの幕が明けたのであった。

ところで、「愚者と愚者とが会いしとき、事故は起こる」という。はたして、彼女たちはその言葉の意味を実現してしまうのだが、その時には宝のことに夢中で、思いも及ばなかった。

*

爆発でめちゃくちやになった教室で、朱里はルイズと共に後片付けをしていた。

他に手伝う者がいないのは、教室を吹き飛ばしたルイズへの「罰」であるため、唯一、「使い魔」である朱里だけが連帯責任で働いていた。

幸い、朱里は手先が器用なので、壊れた物を修理したり、新しく作り直したりはできた。しかし、力の問題だけではどうにもならないおかげで、重い物を運ぶのには苦労したものだ。もっとも、時間的に余裕があれば、重いものでもすぐに運べる道具を作ることでもできたに違いないが。

結局、かなりの時間がかかったものの、それでもなんとか教室の外見だけは取り繕い、あとは煤や埃をほうきで掃くだけとなったので、朱里はほうきで塵を集めていた。

床を掃いているときに、ふとルイズの方を見る。彼女は、雑巾を片手に、机に寄りかかっていた。机を拭いているというよりは、うな垂れていると言っべきであろう。

朱里はそつと、声をかけた。

「ルイズさん？」

「なによ」

ルイズが元氣のない声で、ぶつきらばうに返事する。

「その、あまり気にしない方がいいと思いますよ」

「気にするに決まっているじゃないの！」

朱里はなんとか立ち直つてもらおうと思ったのだが、ルイズからの返答は、悔しさの入り混じった怒鳴り声だった。

「いつやつてもああなるのよ！　どんな呪文を唱えても、爆発よ！

一度だつて、成功したためしがないわ！ おかげで、失敗するたびにキュルケや他の皆からはからかわれるし、先生どころかお母さまやお姉さまたちまで首を傾げるのよ！ あんたなんか何がわかるのよ！」

自分の感情を隠しきれず、一気に言葉を吐き出す。その声色と表情から、ルイズが今までどんなに悔しい思いをしてきたかが、朱里にもよく伝わった。

朱里はしばらく目を閉じて考える。

（もし、水鏡先生が、今の話を聞かれたら、なんて言うかな？）

ふと、そう考える。たしかに、水鏡先生なら相談に乗ってくれるかもしれない。だが、現に話を聞いたのは朱里であり、当然、水鏡先生はこの場にはいないのだ。

（いけない）

朱里は慌てて首を横に振った。

（これは私がなんとかしなくちゃ）

そして、意を決して口を開く。

「ルイズさん」

「なによ」

「確かに、魔法を使えない私には、ルイズさんの気持ち全部わか

るわけではありません」

「当たり前じゃないの！ 平民なんかに貴族の気持ちがわかるわけ

」

「最後まで話は聞いてください！」

朱里は少しだけ声を張り上げ、ルイズを諭した。

「確かに、『魔法を使えない私』に、ルイズさんの気持ちに『全部』わかるわけではありません。ですが、『魔法を使えない』からこそ、わかることもあるんです」

「どういうことよ」

訝しがるルイズに対し、朱里はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「一つお聞きしますが、ルイズさんが魔法を使おうとすると、いつも爆発してしまうのですね？」

「そうよ」

「成功したことは？」

「だから、一度もないって言うてるでしょう！」

馬鹿にされたと思ったのか、今にも怒りそうな表情のルイズ。しかし、朱里は首を横に振ると、いたって冷静に話を続ける。

「だいたいわかりました」

「なにがよ」

「ルイズさん。まず、あなたが魔法を使おうとすると、どういうわけか必ず爆発する。魔法を使える人たちから見れば、『ルイズさんは、魔法を使えば必ず爆発する』としか映らない。だから『ぜろ』すなわち『零』という二つ名が付けられる」

「それがどうしたというのよ！」

「まだ話は続きます。今言ったのは、『魔法を使える人から見たルイズさん』です。ですが、私のように『魔法を使えない人』から見たルイズさんはどうでしょうか？」

「どうせ同じことでしょう、平民の考えなんて」

貴族ゆえに平民を軽視するようなことを言う。こればかりはルイズ一人の責任ではないので、どうしようもないが、朱里は黙って次の言葉を言った。

「私に言わせてみれば、そうではありません。少し考えてみてください。いいですか？ 『魔法を使えない人』から見ればルイズさんは『魔法は失敗ばかりだけど、爆発させることだけは誰にも負けない』と映るんですよ」

「え？」

一瞬ルイズは呆然とした。「平民から見た自分」のことなど、今まで考えたことなどなかったからだ。しかし、すぐに気難しそうな表情でそっぽを向く。

「た、たしかにそういう考えもあるみたいね。だけど、『爆発させることだけは誰にも負けない』なんて、あまりうれしくないわ」

「その言葉をどう捉えるかは、ルイズさん次第です。ただ、私に言えることは、ルイズさんの二つ名は、『一度も成功できない』の『零^{ぜろ}』ではなくて、『一つだけできる』の『一^{いち}』の方がふさわしいのではないかということです」

「『一』ね……」

あまりしつくりとこないのか、少し考えるルイズ。そんなルイズを見て、朱里は微笑ましげに言う。

「はい。それに、ルイズさんは一度だけ、魔法が成功したことがあるって、私はちゃんと知っていますよ」

「は？　いつよ、それ」

首を傾げるルイズを前に、朱里は楽しそうに微笑む。しばらくして、ルイズはハツとした。何かが解ったようだ。

「まさか、それ、わたしがあんたを召喚したこと、とか言わないわよね」

気のせいかな、眉がひくひくと動いている。

「馬鹿を言わないでちょうだい！　誰があんたを召喚したことを『成功』だなんて、認めてやるか！」

そう言つと、だいたい片づけ終わった教室を後目に、ずかずかと歩き出す。

「ほら、ぼさつとしてないで。さつさと昼ご飯に行くわよ！」

「はい！」

こうして、二人は食堂に向かうことになった。

その途中、歩きながらルイズは口を開いた。

「あと、コウメイ。その、なんて言うか、ありがとう

」

彼女なりに感謝の言葉を述べたつもりだった。しかし、残念ながら、朱里にこの言葉が届くことはなかった。なぜなら、ルイズがこう言つて振り向いたとき、朱里ははるか後ろの方で、転んでいたからである。

同時刻、召喚の立会人だったコルベール先生が、図書館にて、とある本を片手に慌てていたのは、別のお話である。

第七席 孔明、ルイズを慰めんとすること（後書き）

第四回「ルイズと孔明のムダ知識講座！」

ル「とうとう四回目ね」

朱「それでは、今日も張り切っていきましょう。今日のお題はこちらです」

ル「あ、今日は囃まなかったわね」

『夢見る男たち』

ル「夢を持つ男？」

朱「今回のお話は、私たちの故国、漢王朝から、前漢の始祖、高祖・劉邦さんと、後漢の始祖、光武帝・劉秀さんのお話を取り上げてみたいと思います」

ル「リュウホウの方は前も聞いたわ。たしか、農民出身の始祖だとか」

朱「はい。ですので、まず、先に劉邦さんの方から話を進めていきたいと思います」

ル「わかったわ」

朱「以前言った通り、劉邦さんは元々は貧しい農民でした。しかも困ったことに、仕事も怠けてばかりで、酒飲みで酔っ払っては裸踊

りをし、女たらしという、典型的なダメ人間で、父親からは『働きの兄を見習え』と怒られる始末でした」

（朱里の顔真つ赤）

ル「だらしないわね。本当に後日皇帝になる人間とは思えないわ」

朱「それがなってしまうのですから、驚きです。そんな劉邦さんにまつわるお話と言えば、次のお話です」

ル「どんな話？」

朱「ある日、劉邦さんが秦の都へ働きに行った時、当時、だれも逆らえない実力者、秦の始皇帝の行列がやってきたのです。他の見物客に混じって、始皇帝の行列を見ていた、若き日の劉邦さんは、次のように言ったといいます」

劉邦『ああ、男と生まれたからには、ああいう風になりたいものだな』

ル「なるほど、よくありそうな話ね」

朱「なお、ちょうど同じ時期、後に劉邦さんと天下を争うことになる西楚霸王・項羽はこの時十三歳の少年でしたが、彼は故郷の街で、巡行に來た始皇帝の行列を見た時、次のように言ったといいます」

項羽『彼、かなた取ってかわるべし！（俺があいつに取ってかわってやる！）』

ル「何というか、大胆ね」

朱「はい。ですから、この二人の台詞は、お互いの性格の違いをよく現していると言えるでしょう。後日、劉邦さんは秦を滅ぼすのに一役買い、さらには長きにわたる苦しい戦いを経て、項羽をも倒して天下を取ることになったのです」

ル「まあ、夢が叶ってよかったんじゃないかしら」

朱「そうですね。執念というものは凄いですし。さて、次の話に移りましょう。」

ル「次と言えば、今度はリュウシュウ、とか言ったわね」

朱「はい。次は後漢の始祖、光武帝・劉秀さんのお話です。上の劉邦さんの立てた漢王朝は、建国から二百二十年ほどで、外戚だった王莽（おうもう。十代皇帝・元帝の皇后の甥）による帝位篡奪で滅び、漢の劉氏一族は皇族としての地位を失います。しかし、王莽の政治が現実を無視したでたらめなやり方で国は疲弊し、怒った豪族や民衆たちが『漢復興』を掲げて立ち上がります。劉秀さんは、そんな反乱に参加した、『数万人もいる皇帝の末裔』の弱小豪族の一人にすぎませんでした」

ル「そのリュウシュウって、どんな男だったのかしら？」

朱「はい。劉秀さんは仕事は真面目にこなし、性格はおとなしく、あまり欲ももたない人だったといえます」

ル「リュウホウとは大違いね」

朱「もっとも、しょっちゅう、つまらない冗談を言ったり、勉強の

ために都・長安に行った時は、悪友と割り勘で驢馬ロバを買ったり、蜂蜜を売って儲けようとして失敗したり、役人のふりをして夜遊びして捕まったりと、羽目を外すことも多かったようです」

ル「ふーん。で、そんな彼の夢はどんなのだったのかしら？」

朱「はい。劉秀さんの夢は、いたってささやかな夢でした。それが次の一文です」

劉秀『官になるなら執金吾（宮廷近衛隊の長官）、妻を娶らば陰麗華』

ル「本当にささやかなね」

朱「劉秀さんは、かつこよく着飾った近衛軍団に憧れ、それを率いる長官『執金吾』になりたかったようです。そして、自分の故郷に住んでいる豪族の美少女、陰麗華（いん れいか。後の陰皇后）を嫁にしたいと望んでいました。余談ですが、劉秀さんが麗華さんに一目惚れした時、劉秀さんは二十代前半、麗華さんはたった十三歳だったといえます」

ル「それってもしかして口……？」

朱「はわー、言っちゃダメです！ それはともかく、劉秀さんは、念願通り、麗華さんを妻にすることができました。そして、官の方は、執金吾を越えて、皇帝になってしまっています」

ル「凄いわね」

朱「皇帝（光武帝）に即位した後の劉秀さんですが、皇帝になった

後にも、『自分は皇帝にはなりたくなかった。どうせなら執金吾になりたかった』と言っていたそうです。面白いことに、皇帝となった劉秀さんがその執金吾の職に任命したのは、皇后となった陰麗華さんのお兄さんでした」

ル「自分のなりたかった職に、奥さんのお兄さまを任命するなんて太っ腹ね」

朱「もう一つ余談ですが、この劉秀さんに仕えた將軍、馬援さんは、私の知り合いの馬超さんのご先祖様に当たります。さて、もう一つお話ししましょう」

ル「なにかしら？」

朱「三国志の正史の劉備さんのお話です。『正史の劉備さん』は、私の知り合いの劉備さんと同じく、皇帝の末裔なのに、蓍を売って暮らすという、貧しい生活をしていました。そんな彼が、皇帝になりたいという志を現したお話が、こちらです」

劉備（正史）「俺は、この桑の木の枝のような屋根のついた車に乗るんだ」

ル「どういう意味？」

朱「屋根つきの車。つまり皇帝専用の天蓋車のことです。それに乗りたいたいということは」

ル「皇帝になりたい、ということね」

朱「そういうことです。さて、そろそろお開きといきましょう」

ル「ところで、作者曰く、『次回の講座』の題は決まっているそう
だけど？」

朱「そう言えば、何か紙が……」

（次回の予定を見て真っ赤になる朱里）

ル「どうしたのよ？」

朱「これは、見せられません！」

ル「どうしたのよ！」

朱「はわわ、ダメです！　ダメです！」

ル「見せないさいよ！」

朱「はわわー！」

おしまい

第八席 ギーシュ、孔明の罠に陥ること（前書き）

今回のお話は、いよいよ、あの野郎の登場です。
後半、少しふざけています。

第八席 ギーシュ、孔明の農に陥ること

ここは荊州の街、襄陽^{はんじょう}。漢水の南岸に位置する大きな街で、対岸の樊城^{はんじょう}と共に軍事、交通の要所である。

孔明、鳳統行方不明騒動が起こって既に一週間。この襄陽の、とある料亭にて、道を尋ねる者の姿があった。

「失礼だが、ご老人。水鏡殿のお屋敷の場所を教えてくださいませんか？ この近くにあると聞いたのだが」

「ああ、水鏡先生ですか。私もよく、腰に効くお薬を貰いに行くものでしてのう。この襄陽から少し東に歩いたところにある、よく霧が出る山の中じゃ」

「かたじけない」

孔明、鳳統行方不明で悲嘆に暮れる者たちに、一筋の希望の光が差し込み、新たな旅立ちの時が訪れるのは、目前に迫っていた。

*

「わあ、コウメイちゃん。凄く似合っているわ」

シエスタが感嘆の声をあげた。

「そうですか？ そんなに似合っていますか？」

大きな鏡の前で、朱里が少し恥ずかしそうに聞き返す。

「ええ。コウメイちゃんには絶対似合うとは思っていたけど、本当にここまで似合うとは、思ってたかったわ」

微笑ましげにシエスタが褒め称えた。

現在、二人がいるのは、厨房近くの、メイドたちの更衣室だ。そこで何をしているのかというと、シエスタが朱里に、メイド服を着せていたのである。

どうしてこうなったのかというと、食堂の前でルイズと一旦別れた朱里が、お昼ごはんのために厨房を訪れた時に話を戻さなければならぬ。

お昼のシチューをおいしく頂いた朱里が、お礼返しに何かをしたと言ったことから、全ては始まったのである。ちょうど、食堂の貴族たちに出すためのデザートのカレーを用意しているところだった。

その時、シエスタがいいことを思いついたのである。

「そうだ、コウメイちゃん。せっかくだから、ちょっと来てごらん」

そう言つて、シエスタは朱里の手を引いて更衣室に連れて行つた。そして、更衣室に着くと、例のメイド服を勧めたのである。幸か不幸か、そのメイド服のエプロンドレスは、朱里の小柄な体にピッタリなサイズだったのである。

「せっかくだから、これ着てみる？」

まるで妹に服を勧めるかのように言うシエスタ。

「え、でも悪いですよ。それに、私に似合つかわかりませんし……」

と、少し恥ずかしそうに、遠慮っぽく言う朱里。

「遠慮しなくていいのよ。着替えた方が動きやすいと思うし。それに、コウメイちゃんだったら絶対に似合うよ」

と、シエスタがもっともらしいことを言う。結局、朱里は折れてメイド服を着用してみたところ、先ほどのような、シエスタからの大絶賛の言葉を賜ることになったのである。

たしかに、食堂でお手伝いするのなら、動きやすいだろうし、元々着ている服を汚す心配もない。

「あう……、ですが、その、なんだか……」

しかし、それを差し引いても朱里は恥ずかしそうな表情を隠すことができないでいた。

しかし、それが却ってつばにはまったらしい。シエスタは微笑みながら、次のように言った。

「そうだ。せっかくだから、コウメイちゃんにそれあげるね」

「え？」

こうして、ご主人様の預かり知らぬところで、朱里のハルケギニア・コスチューム・コレクション、第一号が誕生したのであった。

*

さて、服も着替えたところで、いよいよお手伝いである。朱里はケーキの入ったお盆を手に、シエスタと一緒に「アルヴィーズの食堂」に入った。そういえば、朱里がこの食堂に足を踏み入れたのは、これが初めてである。

「はわ」

中の広さといい、貴族たちの多さといい、飾りつけの見事さといい、見ていてついつい感嘆の声をあげてしまう。

そして、テーブルに並べられた食事を見る。その豪華さには目を見張るものがあった。思わず、こんなものばかり食べて大丈夫なのか、と考えてしまったが、

（もし、鈴々ちゃんや翠さんが見たら、どんな顔するかな）

と、ここにはいない食いしん坊たちのことを頭に浮かべるのであった。

さて、朱里はシエスタと一緒にケーキを配っていくのだが、途中で朱里が何かに気付いた。

「シエスタさん、あの……」

「どうしたの？ コウメイちゃん」

「その、なんか……、いえ、やっぱりなんでもないですう……」

「そう？」

訝しげに思うシエスタ。朱里の表情を見ると、やはり恥ずかしそうに見える。しかし、いったい何を恥ずかしがっているのかまでは、わからなかった。

実は、テーブルの貴族たちの中の、一部の男子たちが惚れ惚れした笑みの、怪しい視線を朱里に送っていたのだ。

（はうう……、やっぱり恥ずかしいですう）

顔を赤らめる朱里であった。

そんな風ではあったが、仕事自体は順調だった。とあるテーブルに来るまでは。

「なあ、ギーシュ！ お前、今はだれとつきあっているんだよ！」

「誰が恋人なんだ？ ギーシュ！」

そんな男子たちの会話が聞こえてきた。見ると、金色の巻き髪に、フリルのついたシャツを着た、気障きさくな少年がいた。ギーシュという名前らしい彼は、シャツのポケットに薔薇びばを指していた。

「つきあう？ 僕にそのような特定の女性はいないのだ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

モテない男子が聞けば、腹の立ちそうな台詞である。だが、そういうことに関して、妄想壁の強い朱里は、こんな話を聞いたとたん、つい、変なことを考えてしまう。

（はわわ……、なんだかいろいろと凄そうな……）

顔を赤らめていた時だ。事件が起こったのは。

「はわ？」

朱里は気付いた。ギーシュという少年の後ろを歩いているとき、何かがつま先にコッソとあたった。見ると、紫色の液体の入ったガラスの瓶が床に転がっている。

「なんだろう、これ？」

咄嗟に拾い上げる。朱里の住んでた国では、あまり見ない珍しいものだ。

しばらく、それを物珍しげに見つめていた時だった。

「おい、ギーシュ。お前の後ろのメイドが持つてるそれ、なんだ？」

ギーシュの周りにいた少年の一人が、朱里の持っている瓶を指さして言った。

「そういえば、お前のポケットから何か落ちてたみたいだったが」

少年たちが次々と指摘する。だが、ギーシュはとぼけたように首を横に振った。

「なんのことだい？ 僕は何も落したりなんか……」

だが、ギーシュの友人の一人は、朱里の持っている瓶を指さし、わかったぞと言わんばかりに大声で言った。

「おお、その瓶の中身は、モンモランシーの香水じゃないのか？」

「間違いない！ あの鮮やかな紫色といい、モンモランシーが自分のためだけに調合している香水に間違いないぞ！」

「ギーシュ。そいつがお前のポケットから落ちたってことはつまり……」

「違う。いいかい？ 彼女の名誉のために言っておくが……」

ギーシュが何かを言いかけたときだ。後ろのテーブルに座っていた、茶色のマントを羽織った、栗色の髪の少女が立ち上がり、ギーシュの席の方に向かって、コツコツと歩いてきた。

「ギーシュさま……」

その顔からは、ボロボロと涙がほとばしっていた。

「やはり、ミス・モンモランシーと……」

「彼らは誤解しているんだ。ケティ。僕の心の中に住んでいるのは君だけ……」

だが、ケティと呼ばれた少女は、思いつきりギーシュの頬をひっぱたいた。それはそれは、よく響く音だ。

「そのメイドが持つてる香水が、あなたのポケットから落ちてきたことが、何よりの証拠ですわ！ さようなら！」

そう言って走り去って行った。すると、今度は入れ替わりに、見事な巻き髪の少女がやってきた。その少女は、いかめしい顔つきで、かつかつとギーシュの席までやってきた。

「モンモランシー」

ギーシュが名を呼んだ。どうやら、朱里の持っている香水を作った張本人らしい。

「モンモランシー。誤解だ。彼女とはただ一緒に、ラ・ロシエールの森へと遠乗りをしただけで……」

「やっぱり、あの一年生に手を出していたのね？」

「お願いだよ。『香水』のモンモランシー。咲き誇る薔薇のような顔を、そのような怒りでゆがませないでくれよ。僕まで悲しくなるじゃないか！」

だが、モンモランシーは、テーブルに置かれたワインの瓶を掴むと、中身をギーシュの頭に振りかけた。

「うそつき！」

そう怒鳴って、去って行った。しばらく沈黙が流れた。

「あのレディたちは、薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

ギーシュはハンカチを取り出すと、ゆっくりと顔を拭きながら言った。

「はわわ……」

朱里は何が起こったのかわからず、茫然としていた。と、そのとき、ギーシュが突然、朱里の方を見て言った。

「そのメイド君」

「はわ？」

「君が軽率に、香水の瓶なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

「お、おい。ギーシュ。いくらなんでも、それはないだろ」

朱里にいちやもんをつけようとしたギーシュに、友人の一人が呆れたように声をかける。

「いくら平民でも、こんな女の子に責任なすりつけるなよ。たしかに、お前の二股がバレたのはその子が香水を拾ったのにも一因が」

「ええー、ふ、二股……！？」

突然、朱里が顔を真っ赤にして、奇声を上げる。そして、とんでもない妄想が頭をよぎった。

*（注：朱里の妄想）

「やあ、ケティ」

「ギーシュさま」

「さて、今日は馬で遠乗りにも行こうじゃないか」

「はい。ところで、ギーシュさま。一つお聞きしたいことが」

「なにかね？」

「その、私はあくまでも、悪い人たちの噂としか思っていないのですが、ギーシュさまは、ミス・モンモランシーとつきあったりしていませんよね？」

「もちろんだとも。いいかい、ケティ。薔薇の花は、ただ一人の女性のために咲き誇るものさ。例えば君みたいな、ね」

「まあ」

「さて、そろそろ行こうじゃないか」

「そうですね。ところで、今日はどのような馬に乗るのでして？」

「ああ、聞いてくれたまえ。今日の馬は、美しい毛並みで、薔薇の花がよく似合う馬さ」

「まあ、楽しみですわ」

「さて、行こうではないか。この僕の王国（閨）へ」

「わ、わー！！　なんて卑猥^{ひわい}な妄想をしてるんだ、君！！」

なぜか朱里の妄想の内容を読み取ったギーシュが、慌てて止めた。周りの男子たちは大爆笑だった。

「いやー、ギーシュ。まさかここまでやるとは、本当尊敬するよ」

「『薔薇の花がよく似合う馬』だなんて、よく言うよなー」

「『さて、行こうではないか。僕の王国（閨）へ』だぜ。上手いこ

と言っちゃって」

「違う、違うんだ!」

大爆笑のテーブル。だが、爆笑する男子たちの海をかきわけて、全然笑っていない人物が姿を現した。

「なるほどね、ギーシュ」

「え、まさか、モンモランシー?」

ギーシュは慌てた。さっき出て行ったばかりのモンモランシーが目の前にいたからだ。

「なんでまた、君がここに」

「あの後、忘れものに気付いて取りに戻って来たのよ。それより、まさか、あなたがここまでとはねえ……」

「違う、本当に、彼女とは馬に遠乗りに行っただけで……」

「ふーん。で、その馬、どんな馬だったのかしら?」

「そりゃあもう、毛並みがよくて、薔薇の花が淒く似合う……、あ……」

もう、言い逃れはできなかった。

「へー、それはまた、たいそう立派な馬なこと……」

「違う、違うんだモンモランシー！ これはその、そう、『罨』だよ！ ほら、昔から言う、『なんとかの罨』だよ。なんだったかは忘れたけど、始祖ブリミルの伝説にだって登場する」

「わけのわからないこと、言ってるんじゃないわよ！！！」

それは、最大級の音だった。本当に、人間の力で出せるのかと思うほどの音だった。

それがなんの音なのかは、決して歴史家は記さないであろう。

ただ一つ言えることは、ギーシュという少年が凄まじく頬を腫らし、食堂の床に横たわっていたことだけであろう。

さて、謀らずもギーシュをこんな風にしてしまった朱里だったが、事はこれだけでは済まなかった。それについては、次回の話で語ることにしよう。

第八席 ギーシュ、孔明の罠に陥ること（後書き）

第五回「ルイズと孔明のムダ知識講座」

ル「とうとう、五回目ね」

朱「はい。なお、今日は特別にお客さんをお呼びしています」

ル「誰かしら？」

朱「はい。今回お越しいただきましたのは、ギーシュさんとモンモランシーさんのお二人です！」

ギーシュ「やあやあ、諸君」

モンモランシー「なんか、この講座の内容が予想できそうなんだけど」

ル「嫌なのが来たわ」

朱「ここは本編とは無関係なので、我慢してください。ところで、ギーシュさん」

ギ「なにかね？」

朱「ギーシュさんは、いろいろな女性とお付き合いされているみたいですが、どうしてこんなにお付き合いできるんですか？」

ギ「ああ、それはだね（以降、自重）」

朱（真つ赤）

モ「あんだねえ」

ギ「わー、怒らないでくれ！」

ル「それより、さつさと始めなさいよ」

朱「はい。それでは進めていきましょう。今日のお題はこちらでしゅ、あう」

ル・ギ・モ「「あ、噛んだ」「」

『無節操漢』

ギ「帰っていいかい？」

モ「だめよ。ちゃんと聞いて帰りなさい」

ル「ギーシュにふさわしい内容といったら、ふさわしいわね」

朱「それでは、今日は極端な例を掻い摘んでお話していきましょう。まず、最初に紹介するのは、前漢時代の人、中山王の劉勝さんです」

ル「こないだでできたわね」

朱「はい。この中山王さんは、多数の女性と関係にあったことで有名でした。そのため、お子さんの数が五十人から百人を超えたと言われています」

ギ「へえ。それに比べたら、僕なんてまだまだ……」

モ「言い訳にしないで」

ギ「はい」

朱「いくら一夫多妻が当たり前でも、これは異常なことと言わなくては いけません」

ル「まったく、これだから男はイヌなのよ」

朱「さて、次に行きましょう。次は晋の武帝・司馬炎さんです」

ル「たしか、この人も前に出てきたわね」

朱「はい。仲達さんの孫に当たる人ですが、この人は後宮に大勢の美女（雑用・世話係も含む）を集めたことで有名です。その数は一万人ともいわれています」

ル「一万人って」

モ「ああ、いやだ。おお、よよ……」

ギ「さすがの僕でもこれは……」

朱「そのため、晋の武帝さんは、その夜と一緒に過ごす女性を選ぶために、毎晩、羊が牽く車に乗って後宮の廊下を移動し、羊の気まぐれで止まった所の女性と一緒に過ごしたといえます。なお、皇帝の寵愛を受けようとした女性が、自分の部屋の前に塩や笹の葉を置

いて羊をわざと止めるようにしたともいいます。この塩を盛る習慣は、海を超えて倭国（日本）に伝わり、水商売をする店では入り口に塩を盛るそうです」

ギ「なるほど。羊に選ばせるのか。これはおもしろ」

モ「ギロ」

ギ「あ、いえ、うん。まったくイヤな話だねえ」

ル「少しは懲りなさいよ」

朱「なお、この武帝さんの子どもの数も、男の子だけで二十七人にも上ったといえます。この中の一人が、『肉を食え』発言で有名な恵帝さんでしたので、こんな状態では国が乱れない方がおかしいと言わなければいけません」

朱「さて、最後にもう一つお話ししましょう。次の話は、東晋（北の異民族に追われ、旧孫呉の地に遷った亡命政権）の孝武帝・司馬曜さんのお話です」

ル「どんな話かしら？」

朱「はい。この孝武帝さんは、女性に関することが仇となって、お世辞にも皇帝とは思えない最期を迎えたといえます」

ギ「どういうことだい？」

朱「それは、ある日の宴会の席での出来事でした。酒を飲んで酔った孝武帝さんは、自分の愛妻の張夫人の前で、次のような発言

をしたのです」

孝武帝『お前も、歳だなあ。新しいのと取り換えねばならんな』

ル「うわあ」

モ「イヤな方ですわね」

ギ「で、どうなったんだい？」

朱「はい。孝武帝さんは冗談のつもりで言ったそうですが、張夫人はそうは思いませんでした。激怒した張夫人は、自分の配下の女官に命じて、あるうことか、寝ていた皇帝を、分厚い蒲団で蒸して殺してしまっただといいます」

ギ「ヒイイイ！？」

ル「怖い話ね」

モ「でも、当然の報いよ」

朱「いつの世も、女性の歳のことを口にすることは恐ろしいものです。私の知り合いの方にも歳の話」

（どこからか矢が飛んできて、近くの壁に刺さる）

朱「いえ、なんでもありません」

ル「何よ、今の矢！？」

モ「いったいどこから？」

ギ「飛んできたんだい！？」

朱「とにかく、乙女は何歳になっても乙女だと言って、今日はお開きにしましょう！」

ル「そ、そうね」

モ「ギーシュ、今度浮気したら、さっきの皇帝の話みたい……」

ギ「わ、わかった、わかった！！ もう、浮気はしない！ 始祖ブリミルに誓って！ いや、ほんと！」

朱「それでは、次回をご期待ください」

おしまい

第九席 ギーシュ、孔明と決闘せんとするのこと（前書き）

やっとできました。

遅くなつてすみません。

皆さんの期待にそえるかわかりませんが、どうぞ！

第九席 ギーシュ、孔明と決闘せんとするのこと

ここは魔法学院の本塔の最上階に位置する、学院長室。

図書室で調べ物をしていたコルベール先生が、一冊の書物を片手に部屋の中に飛び込んできたとき、ちょうど、学院長のオールド・オスマンが秘書のミス・ロングビルによって蹴り回されていたところだった。

（さては、またやらしいことをしでかしたか……）

いつもなら、こう考えただろう。だが、今はそれどころではない。

「オールド・オスマン！」

「なんじゃね？」

「たた、大変です！」

「大変なことなど、あるものか。すべては小事じゃ」

「と、とにかく、これを、これを見てください！」

コルベールは、一冊の書物をオスマン氏に手渡した。書物の題名は、「始祖ブリミルの使い魔たち」だ。

「まーたこのような古臭い文献など漁りおって。そんな暇があるのなら、たるんだ貴族たちから学費を徴収するうまい手をもっと考え

るんじゃないよ。ミスタ……、なんだっけ？」

「コルベールです！ お忘れですか！」

「そうそう。そんな名前だったな。君はいつも早口でいかんよ。で、コルベール君。この書物がどうかしたのかね？」

「これも見てください」

そう言つてコルベールは、一枚のスケッチをオスマン氏に手渡した。それは、朱里の額に、極小さく刻まれていたルーンを拡大して描いたものだった。

それを見た瞬間、オスマン氏の表情が変わった。目が光つて、儼しい色になった。

「ミス・ロングビル。席をはずしなさい」

そう言つて、秘書に部屋から退出してもらつた。ミス・ロングビルが出て行ったのを確認すると、オスマン氏は口を開いた。

「詳しく説明するんじゃない。ミスタ・コルベール」

*

一方、こちらはアルヴィーズの食堂。

ようやくギーシュが、立ち直ったばかりだった。もつとも、頬をひどく腫らしたままだが。

「メイド君、どうしてくれるんだね？」

怒り心頭のギーシュが朱里を問い詰める。

「君のせいで二人のレディの名誉が傷ついたばかりか、僕まで大恥をかいたじゃないか」

その剣幕に、朱里も一瞬、怯みそうになるが、なんとか耐える。

そして、言い返した。

「たしかに、変なことを考えたのは悪かったと思っています。ですが、女の人を泣かせたのは、あなたが二股なんかするからじゃないですか」

朱里も女の子である。異性と付き合ったことはないが、女の子として、二股がよくないことくらいは、容易に想像のつくことであった。しかし、ギーシュは収まらない。言い返そうとして、ふと、何かに気付いた。

「ん？　そういえば、君。どこかで見たことがあるような……。ああ、思い出した。君はたしか、『ゼロのルイズ』が呼び出した平民の子だったな。メイドの恰好をしているから、気付くのが遅れたよ」

ギーシュが朱里の「正体」に気付いた。そこまではよかった。次

のよけいな一言がなければ。

「まったく、魔法だけじゃなくて、従者への躰も『ゼロ』とは。どうりで礼を期待するだけ無駄というものだな」

それを聞いた朱里はムツときた。

「待ってください。どうしてそこでルイズさんへの悪口が出てくるんです!？」

「決まってるじゃないか。ルイズの『使い魔』である君のせいで、こんなことになったんだ。従者への躰ができない責任は主人の責任。当たり前だろ？」

「なんてことを言うんですか！　そもそも、ルイズさんは先ほどの出来事とは無関係じゃないですか！　今すぐ撤回してください！」

朱里は怒った。別にルイズの好き嫌いは関係ない。単純にここにいない人の悪口を言われたのが嫌だったからだ。

「やだね。だいたい、僕の言っていることに間違いはあるかい？」

「言わせてもらいますが、間違いだらけです！　いくらルイズさんが高慢で意地っ張りで、魔法は爆発させることしかできないからって、全然関係ないことで蔑まれるいわれはありません！」

「いや、君の言っていることが一番ひどいじゃないか！」

「とにかく、ルイズさんへの悪口は撤回してください！」

そんなわけで、しばらく睨み合いが続いた。

「よし、わかった」

先に言いだしたのはギーシュの方だ。

「それならそうで、君に貴族への礼儀というものを教えてあげよう」

「教えるのはこっちの方です！」

*

「さあ、さあ！ 見てらっしゃい、見てらっしゃい！」

分厚い牛乳瓶眼鏡をかけた少女が、スプーンをマイク代わりにして、周囲に呼び掛ける。どうやら司会者らしい。（見た目だけならアニメ版恋姫の司会者の女の子、陳琳ちんりんにそっくりである）

「今から始まる『決闘』は、絶対に見逃してはいけません！ さあ、あなたもお早く！」

そんな風呼び掛けるものだから、食堂内の人という人が、何事かと、とある一つのテーブルに集まってくる。いったい、なにがあるのか。

そのテーブルには、二人の人物が対峙していた。片方は朱里。もう片方はギーシュである。

「さて、今から始まります『決闘』は、魔法学院が始まって以来、例を見ないものとなるでしょう！ はたして、いかなる闘いが繰り広げられるのか！ まずは決闘の内容を紹介しましょう！」

ものすごく高いノリで、司会者が言う。

「決闘の内容は、なんと『チェス』！！ ご覧ください！ 魔法学院史上、こんなにしょぼい決闘方法も珍しい！」

その通りであった。テーブルの上に置かれているのは、まぎれもなくチェスであった。どうやら、ギーシュが近く的一年生から借りたらしい。どうしてこうなったのかというと、決闘のことが決まったとき、シエスタやギーシュの友人たちが「子ども相手に大人気ない」と非難の声を浴びせた。さすがのギーシュも、朱里のような子ども相手に本気になるなど大人気ないと思ったらしい。その結果、決闘の方法がチェスになったというのである。

そんな経緯は関係ないと言わんばかりに、司会者はそのままの勢いで解説を続ける。

「それでは、選手を紹介しましょう！ まず、先攻の白駒を操るのは、名門グラモン家の四男にして、いつも薔薇の花で飾り、気障っているけど、ファッションセンスは全然ダメ、しかも二股をかけて女の子も泣かす最低男、ギーシュ選手！」

「ちょっと待った！ なんだね、この悪口しか言っていない司会は！」

ギーシュが抗議するが、司会者は無視する。ちなみに、周辺の野次馬たちは大爆笑だ。

「続きまして、後攻の黒駒を操るのは、名門ヴァリエール家の三女、『ゼロのルイズ』によって召喚された謎の平民にして、お仕事上手でしかもドジッ娘！ 口論すれば勝てる人はまずいない、変な妄想すれば大爆発！ ご主人様とは相いれないが、胸の大きさだけは、そんなご主人様と同様、ほとんど『ゼロ』のコウメイ選手！」

「誰が『ゼロ』ですって！？ こいつよりはあるわよ！」

「はわわー！？」

いつの間に朱里の傍らにいたのか、ルイズが司会者に喰ってかかる。

「ルイズさん、いつの間にここへ？」

「それより、あんたは何やってんのよ！ ちょっと見てない間に、こんな大騒ぎして！ おまけに、なんでメイド服着てんの！？」

矢継ぎ早に質問を浴びせかけるルイズ。しかし、朱里がそれに答えられることはできなかった。

「こらこら、ギャラリーは下がって下がって！」

司会者の命令が飛んだからである。

「ちょっと、わたしはこいつの主人よ！」

「ご主人さまであろうと、王さまであろうと、今は試合中！ 言いたいことはあとあと！」

そう言われると、しぶしぶ後ろに下がらざるをえなかった。そんなルイズに朱里が声をかける。

「事情は後で説明します。ですから、今は後ろで見ていてください」

「まったく……」

ルイズは溜め息をついた。

「人の気も知らないで……」

密かにそう呟きながら。

「コウメイちゃん、頑張つてね！」

シエスタが後ろから声援を送る。

「はい、頑張ります」

朱里が微笑みながら答えた。

「ところで一つ聞きたいのだが……」

ふいにギーシュが口を開いた。

「どうして君たちまで向こう側のギャラリーにいるんだね!？」

そう言って、朱里の後ろにいる、友人たちの方を指さした。

「だって、こんな可愛い女の子を応援しなきゃ、罰が当たるじゃないか！」

そう言ったのは、朝にルイズをからかった、太っちょの少年、マリコルヌだった。彼の言葉に、ギーシュの友人たちも頷く。

「『可愛いは正義』とでも思ってるのか？ 裏切り者！」

悔しそうなギーシュだが、なにはともあれ、試合を始めなければならない。

「さて、では始めるか」

そう言って、白の「ポーン」を進める。

（今に見てろ）

ギーシュは内心、ほくそ笑んでいた。

（なにも伊達にチェスを選んだのではないんだからな）

たしかにその通りであった。ギーシュの実家は軍門の家である。現に彼の父は王国の元帥だ。ギーシュ自身はグラモン元帥の四男にすぎないが、彼なりに机上の兵法は知っているつもりだし、チェスのやり方くらいは熟知している。素人相手に引けは取らない。しかも相手は、自分よりも年下の女の子だ。

(世の中というのは、こんなものなんだよ！)

*

それがわかったのは、朱里が次のような台詞を言った時だった。

「王手です」
チェックメイト

「そんなバカな……」

ギーシュは絶句した。彼の白い駒はほとんど残っていない。しかも、王の逃げ場所はどこにもなかった。惨敗である。

「いい線は行っています。真っ先に真ん中を抑え、相手をけん制する。それを軸に、じわじわと攻める。ですが、定石すぎて、却って相手に筒抜けです」

「ま、参った……」

ギーシュはうな垂れ、降参した。

「なんと!？」

試合が終わるやいなや、司会者が騒ぎたてた。

「こうなることを誰が予想できたでしょう！　子どもの遊びとはいえ、名門貴族のギーシュ選手が、一平民の子どもにすぎないはずのコウメイ選手に敗れました！」

すると、周りで見ていた野次馬たちが一斉に騒ぎだした。

「おい、見たか？」

「あの子、凄い腕前だぞ」

「ギーシュの顔を見てみるよ」

「さすがだ、コウメイちゃん！」

最後のはマリコル又たちである。いったい、いつの間に朱里の名前を呼ぶようになったのか。

「凄いわ、コウメイちゃん！」

シエスタも自分の妹が勝ったかのように大感激である。

一方のギーシュは、落ち込んだままであった。そんな彼に、朱里は声をかける。

「約束は守っていただけますね？」

「ああ、もちろんだとも」

ギーシュはそう言って、先ほどのルイズへの悪口を撤回した。し

かし、朱里はさらに言葉を続けた。

「それと、わがままながら、もうひとつ約束していただけますか？」

「なんだね？」

「後ろを向いてください。それからあなたはあなたに任せます」

どういうことかと、ギーシュは後ろを向いた。そして、ハツとした。ギーシュの後ろ、彼の視線の先には、彼にとって大事な人の姿があった。

「モンモランシー……」

思わず、言葉がこぼれる。そして、次の瞬間にはモンモランシーの元へと駆け出していた。

「僕が悪かった。本当にごめんよ……」

男泣きをするギーシュを見て、これでよかったと思う朱里。これにて一件落着と、思った。だが、彼女は忘れていた。

「コウメイ……」

「はわ!?!」

自分の「ご主人様」のことを。

「あんだねえ！ なにやってるのよ!」

そういつて、朱里のおでこにピコツと、でこぴんの一撃をお見舞いした。

「いたっ!？」

「こんな大騒ぎ起こしておいて、本当にまったく、もう!」

どうしてルイズがこんなに怒っているのかについては、彼女なりの理由がある。今回、ことがチェスの試合くらいで済んだのは、幸運と言わねばならなかった。もし、朱里が小さな女の子じゃなかったら。もし、ギーシュが女の子好きな性格ではなかったら。ほかにもいろいろあるが、通常、平民が貴族を怒らせたらただ事では済まないのだ。下手をすれば、命の危険だってあり得る。だからこそ、ルイズは怒ったのである。

「相手がギーシュみたいな女たらしでよかったわ。今度、こんな大騒ぎをしたら、本当に追い出すからね!」

「はわわわー……」

本当は、ここまでの大騒ぎをやらかした朱里のことが心配だったからこそ、こんなことを言っているのだが、ルイズ本人を含め、それに気付く者は皆無だった。

一方の朱里だが、ルイズのお小言を聞きながらも、何か思いつめていた。

(そう言えば、私、あの『チェス』とかいう『^{シャンチー}象棋』みたいな遊びのやり方は知らないはずだったのに、まるで最初から知ってたよう
な……)

しかし、考えてもわからないので、その場はルイズのお小言に耳を貸す方に集中したのであった。

実は、試合が始まるとき、朱里のおでこの、前髪に隠れた小さな「ルーン」が、淡い光を放っていたのだが、それに気付いた者はいなかったのである。

それはともかくとして、ギーシュ二股に起因する、食堂での騒動は、こうして幕を閉じた。

後日談としては、シエスタを通じて事の次第を知ったマルトー親父たちが、貴族相手にチエスで勝利を収めた朱里のことを「我らの知恵袋」と呼ぶようになったこと。マリコルヌをはじめとした男子生徒たちの間で、密かに朱里の人氣が急上昇したこと。

そしてもう一つ。

「コウメイ先生！　どうか、この僕に、いろいろ教えてください！」

「わかりました。それではギーシュさん、教科書20頁を開いてください」

「はい！」

この世界に来て、朱里に初めての「生徒」ができたことである。何を教えているかというと、一つは兵法だが、もう一つについては言わないほうがいいだろう。

＊

トリステイン王国のとある村。

「お父さん」

「どうしたんだ？」

「大変だよ。森の中で女の子が！」

「なに？ わかった、すぐに行く！」

「なんとまあ、まだ小さい子じゃないか。どうしてこんなところに」

「早く家に運ぼう！」

「ああ」

「……しゅ……り……ちゃん……」

第九席 ギーシュ、孔明と決闘せんとするのこと（後書き）

今回はムダ知識講座は休止します。

第十席 孔明、饅頭を広めんとすること（前書き）

今回はほのぼのストーリーです。

一方で、恋姫側世界は急展開です。

作者の大好きな「あの人」が出ます。

第十席 孔明、饅頭を広めんとすること

話は学院長室における、オールド・オスマンとコルベール先生との会話のところにさかのぼる。

コルベールは、泡を飛ばして、オスマン氏に説明していた。

春の使い魔召喚の際に、ルイズが平民の女の子を呼び出してしまったこと。

ルイズがその娘と『契約』した証明として現れたルーンが気になるので、それを調べていたことなどを話したのである。

「なるほど。つまりこういうことじゃね？」

一通りのことを聞いたオスマン氏が、コルベールが描いた、朱里のおでこに現れたルーンのスケッチをじっと見ながら言葉を繋ぐ。

「つまり君が言いたいのは、その娘の額のルーンを調べていたら、始祖ブリミルの使い魔、『ミヨズニトニルン』に行き着いた、と。そういうことじゃね？」

「はい、そうです！ あの少女の額に刻まれたルーンは、伝説の使い魔、『ミヨズニトニルン』に刻まれていたモノと、ほぼ同じであります！」

「ちょっと待つんじゃない」

オスマン氏が、一度、コルベールを制する。聞きたいことができたからだ。

「『ほぼ同じ』と言ったが、どういふことか詳しく話すのじゃ」

「あ、はい」

コルベールが詳しく話し始める。

「あの少女の額のルーンは、『ミヨズニトニルン』に刻まれていたモノとほぼ同じなんですが、普通のルーンと比べるとやけに小さいうえに、よく見ると、妙な模様が混じっているのです」

「妙な模様じゃと？ どれのことじゃ？」

思わずルーンのスケッチを覗き込むオスマン氏。

「スケッチの真ん中より少し下を見てください」

言われたとおりに見てみると、たしかにあった。

「このことかね？ なんか、へびみたいにひよろひよろした……」

「そうです。その絵のことです」

コルベールが指したのは、ルーン中央の文字の少し下の、小さくて蛇みたいに細長い、動物みたいな絵だった。これは、朱里たちの国で「龍」と呼ばれている伝説の動物の絵なのだが、むろん、二人が知る由もない。

「まあ、一旦、これは置いておこう。それでコルベール君。君はその少女のこと、どう思うのかね？」

「文献に誤りがないのなら、あの少女は『ミヨズニトニルン』に違いありません！ もしそうなら、これは大発見ですぞ！」

「ふむ……確かに、あの変な絵を除けばルーンが同じじゃ。ルーンが同じということは、ただの平民だったその少女は、『ミヨズニトニルン』になった、ということになるんじゃないだろうな」

「どうでしょう」

「まあ、慌てるでない。それだけで、そう決めつけるのも早計かもしれない」

「それもそうですな」

そこまで話したところで、黙りこむ二人。しばらくして扉がノックされた。

「誰じゃ？」

「私です。オールド・オスマン」

声の主は、ミス・ロングビルだった。

「なんじゃ？」

「さきほど、アルヴィーズの食堂でおもしろいことがあったと聞いたので、オールド・オスマンの耳に入れておきたいと思ひまして」

「なにがあつたんじゃ？」

「はい。人から聞いた話ですが、先ほど食堂でチェスの試合が行われまして。それ自体は別に珍しくはないのですが、なんでもミス・ヴァリエールの使い魔の少女が、ミス・グラモンを散々に打ち負かしたそうです。『子どもの遊びとはいえ、凄い腕前』だと。皆、大騒ぎでしたよ」

「ふむ、なるほど。わかった」

そう言うと、オスマン氏は、扉越しのミス・ロングビルに、馬鹿騒ぎしてる生徒がいたら注意してほしいと言って、彼女が去っていくのを待った。

ミス・ロングビルが去ると、コルベールが唾を飲み込み、苦笑いをしながら話を切り出した。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「まさか、と思いますが」

「うむ」

「いや、平民でもチェスの得意な者は大勢いますし」

「そうじゃな」

「まあ、これだけで判断するには情報が少なすぎますし」

「だが、可能性は高まったともいえるのう」

「たしかにそう言えますね」

「なにはともあれ、まずは情報じゃ。その上で判断せねばのう」

「そうですね。引き続き調べてみましょう」

「そうしてくれたまえ。ああ、一応念のためじゃが、このことは他言は無用じゃ。慎重に調べたまえ、ミスタ・コルベール」

「は、はい！　かしこまりました！」

こんな会話が続いたあと、オスマン氏は窓際に立ち、遠い歴史の彼方へと、想いを馳せた。

「しかし、伝説の使い魔『ミヨズニトニルン』か……。いつたい、どのような姿をしておったのだろっなあ」

「『ミヨズニトニルン』はあらゆる知識を蓄えていたともいいますから、とりあえず、頭はよかったんでしょっなあ」

なんとなく間の抜けた、コルベールの言葉で、その場の会話は幕を閉じたのである。

さて、例の「チェス試合騒動」から数日が過ぎた。

朱里の生活リズムは、元いた世界同様である。

朝に早く起きて、さっさと洗濯をする。それから「ご主人様」とルイズを起こし、身支度を整える。厨房で朝食をご馳走になった後、授業を見学する。

なお、昼食、夕食も厨房でご馳走になるし、ときにはお手伝いもする。お手伝いの際には例のメイド服のエプロンドレスを着用するのだが、その際に怪しい視線を感じるのは別の話だ。

そして夜になると、日記をつけて、それが終わったら夜更かしせずに寝る。小さい女の子であることが幸いしてか、ルイズは同じベッドの上で寝ることを許してくれている。

なお、女の子といえば、清潔第一なのは当たり前で、朱里も例外ではない。なんの問題かというと、それはお風呂の問題である。だが、貴族の使う風呂には入れない。学院内で働く平民用のサウナ風呂があるが、「お湯を張る文化」の国で育っている以上、きちんとしたお風呂が必要となるものである。後に朱里はその問題を解決するのだが、それはまた別の話で語ることにしよう。

ある日のことである。夕食をご馳走になったお礼に、食堂の片づけを手伝っていた朱里は、ふと思った。

「シエスタさん」

「どうしたの、コウメイちゃん？」

「その、せっかくのご馳走なのに、残す人、多いですね」

その通りであった。生徒たちの食べた後のテーブルを見ると、まだ食べられそうなものが残されたままの皿が必ずある。それもたくさん。

その残し方も、様々である。肉だけ食べて、野菜は残すというガキっぽい残し方はまだ可愛いものだ。中には、どれも少し食べたら捨てるという、食べ物のおりがたみを知らない、明らかに悪意を思わせるものがあつた。

「そうなのよ」

困った表情で、シエスタが言った。

「せっかくマルトーさんたちが精魂込めて作った料理なのに、残す人が後を絶たないの。もちろん、貴族の方たちの中にも礼儀正しい人もいるけど……」

「そうなんですか……」

朱里は悲しくなった。当然である。そもそも、料理というものは、作る人の汗と苦労が込められているものである。その材料の農作物にも、百姓の苦労が込められているのだ。肉もそうである。魚だってそうである。それなのに、そんな人々の苦労も知らないで残すの

である。

（なんとかしてあげたいな……）

朱里はそう思わずにはいらなかった。と、その時、ふと何かが頭をよぎった。

（そうだ！）

*

次の日の朝である。

朱里は早速、お目当てのものを作り始めた。材料には、よくしなる、カゴ用の木を使う。竹があれば、もっとやりやすいのだが、無いものを求めても仕方がない。

少し時間がかかったが、なんとかそれは完成した。

そして、朝食で厨房を訪れると、朱里はマルトー親父に、とある頼みごとをした。マルトーは、

「『我らの知恵袋』たるコウメイちゃんの言うことなら聞いてやるぞ！」

と、承諾してくれた。もちろん、彼自身が、朱里が何をするかを楽しみにしていたのである。

そして、午前の授業を終えて、ルイズと別れ、昼食前に厨房を訪れた朱里は作戦を実行に移した。

「遅くなつてすみません」

「おう、コウメイちゃん！ 朝に頼んでいたモノ、きちんと用意しておいたぞ！」

そう言つて、マルトーは自分の後ろの方を指した。そこには、小麦粉の入ったボールと、豚の挽き肉、玉ねぎなどの野菜と調味料、水などが置かれていた。

「ありがとうございます」

「しかしいつたい、あれで何を作るつもりだ？」

「それはできてから説明します」

こうして、朱里は調理を始めたのである。もともと料理の得意な彼女は、ためらうことなく、それを作り、上手に完成させた。上手と言つても、さすがに曹操（華琳）配下の典章（てんしやう）（流疏）には遠く及ばないが、それでも一流と言つて差し支えない腕前である。

そして、それをマルトーやシエスタたち、厨房の皆にふるまつたのだ。

「おいしい！」

「なんだこれ！？　すごくいい味じゃねえか！」

思いのほか、好評を博したのである。

大喜びの朱里が、その作り方を皆に伝授したことは言うまでもない。

そして、その翌日の昼食のことである。

ルイズを始め、学院の生徒たちがテーブルに着くと、その上に見慣れない料理が置いてあった。

「なにかしら、これ？」

見れば見るほど、不思議なものである。木でできた器に入れられた真っ白でフカフカしてそうなその物体は、暖かな湯気が立ち上っている。だが、テーブルの上に乗っているからには食べ物なのだろう。

ルイズは興味深げに一つとって、自分の口に運んでみた。そして、その味を噛み締めた。

「なにこれ！？　けっこういけるじゃない！」

彼女は決してグルメではないが、それでも気に行ったらしい。すると、そこへメイド姿の朱里がやってきた。（さすがのルイズも見慣れたせいかな、突っ込まなくなっていた）

「どうですか、ルイズさん」

「あ、コウメイ。ちょうどいいところに来たわ。これはなにかしら。凄くおいしいんだけど」

それを聞いた朱里は微笑んで言った。

「それは、『^{マントウ}饅頭』といいましゅ、あう……」

「マントウ？」

ルイズが聞き返す。すると、舌を噛んでしまった朱里に助け舟を出す形で、シエスタが答えた。

「はい、なんでもコウメイちゃんの故郷のお料理みたいなんですよ」

「コウメイの国の料理？ やるじゃない！」

大喜びのルイズ。他のテーブルでも、同じような賞賛の声が相次いでいた。

「うん、うまい！ この外側のプニプニ感といい、中からの肉汁といい、最高の一言につきるよー！」

これはギーシュである。

「なに、おいしいと思ったら、あのコウメイちゃんの料理だって！？」

これはマリコルヌである。

「おいしいわね。『ゼロ』のルイズも、なかなかいい使い魔を持ったじゃない」

これはキュルケである。皆、それぞれ褒め言葉を発した。

しかしどの褒め言葉も、キュルケの隣にいる青い髪の少女の大絶賛には及ばなかった。その少女は、苦いことで有名のハシバミ草と交互に食していた。

「おいしい……」

言葉はそれだけである。しかし、それゆえに説得力のある言葉であった。しかも、次から次にと平らげるのだ。

「あ、タバサ！ あたしの分まで取らないでよ！」

キュルケが慌てて止めようとする。それほどまでに、タバサという少女のペースは早かったのだ。

（よかった。気にいってもらえて）

朱里は微笑ましげに、皆が食すのを見ていた。

だが、さすがの朱里も、この時は考えていなかった。彼女の取った行動が原因で、後にトリステイン王国に一大ブームが起ることになるとは。

だが、学院の食堂における朱里の目論見は、一部の好き嫌いを出したことを除けば、大成功に終わったのであった。

＊

孔明と鳳統が行方不明になって一週間あまり。

水鏡先生の家では、皆が悲嘆に暮れていた。

雛里が謎の光にさらわれる所を桃香が目撃したのを最後に、なんの手掛かりも見つかっていなかった。

雛里が行方不明になった次の日には、愛紗からの急報を受けた馬超（真名は翠）、黄忠（真名は紫苑）、馬岱（真名は蒲公英^{たんぽへい}）、魏延（真名は焰耶^{えんや}）の四人も捜索に加わったのだが、まったくダメだった。

桃香の目撃情報から、悪い妖術使いの仕業ではないかという、憶測も起こったが、それが何かの役に立つことはなかったのである。

なんの情報もないまま、今日も日が暮れるのではないかと、皆が思い始めた時だった。

「頼もつ！」

玄関先に客人が現れたのは。

「あ、はい！」

どんな状況であろうと客には会わなければならない。水鏡は悲しみを押し殺して、屋敷の門までお客を出迎えた。そして、驚いた。

「あら、貴方は……」

そこへ、桃香、愛紗、鈴々の三人が水鏡の後ろから客人の顔を見た。

「あっ！」

「お、お主は！？」

「華佗^{かた}のおじちゃんなのだ！」

「おじちゃんじゃない！」

鈴々に向かってツツコミが飛ぶ。

水鏡宅に突如現れた客人の青年。それは、漢中を中心に慈善活動を行^{ゴットウエイドオー}う五斗米道に所属する名医、華佗であった。

第十一席 華佗、水鏡宅を訪れるのこと（前書き）

新年明けましておめでとうございます！
今年もどうか、よろしく願います！

さて、今回の話は100%恋姫側世界です。
かなり無理のありそうな、作者の創作設定が入っています。
それでもよければ、どうぞ！

第十一席 華佗、水鏡宅を訪れるのこと

突如来訪した名医、華佗は、挨拶もそこそこ、水鏡の案内のもと、居間に通されると、椅子に腰かけた。

その華佗を前に、屋敷の主である水鏡はもちろん、桃香、愛紗、鈴々、翠、紫苑、蒲公英、焰耶といった、桃花村の面々が卓を挟んで向かい合った。（ちなみに、璃々は母親である紫苑の腕の中に抱かれていた）

「まさかこんなにも早く、劉備殿や関羽殿たちと再び顔を合わせることになるとは思わなかったな」

華佗はまずそう言うと、次に意味深げな一言を呟いた。

「だが、却ってその方が話が早い」

「どういう意味だ、華佗殿？」

訝しげに愛紗が聞いた。

「話が早いって、どういうことですか？」

つられて桃香も発言する。

「もしかして、朱里や鳳統のことに関係ある話なのか？」

たまらず鈴々が言った。

「おい、そんな一斉に聞くなよ。話が進まなくなるじゃないか」

そう言つて、あわや質問攻めになりそうだったのを止めたのは翠だ。

「そうね、翠ちゃんの言うとおり。ひとまず、先に華佗さんの話を聞きましょう」

紫苑が冷静に呼び掛けた。皆、それに頷く。

「では、華佗さん。お話していただけますでしょうか？」

静まり返ったところで、水鏡先生が促した。

華佗は水鏡から頂いた茶を一口飲んで、一回頷くと、話始めた。

「このたび、俺が水鏡殿の屋敷まで足を運ばせていただいたのは、先ほど張飛殿が聞いた通り、水鏡殿の二人のお弟子殿たち、つまり諸葛孔明殿と鳳統殿のことについてだ。もちろん、直接お会いできればよかったのだが、今ここにおられないということは、すでに二人の身に何かがあった。そうではないか？」

まるで、こうなることを最初から知っているかのような言いぶりであつた。

「それはそうだけど」

蒲公英が口を開いた。

「まるで、孔明と鳳統がいなくなるのを最初から知ってたみたいなの言い方だね」

「もちろん、それには訳がある。ただ、すでに二人がいなくなっているという事実を知ったのは、ついさっきだ」

「その訳というのを聞かせてもらえないか？」

焰耶が言った。

「ああ、もちろんだ。ただ……」

華佗は頷きながらも、一言だけ断りを入れる。

「その前に、いったいどうして孔明殿、鳳統殿の二人がいなくなっているのか。今、わかっていることを教えてくれないか？」

「姉上」

「桃香お姉ちゃん」

「うん」

三姉妹が互いに相槌を打つ。今ここにいるメンバーの中で、事の始まりから最も詳しいのはこの三人。中でも、唯一桃香が雛里の消える所を目撃しているのだ。

三人は頷きあうと、華佗に一つずつ説明した。霧の中で朱里が誤って崖から転落したこと。すぐに朱里を捜したのに、何も見つからなかったこと。その夜に、桃香が怪しげな鏡みたいな光る物体を目

撃したこと。そして、それに雛里が呑みこまれるかのようにして消えたこと。

「なるほど。だいたいのことはわかった」

事情を聞いた華佗は考え込むかのように何度か頷いた。そして先ほどの約束通り、語り始めた。どうしてここに来たのかを。どうして、朱里と雛里の身に何かが起こるのを知っていたかを。

その内容を要約すると、次の通りであった。

洛陽での宴会を終えた後、華佗は太平要術を封印したことを五斗エイドオー米道教団の教主である張衡ちやうけいに報告するべく、教団の本部がある漢中に帰還した。

だが、帰還した彼を待っていたのは、驚くべき情報だった。

教主である張衡が、古い文献を漁っていたところ、一冊の予言書が出てきたというのだ。

「その予言書の写しがこれだ」

華佗はそう言って卓上に予言書の写しを広げた。皆が一斉に覗き込む。そこには、次のような内容が書かれていた。

『忌まわしき太平要術、漢土かんとに於いて塵芥ちりあくたとなるも、千載せんざいの時を経て、双月そうげつの国、大秦だいしんの地にて甦よみがえれり。人の悪心に巢食さくじくいて、大秦の地を滅せんとす。時同じくして、大秦国の虚無きよむの術士、三顧の礼を以て伏龍を招かん。伏龍、大秦の地に招かれ、鳳雛、後を追いてその才を開花せり。伏龍鳳雛、共に虚無の術士らを援け、大秦国の戦

乱を鎮めんとす

」

「いったい、どういう意味だ？」

一通り読んだ後、愛紗が言った。（ついでに言うと、字が読めない鈴々などはチンプンカンプンだった）

「確かに分かりにくいだろうな」

そう言って華佗は、今度は大きな地図を広げた。

「まずは、この预言書に出てくる『大秦国』について説明しなければな」

そう言って地図を指さしながら説明した。

「いいか。この地図の右側。つまり東の一角が我々の住む『漢土』だ。そして今、我々がいるのが『荊州』。漢土のだいたい中央より少し南寄りだ」

そう言っつと、徐々に地図の左。つまり西へと指を動かしていく。彼の指をたどると、漢土十三州の中で最も西の涼州（翠と蒲公英の故郷）を過ぎ、漢土の終点、玉門関を超え、西域のオアシス国家群（亀茲、疏勒など）をも通過する。そして、「汗血馬」の産地、大宛国をも超え、さらに西の安息国も通り過ぎると、最後には条支国にたどり着く。そして、そこから海みたいな空白を渡った先にあるのが、「大秦国」と書かれた土地であった。

「こんな遠いところ……」

皆、絶句した。

「この『大秦国』については、わずかな噂話や先人の記録を除けば、ほとんど何もわかっていない。だが、この予言書を見ると、ただごとでないことは想像に難くない」

そう言うつと、華佗は顔をしかめながら話した。

「つまり、この予言書に書かれていることが事実とすれば、その『大秦国』に、『太平要術』が復活する、ということだ」

「え!？」

全員が驚かざるを得なかった。その封印のため、皆で必死になつて戦つた記憶はまだ新しい。

「そんな、あれはあの時、華佗さんが封印したはずじゃ……」

「たしかにそうだった。だが、『千載の時を経て、大秦に甦る』などという小賢しいものだったとは……」

悔しそつに憤る華佗。そこに、愛紗が口を挟む。

「それは華佗殿の責任ではなからう。しかし、太平要術のことと、その遠い異国のことが、朱里たちのことと、いったいなんの関係が……」

「そつ、そのことだ」

そう言うつと、華佗は再度、予言に話を戻す。

「もう一度、ここから先を読んで貰いたい。ここだ。『時同じくして、大秦国の虚無の術士、三顧の礼を以て伏龍を招かん。伏龍、大秦の地に招かれ、鳳雛、後を追いてその才を開花せり。伏龍鳳雛、共に知恵を以て虚無の術士らを援け、大秦国の戦乱を鎮めんとす。双人の名は、千載の末まで語り継がれん。伏龍の名は諸葛亮。鳳雛の名は鳳統』」

「なっ!？」

読み終えたとき、今度こそ誰もが言葉を失った。しばらく、誰も喋らなかった。

「華佗さん……」

しばらくして沈黙を破ったのは、朱里と雛里の恩師、水鏡だった。

「つまり、こういうことですか？ 朱里も、雛里も、そのはるか遠い、得体のしれない国に行ってしまったと……」

「水鏡殿」

途中で華佗が口をつぐんだ。

「この予言が正しいなら、そういうことになる」

「「そんな!？」」

桃香と愛紗が思わず叫んだ。それをきっかけに、皆が騒ぎだした。

「待ってくれ！ まだ話は終わっていない！」

慌てて華佗が皆を静止させようとする。しかし、騒ぎはますます大きくなるばかりだ。だが、それもすぐに終止符がうたれた。

「皆さん、お静かに！」

そう言ったのは、意外なことに、最も悲しんでいるはずの水鏡だった。

「華佗さんの話を最後まで聞きましょう。華佗さんは、何もこんな話をするためだけに、ここに来るとお思いですか？」

それを聞いて、ようやく全員静まり返る。

「水鏡殿、かたじけない」

華佗はそう言つと、本題に入った。

「今日、俺がここに来たのは、もちろん、こんな予言の内容を伝えるためなどではない。遠く得体のしれない異国。それも千載の先のこととはいえ、太平要術の復活という重大事。そして、俺の顔見知りの人間をも巻き込んだ^{こたひ}今度の失踪事件。それをそのまま放ったか^{ゴットウェイトオー}らしにしておくような五斗米道ではない！」

「では！？」

華佗の熱い語りに、皆がパアッと明るくなる。今まで沈んでいただけに、一筋の光が差し込んだ気がしたのだ。

「ああ。すでに張衡様を始め、五斗米道の同志たちが動いてくれている。『大秦国行き』の準備のためにな」

「それじゃ、華佗のおじちゃんか鈴々たちのところに来たのは！」

「おじちゃんじゃない！」

鈴々の台詞に一度ツツコミを入れると、再度話す。

「もちろん、協力してもらったためだ。最初は桃花村に行くつもりだったが、ここに寄ったのは本当に当たりだったようだな」

「協力って、つまり？」

「決まってるだろう。それは、俺と『大秦国』へ行き、今度こそ太平要術を永遠に消し去り、そして孔明殿と鳳統殿をここに連れて帰ることだ」

そこまで聞いて、皆が明るくなった。こんな思いをしたのは久々だった。

「やったー、なのだ！ これで朱里たちを助けにいけるのだ！」

思わず鈴々が飛び跳ねる。

「ちょっと待った」

突然、翠が言った。

「どうしたの、お義姉^{ねえ}さま」

「その『大秦』とかいう国に行くっていうけど、誰が行くかを決めなきゃダメだろ」

「翠、なに言ってるのだ。そんなの、みんなで行けばいいに決まっているのだ！」

「ダメよ、鈴々ちゃん」

桃香が姉らしく、口を挟む。

「どうしてなのだ？」

「誰かが残らないと、村が」

「ああ、そうだったな」

愛紗が頷く。

「鈴々。姉上の言うとおりだ。誰かが村の留守をしていないと」

その通りである。皆で出かけて、義勇軍の本拠地、桃花村を長きに渡って留守にしておくのはあまりに危険すぎる。

「それなら、どうすればいい？」

「蒲公英は行くよ」

「コラ、お前は留守番だ！」

「お義姉さま、ひどーい」

「まあ、慌てて決めることはない」

今度は明るい意味での騒がしさの中、華佗が言った。

「幸い、出発のための妖術が使えるようになるまで、あと一週間ほどかかる。俺はその準備のため、一旦、襄陽の街の同志たちと落ち合う。準備ができれば、また水鏡殿のお屋敷に戻ってくる。それまでにじっくり考えとけば大丈夫だろう」

「ありがとうございます華佗さん！」

桃香が頭を下げる。それにつられて、皆、口ぐちにお礼を言った。

こうして、一週間ぶりに、水鏡宅の皆に笑顔と希望とが戻ってきたのであった。

第十一席 華佗、水鏡宅を訪れるのこと（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回のお話で、作者は勝手に、「大秦国」の「将来」Ⅱ「ハルケギニア」にしてみました。

ちなみに、正史では、「大秦」とは、当時ヨーロッパを支配していた「ローマ帝国」のことです。

「ハルケギニア」がヨーロッパをモデルにしていたので、ついやってしまいました。

そうでもないかと、恋姫世界とゼロ魔世界との繋がりを作れませんか（苦笑）

さて、いよいよ桃香たちが朱里、雛里救出に動き出します。しかし、この救出部隊、桃花村メンバーから、誰をパーティにしよう……。

作者の頭の中では、華佗、桃香、愛紗、鈴々は必ず連れて行きます。紫苑、璃々ちゃん親子はお留守番させるつもりです。（子ども連れて異世界はちよつと……）

残りは、翠、蒲公英、焰耶だけ……。

意見等ありましたら、是非どうぞ！

第十二席 タバサ、孔明に詰め寄ること（前書き）

やっとできました。

前半は、あのおバカ軍団です。

後半は、朱里があの子と初めて会話をします。

第十二席 タバサ、孔明に詰め寄ること

華佗が水鏡宅を訪れる三日前。

泰山の頂上では、欲望詰まった祈りの儀式が行われようとしていた。

「おーほっほっほ。遅かったですね、美羽さん。まあ、その貧弱な体で、ここまで登って来れたことは、褒めて差し上げますわ」

先に頂上にたどり着いていた麗羽が、石造りの祭壇さいだんの前で、遅れながら七乃に背負われてやってきた美羽に向かって高笑いする。

「むうー。張勳、先を越されたではないか！ いったいどこが近道だったのじゃ？」

「美羽さま。ここは腐つても鯛たい、の泰山ですよ。ですから、近道でも長いものは長いのです」

七乃の言うとおりだ。やはり、幼き美羽の弱い足腰では、険しい泰山を登るのは無理があつたらしい。むしろ、山頂までたどり着けたことの方が奇跡と言わなければならない。

「負け犬はそこで指をくわえて、この高貴な私の、祈祷の儀式を見てればいいのですわ」

麗羽は得意げにそういうと、猪々子、斗詩たちと共に、祈りの儀式の準備に取り掛かった。

彼女は斗詩から受け取った、火のついた松明をかざすと、祭壇の土台の上にある、燈籠とうろうに火を灯す。そして、事前に斗詩から教わった筋書き通りに祈り始めた。

「神聖なる泰山の神よ。世に名高き袁家が当主、袁本初がお祈り申し上げます。この私に、大いなる天の滋味をお恵みください。以てこの乱れし世の中を安寧あんねいならしめましょう」

麗羽にしては、相手に頭を下げたつもりの言葉である。もっとも、言っていることはめちゃくちゃなことばかりだが。

だが、何も起こらない。うんとも、すんとも言わない。その場はしばらく、不気味な沈黙に包まれた。

「何も起こらないっすよ、麗羽さま」

たまらず、猪々子が口を開いた。

「う、うるさいですわ！ 違いますの。これは、そう、練習ですわ！」

顔を真っ赤にした麗羽は、ごまかすようにそう言つと、もう一度祈ってみた。だが、ダメだった。

「やっぱり、何も起こらないですよ」

弱気な声で斗詩が言った。と同時に、黙つてこの茶番劇を見ていた美羽が、突然爆笑し始めた。

「わっはっは！ きつと麗羽義姉さまは妾めかけと違って、心に邪よこしまなところがあるから、山の神の方からお払い箱なのじゃ！」

「さっすが美羽さま。自分のことは棚に上げといて相手の痛いところを突きにいく嫌味なところといい、見ていて愉快ですわ」

「わっはっは、もっと褒めてたも」

そんな美羽、七乃の袁術主従コンビのやり取りを見ていた麗羽の頭に血が上った。

「そこまで言うのでしたら、美羽さん。あなたが祈ってご覧になればいいじゃないですか！ まあ、あなたみたいな小娘の願い事を、いるかどうかわからない神なんか聞いてくれるなんて、私は思わないですわね。おーほっほっほ！」

そう言って、祭壇の土台から降りようとしたときだった。

「つて、
x !?」

突如、声にならない悲鳴を上げ、後ろに倒れそうになる。祭壇の床の上に生えていた苔で、足を滑らせたのだ。

転倒するまいと、咄嗟になにかに手をついたときだった。その、「なにか」が音を立てて倒れたのは。

「「「「あー!?」「」「」

麗羽以外の全員が悲鳴を上げ、咄嗟に土台の上に走り寄った。倒れたのは、祭壇上の燈籠だったからだ。

「麗羽さま、なんてことを！」

猪々子が真つ青になって言った。

「罰当たりですよ！」

斗詩に至っては顔面蒼白である。

「うわーん、なんてことをしてくれたのじゃ！ 妾がまだ祈ってないのに！」

美羽が泣きだした。

「さっすが美羽さま。倒れた燈籠の心配より、自分の祈りの方が重大だなんて」

困ったような表情をしながらも、七乃が主人への皮肉を言う。

「お黙りなさい！」

燈籠を倒した張本人、麗羽が声を張り上げた。

「こんなもの、すぐに立て直せばよろしいではありませんの！ さっさと手伝って……」

言いかけた時だった。突然、倒れた燈籠が淡く光始めたのである。

「なっ！？」

その場にいた全員が押し黙ってしまった。

「ちょっと、なんですの、これは？」

「そうだよ、斗詩」

「私に聞かないでよ、わからないんだから！」

「い、いったいこれはなんなのじゃ？」

「わかりません、美羽さま。ただ、とてつもなく嫌な予感が……」

そうこうしているうちに、光は徐々に明るく輝き始めた。そして、次の瞬間、

「……う、あつ……！？」

突然、目の前に太陽が現れたがごとく、強烈な光を放ったのである。全員が目を瞑らざるをえなかった。

やがて、光は収まった。しかし、それが収まった時、祭壇周辺には誰もいなかった。あるのは、倒れた燈籠と、そこで炭になってくすぶっている薪だけであった。

*

トリステイン魔法学院のヴェネストリ広場。

天気の良い昼下がり。朱里は一人で木陰に座っていた。

ルイズに召喚されて以来、一人になることなど珍しいはずの彼女が、どうして一人にいるのかと言うと、珍しく「ご主人様」から暇をもらい、木の下で本を読んでいたのである。

朱里が召喚されたとき、彼女が持っていた鞆の中には「漢土の地図」や日用品のほか、何冊かの書物が入っていた。

勉強好きな彼女らしく、兵法書や歴史書の類は前々から入っていた。だが、まだ読んでいない本もある。朱里が召喚される前、都・洛陽で購入しておきながら、今まで鞆の中で眠っていた本が何冊かあった。

今日はそのうちの一冊に目を通していたのである。

しかし、たかが本を読むくらいなら、ルイズの部屋などでも読めるのに、どうしてこんな人気の無い所に来たのであろうか。

理由は簡単であった。

「はわわ、凄いですう……」

本の内容を人に見られたくないから、というよりは誰にも見せられないからだ。

あえて言うと、その本は本来、朱里のような小さな女の子が読むような内容ではないからである。

事実、朱里の顔は真っ赤になっていて、目はその本にくぎ付けだった。

なにはともあれ、彼女は「趣味」の時間を満喫していたのである。だから朱里は気付かなかった。思わぬ客が、彼女の元へと近づいてきていることに。

「なに読んでるの？」

突然、誰かに声をかけられた。囁くような、小さな声だ。

「はわわー！？」

朱里は取り乱して、読みかけの本を落としそうになった。本に夢中だった所を、いきなり話しかけられただけでも驚くというのに。まして、本の内容は。

「な、なんでもないです！」

慌てて本を後ろに隠しつつ、相手の方を見上げる。

そこにいたのは、青みがかった短い髪の、眼鏡をかけた少女だった。

（あれ、誰だったかな？）

朱里は一瞬考える。

（そういえば、雰囲気誰かに似ているような……）

たしかに、朱里は召喚される前に、雰囲気だけならそっくりな人物に会っている。無口そうで、無表情な所に限って言えば、そっくりだ。ただし、目の前の少女は、「その人物」はおろか、ルイズよりも背丈は低く、体の起伏もあまりない。

だが、今はそんなことより、目の前の人物がいったい誰なのか確かめなくてはならない。

「すみません、あなたのお名前は？」

朱里は尋ねた。そういえば、彼女が目の前の眼鏡少女と面と向かって話すのは、これが初めてだ。（何度かすれ違ったことはあるが）

「タバサ」

少女はそう答えた。

「タバサさん、ですか」

「あなたは？」

「私は諸葛孔明といいます。孔明でいいです」

「コウメイ？」

「はい、よろしく願います」

そんな風にして、自己紹介は終わった。

「ところで」

タバサと名乗ったばかりの少女が再び口を開いた。（朱里は知らなかったが、もし、彼女を知る者がここにいたら、驚いて腰を抜かしたであろう）

「何読んでたの？」

そう言って、朱里が後ろに隠した本のことを聞いてくる。もっとも、表情だけは無表情のまま変わらないが。

「え、これですか？」

朱里は困った表情を浮かべた。そして、本をなんとか隠そうとした。

「つまらないものです。なんでもないですよ！」

「見せて」

「本当になんでもないですよ」

「見せて」

「はわわ、ダメです、ダメです」

「見せて」

「はづつう……」

結局何度断つても、しつこく詰め寄られたので、とうとう朱里は、その書物を見せざるを得なかった。

*

「ん、あそこにいるのは、タバサ？」

広場を通りかかったキュルケは、ふと、一本の木の根もとを見た。木の根もとには彼女の親友の姿があった。ああいう人気の少ないところで本を読んでいるのはいつも通りだ。

だが、今日ばかりは違った。

「あれは？」

キュルケは目を疑った。いつも一人でいるはずのタバサの横に、もう一人、別の人物がいた。彼女は、それが誰かを知っている。

「コウメイちゃんじゃない。あの、ヴァリエールの使い魔の」

目を凝らして見ると、二人で一緒になって、一冊の本を読んでいる

るようだった。

「へえ、珍しいこともあるものね」

そう呟いたときだ。タバサがこっちに気付いたのは。

キュルケに気付くやいなや、タバサは本を朱里の方に返して立ち上がると、いつも通りの無表情のまま、こっちの方に、すたすたと歩いてきた。

「タバサ」

自分の方にやってきた眼鏡少女に話しかける。

「あなたが他人と一緒に本を読むなんて、珍しいわね」

「……」

タバサは何も答えない。しかし、キュルケはかまわず話し続ける。

「そうそう。あのコウメイちゃんと、一緒に本読んでたみたいけど、どうだった？」

すると気のせいかな、タバサは一瞬、顔を赤らめたかのように見えた。そして、一言だけ言った。

「ユニーク」

ちなみに、朱里の読んでいた本の文字は全部漢字漢文なので、タバサには文字の意味こそ理解できなかったものの、むしろその本は、

字よりも絵が主体のため、だいたいの内容はわかったのであった。

その後、朱里にはハルケギニアに来て以来初めての読書仲間ができたという。

*

漢土。青州のとある県にて。

「……くしゅん……!？」

「れんほう人和ちゃん、どうしたの？」

「まさか風邪？」

「うっん、大丈夫。てんほう天和お姉さん。ち地姉さん」

「そう？ 具合悪かったら、すぐお姉ちゃんに言ってよ」

「そうそう、今日はせっかくの舞台なんだから」

「大丈夫。心配してくれてありがとう。それより、早く始めよう」

「うん、そうだね」

「皆あ！今日は私たち張三姉妹の舞台に来てくれてありがとうございます！」

「今日も張り切っていくよー！」

「私たちの歌と踊りをご覧ください。それでは……」

「「音楽、かいしー！！」」

『ほあっ、ほあっ、ほあー！！！！』

第十二席 タバサ、孔明に詰め寄ること（後書き）

いかがでしたでしょうか？

タバサは書くのが難しい（汗）

そう言えば、外見だけならタバサは人和に似てるような。（とある一部分を除いて）

それと、アニメ版のタバサの中の人、恋姫のあの娘こと同じですね。

（大人しいこと以外、全然キャラ違うけど）

さて、これからは買い物とフーケになりますが、これは困った（苦）フーケの方は何のアイテムかは決まっているんですが、買い物はどうしよう。

デルフは出せないし。（爆）

うーん、困った。

でも、なんとかしてみます。

それでは、またお会いしましょう！

第十三席 孔明、ルイズたちと街へ赴かんとすること（前書き）

お待たせしました。

今回は、ゼロ魔原作路線とは大幅に違う話になります。

また、前半ではこの話で初めての戦闘が行われます。
どうぞ。

第十三席 孔明、ルイズたちと街へ赴かんとすること

とある森の中

（あれは私の幼い頃に亡くなったおばあさま？ おばあさま、あんなところに……）

「麗羽さま！！」

「……は！？」

目を覚ました麗羽の目に飛び込んできたのは、彼女の大切な、二人の部下たちの顔だった。

「猪々子、斗詩……」

「よかった、気がつかれたんですね！」

「麗羽さまー！ つねっても、ひっぱたいても、うんともすんとも言わないから、死んじゃったかと思ったじゃないですか！」

主人の無事を確認して、嬉し泣きする二人。それを見て、麗羽は二人に心配をかけていたと悟る。

「二人とも、私のこと心配してくれていましたの？」

「当たり前じゃないですか！」

「まったく、人騒がせなヤツじゃ」

皮肉たつぷりな声が聞こえた。

「美羽さん」

「妾たちの心配をよそに、いつまでも寝てるなんて、麗羽義姉さまは本当に寝ぼすけなのじゃ」

「さつすが美羽さま！。実際に起きられたのは袁紹さまが起きるほんの少し前だったのに、ここまで言えるなんてー」

「どうでもいいですわ、そんなことー！」

憤った麗羽が言った。

「誰が何番目に起きたかなど、今は興味ありません！ それより、ここはどこですの！？」

たしかに彼女の言うとおりである。彼女たちはついさっきまで、泰山の頂上にいたのだ。それなのに、こんな森の中にいるのだから、驚くのも無理はない。

「そ、それがわからないんですよ」

「そうなんですよ、麗羽さま！ あたいら、あの光にのみ込まれて、気付いたらこんなところに！」

「なんですって！？」

部下二人の言葉を聞いた麗羽は、次に美羽たちを見る。

「妾たちに聞かれても困るのじゃ」

「そうなんですよ。ここがどこなのかさっぱり……」

直後であつた。彼女たちの背後の茂みから、ガサツという物音がしたのは。

「な、なんですの？」

「なんじゃ、今の音は？」

「わからないつすよ」

「麗羽さま、私たちの後ろにお下がりください。張勲さん、袁術さんを」

「わかりました」

珍しく戦慄を覚える一行。幸いなことに、各々、武器は所持していた。（もつとも、まともに戦えるのは猪々子と斗詩の二人だけだが）

猪々子、斗詩の二人がそれぞれの武器をかまえ、七乃が麗羽と美羽を後ろに下がらせる。

彼女たちが体勢を整えた時、ついにそれは姿を現した。

「なっ!？」

麗羽が思わず顔をしかめた。

「なんなのじゃ、あの化け物は!？」

美羽が叫んだ。

彼女たちの目の前に現れたのは、醜く太った体つきの、豚にそっくりな顔をした化け物だった。それも、四体もいる。

「美羽さま」

さすがに戦慄を覚えた七乃が自分の主を抱き寄せる。一方の化け物たちは、そんな美羽たちを見て、旨そうな獲物を見つけたと言わんばかりに奇妙な声を上げながら喜んでるようだった。

「ひっ……」

五人の中で最も幼い美羽は、恐怖で今にも泣き出しそうになり、より強く七乃にしがみつく。

「猪々子、斗詩!」

麗羽が呼び掛けた。

「なにをやっているんです。あんな化け物、さっさと倒してしまいなさい!」

「はい、麗羽さま!」

猪々子と斗詩が、それぞれの武器を構えて、相手の化け物に挑みかかる。

一方の化け物たちも、手にした棍棒で襲いかかってきた。

「くっ」

相手の内の一匹が振り下ろした棍棒を、猪々子が自分の武器、ざん斬山刀で受け止める。罅迫り合いに持ち込んだのだ。

「重い……けど……負けるもんかあ！」

相手の重みになんとか耐えきり、逆に押し返して敵のバランスを崩させる。

「もらったあ！」

その隙に、斬山刀で敵を肩口から切りつける。化け物は左の首筋から血を噴き出して倒れた。

「よっしゃあ！」

そのすぐ横では、斗詩が相手の振り下ろした棍棒を回避し、得物の金光鉄槌こんこうてつちを手に飛びあがったところであった。

「えいつ！」

巨大な鉄槌が化け物の脳天めがけて振り下ろされる。直後、頭に鉄槌の直撃を受けた化け物は折崩れ、二度と立ち上がることはなかった。

背中合わせになって一息つく猪々子と斗詩。だが、敵はまだ二匹残っている。

「斗詩」

「猪々子」

二人は目配せすると、それぞれ別々の敵目がけて突進した。そして、相手が棍棒を構えるよりも早く、各々の武器を振るった。

次の瞬間、勝敗は決した。二匹の化け物のうち、一匹は猪々子によつて首をはねられ、もう一匹は斗詩によつて頭を叩き割られていた。痛みを感じる暇があつたかどうかは、わからない方がいいかもしれない。

「猪々子、斗詩。さすがですわ！」

麗羽が大喜びで叫んだ。

「二人とも、凄いのじゃ！」

美羽が褒め称えた。

「珍しいですわね。美羽さまが他人を褒めるなんて」

「わっはっは、苦しゅうない。もっと褒めてたも」

と、いつものやり取りを始める美羽と七乃。

「それほどでもないですよ」

斗詩が少し控えめに言う。

「そうそう。なんせ、あたいらは百人力。あんなの百匹来たって恐くないや!」

そう言って笑い飛ばす猪々子。それにつられて、全員が笑う。だが、それも束の間であった。

「い、猪々子、斗詩」

突然、麗羽が笑うのを止めた。

「どうしたんですか、麗羽さま」

「う、う……」

引きつった顔で後ずさり始めた。その横で、美羽や七乃も麗羽と同様に、猪々子と斗詩の後ろを指さしながら引きつった表情で後ずさる。

「う、後ろじゃ、ふたりとも!」

「後ろです、後ろ!」

「「後ろ?」」

訝しげに振り向いた二人は凍りついた。

なんと、さっき倒したのと同じ化け物が迫ってきているではないか。それも、二、三十匹も。それらは、先ほど倒された仲間の亡骸を見て、仇を討たんとばかりに憤っていた。

『い、いやあああ！！？』

今度ばかりは全員逃げ出すしかなかった。いくらなんでも、数が多すぎた。

真つ先に麗羽が逃げ、次に美羽を抱っこした七乃が続き、猪々子と斗詩が殿しんがりとなつて逃げたのである。

なお、彼女たちは知る由もなかったが、近くには古びた木の看板が立っていて、それには彼女たちの知らない文字でこう書かれていた。

『危険。この辺り一帯はオーク鬼の出没地域につき、立ち入り禁止』

*

「はわあ〜」

朱里は感嘆の声をもらした。

ここはトリステイン王国の王都、トリスタニア。

天気の良いその日、朱里はルイズと一緒にこの街に来ていた。彼女にとっては召喚されて以来、初めて訪れた街である。始めて見る物も多いので、つい声をあげてしまう。

さすがに、人口二百万人をうたわれた洛陽と比べてはいけませんが、それでも、活気のある街だ。

なお、どうして魔法学院を出て、わざわざこの街に来たのかという、それは買い物のためである。

何を買うかと言えば、いろいろだ。人間が生活する上で必要なのは、衣・食・住である。ハルケギニアに召喚されてしまった朱里にとって、今のところ、食と住に関しては不自由していない。

しかし、衣服に関しては召喚されたときに着ていた物と、シエスタから貰ったメイド服を除けば、何も持っていなかった。そうなる と当然、衛生上の問題が発生する。特に、女の子である朱里にとっては、なおさらのことで、ことに下着の問題は早くなんとかしなければならなかった。

そこでルイズに相談したところ、彼女は以外にもあっさりと買いに行くことを認めてくれたのである。

例の「マントウ」をご馳走になって機嫌が良かったこともあったであろうし、あるいは同性の朱里に同情的だったのかもしれない。また、この機に自分の国を自慢しようと思ったのかもしれない。

なにはともあれ、授業が休みの「虚無の曜日」に街へ行く運びと

なつたわけである。

「はしゃぐのはいいけど、財布すられないよう気をつけてよ。この辺、スリが多いんだから」

ルイズが、まるで姉が妹を注意するかのような口調で言った。彼女は、財布は下僕が持つものだ、と言って、財布をそっくり朱里に持たせていた。最初預けた時に、朱里がその金貨の重さに驚いて腰を抜かしそうになったのは別の話である。

「それにしても意外ね」

ふと、ルイズが言った。

「あんた、馬には乗れるのね」

「え、あ、はい。一応、乗れましゅ、あう……」

二人は学院から街まで馬で来たのである。思い切って飛ばすようなことはなかったが、ルイズにしてみれば朱里のような子どもが一人で馬に乗れたことは意外だったようだ。

「まあ、それはそうとして」

道を歩いていたのに、突如、ルイズは立ち止まり、そして後ろを指さした。

「なんで、あんたたちまで来ているのよ！」

ルイズが指さした先には、彼女とは犬猿の仲のキュルケと、その

親友（ルイズはまだ名前を知らないが）のタバサの二人がいたのである。

「あーら、来てはダメだったの？ ゼロのルイズ」

ルイズを挑発するかのようになり、キュルケが言う。ちなみにタバサは無言だ。

「ダメに決まってるわよ！ だいたい、なんで人様の後をつけてるのよ！？」

「人聞きの悪いこと言うわね。あたしはタバサが新しい本を買いに行くというから、一緒に行って、ついでに何か買ったり食べたりしに行こうと思っただけよ」

それにタバサもコクリと頷く。それを他所に、ルイズとキュルケの間には火花が飛び散る。

「はわわ、落ち着いてください」

朱里が一生懸命なだめた。

「ここで会ったのも、きつと何かの縁ですよ。ほら、『旅は道連れ、世は情け』って言うじゃないですか」

「そんな縁、いらないわよ！」

ルイズは怒鳴り散らした。一方のキュルケはやや微笑んで言った。

「ほら、コウメイちゃんもこう言っているんだし、買い物くらい、

「楽しまない」と

「どうやら、この論争はキュルケの方に分があったようだ。

「あー、もう。わかったわよ!」

焼けっぱちになったルイズが、朱里の手を引いて、ずんずんと街中を進む。

「え、ちょっと。ルイズさん?」

「ぼさつとしてないで、さっさと行くわよ! まず服よ、服!」

そんなルイズたちの後から、キュルケとタバサが続く。

「あらあら、おもしろいことになりそうね」

「……コクリ」

こうして、少女たちの休日が幕を開けた。

だが、彼女たちは後ろからついてくる者たちには気づいていなかった。

*

ルイズたち一行からやや後ろ。そこには、四人の少女たちの後をつける一団があった。

「ちょっと、こういうのは止めた方がいいんじゃない？」

魔法学院の生徒らしい恰好をした、眼鏡をかけた少年が不安げに言った。

「大丈夫だって」

そう言ったのは、「風上」のマリコル又だった。

「休日に学院の生徒が買い物に来てるのは珍しくないだろう？」

「その通りだ、諸君」

そう言って薔薇の花を手に気障っているのは、ギーシュだ。

「僕たちは崇高な目的を持って集っているのだ。少なくとも、始祖ブリミルが罰をお与えになるようなことではない」

「そういうお前の目的はなんだよ？」

また別の生徒が質問する。

「決まっているじゃないか。この虚無の曜日を利用して、モンモラ
ンシーへの贈り物を買いに来たのだ」

「だったらどうしてこの集まりに参加してるんだ？」

「いや、それは……。そう、もう一つはコウメイ君への贈り物だよ。あれから、いろいろと教えて貰ってるしね。これを機に彼女の好きそうなものを研究しようかと」

「何を教えて貰ってるんだよ」

「別に君には関係ないだろ？ それより……」

ふと、ギーシュが言葉を濁した。

「まあ、人の気持ちに付け込むつもりはないが、少し人数が多すぎないかい？」

「たしかにそうだな」

マリコル又たちも同意する。

今、ここにいる男子生徒の数は十人を超えていた。

これがいったいなんの集まりなのかというと、言うまでもなく「自称ファンクラブ」の集いであつた。ある者は「コウメイファン」、またある者は「キュルケファン」、またある者は「タバサファン」、といった具合である。（どうやらルイズファンはいないようだ）

「本当に大丈夫なんかい？」

「まあ、大丈夫だろう……」

ギーシュたちが不安を覚えつつある中、自称キュルケファンの少年の一人が、リーダーシップをとって演説を始めた。

「同志諸君。もう一度、今日の目的を確認する。今日我々が集ったのは、ほかでもない。各々が愛する乙女たちの秘密を探り、最高のプレゼントを用意することにある！そして、もう一つ。彼女たちの身に何かがあれば、男たる我々が命を賭して守ることだ！異存はないな！？」

『オー！！！』

そのような馬鹿騒ぎを後目に、すぐ近くの、この辺ではたいへん変わった雰囲気のレストランの中で、フードを目深にかぶった人物が、目の前の変てこな料理を前に、よだれを垂らしているところだった。

第十三席 孔明、ルイズたちと街へ赴かんとすること（後書き）

いかがでしたでしょうか？

さて、猪々子さんと斗詩さん。あなた方が、この物語史上、初めて戦闘行為を行った人物となりました。大変、おめでとうございます（苦）

さて、この小説も「残酷描写あり」にしないといけません（涙）

なお、朱里が馬に乗れるのはアニメ版で乗っていたのに基づきました。

桃香や桂花などの非戦闘員も移動するだけなら乗ってましたし。

さて、この度始まった買い物は果たしてどのような結末を迎えるのか。

次回にご期待ください。

第十四席 孔明、買い物を楽しまんとすること（前書き）

お待たせしました。

今回の話は完全にギャグです。

ちなみに、意外な再会があります。
それでは、どうぞ！

第十四席 孔明、買い物を楽しまんとすること

ブルドンネ街。

街に着いたルイズたち一行が真っ先に入ったのは、服の仕立て屋だった。

今回、街に来た目的は、朱里のための衣服類をそろえるためである。だから、一番最初に仕立て屋に入るのは至極当然のことだった。その店はルイズの行きつけの店らしく、店の人たちは快く承ってくれた。

しかし、さすがに朱里が今着ているような服と同じものはそう簡単には作れない。作れたとしても、相当な時間がかかるであろう。

そこで、ハルケギニアの平民の女の子が着るような、動きやすい、ごく普通のシャツとスカートを何着か作ってもらうことにした。

ついでに下着もいくらか揃えて貰って、服関連の買い物は終わりのはずだった。

「ちょっと待って」

仕立て屋の店主が一行を呼び止めた。

「お嬢ちゃん。この新商品、試しにこれ着てみない？」

そう言っ、朱里に何かを勧めようとする。その「新商品」を見た朱里は、やや恥ずかしそうにうつむいた。

「私、ですか？」

「そうそう。サイズのにも似合いそうだし。ちょうど、似合いそうな子を捜してたんだねー」

「でも、いいんですか？」

「いって、気にしない気にしない」

「ですが……」

「いいんじゃないの、コウメイちゃん」

キユルケが口を挟んだ。

「あなたなら、何着ても似合いそうだし」

「キユルケさん……」

「そうね、着るだけなら別にいいわよ」

財布を確かめながらルイズも賛同した。

「ルイズさんまで……」

ますます恥ずかしそうな朱里。残るはタバサのみだったが、

「ね、タバサ。別に見られて減るもんじゃないし」

「コクリ……」

「はうう……」

四面楚歌である。そんなわけで、朱里は「新商品」を試着する運びとなった。

そして、「新商品」を試着して戻ってきた朱里を見て、皆絶句した。

「凄い、似合ってるわ！」

これはキュルケである。

「悔しいー！ でも、可愛いわ！ 反則よ、これ！」

これはルイズである。

「……反則……」

これはタバサである。

そんな皆の大絶賛の嵐の中、朱里はますますはずかしそうに顔を赤らめた。

「はうう、私、こういつヒラヒラしたのは、ちょっと……」

朱里が恥ずかしがっているにもかかわらず、皆が大絶賛の一品。

それは、黒と白を基調にしたフリル付きのワンピースだった。しかも、何故か肩のところは露出していて、そのくせ袖は付いているのだ。

おまけに、いつもは帽子の土台となっている短い金髪の頭には、ヘアバンドが取り付けられていて、これがいつそうの可愛らしさを引き立てていた。

ルイズたちが反則と言ったのも過言ではない。

店主は買っていないかと勧めたが、ルイズも自分の財布が惜しいのである。結局その場では買わなかった。朱里は少しホッとした。自分の恥ずかしい姿をこれ以上他人に曝すことはないと思ったからだ。

しかし、朱里の安心は脆くも崩れ去るのであった。

ルイズ一行が店を去った直後、その仕立て屋に、何故か鼻血を流している、魔法学院の生徒らしき少年たちが殺到したのである。

仕立て屋は一瞬恐慌状態に陥ったが、謎の鼻血軍団たちがいろいろと買い物していったので、なんだかんだで儲かったのであった。

*

次に寄ったのは本の置いてある店である。

タバサが最初に店に入った。朱里たちはそれに続いて店に入ったのである。

「はわゝ、本がたくさん……」

朱里は息を呑んだ。本好きな彼女にとってはたまらない光景である。

ただ、彼女はハルケギニアの文字は知らなかった。

仕方がないので、適当に見て回ることにしたのである。その際、朱里は適当に一冊を掴んでパラパラとめくってみた。字が読めないなら、絵のある本にしようと思ったからだ。

だが、その時、朱里はふと違和感を覚えた。

「あれ？」

もう一度、書いてある文字を見つめる。

「クックベリーパイの作り方、ってあれ？」

彼女は戸惑った。何と、全然知らないはずの文字を読めたのである。言っておくが、今朱里が手に取っている本は、まぎれもなくハルケギニアの文字の本だ。

（なんで？ 知らないはずの文字がなんで読めるの？）

なんかの見間違いじゃないかと、朱里は他の本も手にとってみた。いろんな本の、様々な文字に触れてみたが、やはり結果は同じだった。

（なんで、どうして？）

朱里は気味が悪くなった。ルイズに召喚されるまで、触れたこともないはずの文字が、手に取るようにわかるのだ。

（わけがわからない）

だが、その戸惑いもすぐに終わりを迎えた。また別の本を手にとったところで、彼女の目はその本にくぎ付けになった。

「はわわ。これは、す、凄いですう……」

ついさっきまでは突然のことに戸惑っていたのに、打って変わって、一冊の本の擒にぎとなってしまうた。

ひとたび熱中すると、もう止まらない。ついさっきまでは気味悪く思っていたのに、朱里はもうすっかり、その「謎の能力」に感謝の念さえ覚えていた。

そうして顔を赤らめ、目を小さな黒豆のようにして「その本」に熱中していたときだった。

「なにしてるの Koumei、行くわよ」

後ろからルイズの声がした。既にタバサが買い物を終え、皆で外へ行くこうとしている。

「はわわ!？」

朱里は慌ててその本を本棚にしまった。幸い、なにを読んでいたのか、ルイズにはばれていない。本を直すと、朱里は慌ててルイズたちの方へ歩み寄った。

なお、朱里は本を読んでいた時、自分の前髪に隠れた、おでこのルーンが微かに光っていたことには、まったく気がつかなかった。

余談だが、その後、その本屋には少年たちが大勢訪れ、朱里が最後に立っていた所の本がやたらと売れたという。

*

本屋を後にしたルイズたち一行は、ブルドンネ街の狭い大通りを歩いていた。

歩きながら、何かおいしそうなものを探していたのである。

「あら」

キュルケがふと、とある店を指した。

「おいしそうな飴が売っているじゃない」

それは、小さな円筒型の、やけに細長い棒状の飴だった。見れば、様々な色の飴が置いてある。どうやら、色によって味も異なるらしい。

「そうね。買っていこうかしら？」

ルイズも立ち止まって言った。タバサも頷き、朱里も同意した。皆、やや小腹がすいていた。

そんなわけで、一人が一本ずつ（朱里はルイズのおごりで）の飴を手を取ったのである。

ちなみに、ルイズは赤色のベリー味。キュルケは白色のミルク味。タバサは緑色のハシバミ草味。そして朱里は黄金色の蜂蜜味を取ったのであった。

そして彼女たちは、その棒状の飴を舐めながら歩いたのだが、それを後ろで見ていたギーシュやマリコル又たちが馬鹿のように興奮していたことは知らなかった。

もちろん、その日の飴屋台は過去最高の売り上げを記録したのであった。

＊

「いやー、今日は愉快だねー」

にやけた面でマリコルヌが言った。

「いいものは見れるし、おまけに女の子へのプレゼントも手に入る。こないいい日も珍しいものだねー」

「そうだな」

ギーシュも同調する。

「プレゼントもきちんと用意できたし、後は各々渡すだけだ」

「しかし、なんか物足りないよなー」

ふと、隣にいた、ギーシュの友人らしき少年が言った。

「なにがだ？」

「だって、ほら。こうやって女の子の跡をつけ回すだけで終わるなんて、物足りないじゃないか」

「たしかにそうだねー」

マリコルヌが頷いた。

「ああ、いつそなんか、ちょっとした事件でも起こらないかな？
例えば、乙女がピーンチ、みたいな展開になつて、それを僕らで力
ツコよく助けて、乙女のハートをゲート、みたいな……」

「いくらなんでも、それは出来すぎだろう？」

眼鏡少年が口を挟んだ。

「だいたい、『ゼロのルイズ』を含めて、メイジが三人。その辺の
ゴロツキが手を出せるわけが……」

言いかけた時だ。耳をつんざくような悲鳴が響き渡ったのは。

「なんだ！？」

「あっちだぞ！ 裏通りだ！」

ギーシュたち男子軍団、十数人は、ただちに悲鳴のあつた方へと
急行した。彼らはゴミの散らかる裏通りの方に入った。そこから悲
鳴が聞こえたからだ。そして曲がり角を曲がったところで、彼らは
見た。

「ああ！？」

真っ先にマリコルヌが悲鳴をあげた。

「コウメイちゃんが！」

「なにっ！？」

ギーシュたちも見た。なんと、汚い裏通りの真っ只中で、朱里がいかに悪そうな男たち三人に捕まっているではないか。（ちなみに、男たちは恋姫世界でいつも出てくる三人組に、服装以外はそっくりだ）

どうやら、ルイズたちが目を離れた一瞬の隙に、男たちが朱里を路地裏へと連れ去ろうとしたようだった。見たところ、ルイズ、キユルケ、タバサの三人が杖を構えてはいるものの、チビな男が朱里の首すれすれに短剣を突き付けていたので、どうすることもできないようだ。

「大変だ！」

「どうするんだよ！？」

「落ち着きたまえ、諸君！」

ギーシュが皆に呼び掛けた。

「こういうときこそ、男の見せ場というものだ！ 皆で力を合わせて助けようではないか！」

気障つつ、まともなことを言っつて、皆の動揺を抑えようとしたのである。だが、現実はそのいかなかった。

「俺が助ける！」

「俺が先だ！」

「いや、俺だ！」

「僕だ！」

「どけ、邪魔だ！」

功名心のあまり、男子軍団は先駆け争いをしてしまったのである。

「お、おい。落ち着きたまえ……」

ギーシュが慌てて止めに入ろうとしたとき、男子の誰かの腕がギーシュの体を突き飛ばした。突き飛ばされたギーシュは後ろに転んでしまった。幸い、ケガはなかったのだが、その際、近くに立ててあった木箱を倒してしまった。それがさらなる惨事を呼び起こしたのである。

「ん？」

皆が一斉にその箱を見た。どうやら生ごみを入れる箱らしい。直後、箱の中から大量の黒い何かが出てきた。それを見たギーシュ達は、悲鳴をあげた。

「ギャアアア！！？」

出てきたのは、不衛生な環境に発生する、害虫の大群だったからだ。その場はたちまち阿鼻叫喚の地獄に変わり果てた。これでは、救出作戦どころではない。結局、彼らはカッコいい姿を見せることは無かったのであった。

＊

一方のルイズたちである。

「ちよつと、あんたたち！」

ルイズが、朱里を捕まえている男たちに向かって怒鳴り散らした。

「わたしの『従者』を返しなさいよ！」

だが、男たちは下品に笑うだけだった。

「そうか、貴族さまの従者か。こりゃあ、驚いた」

リーダー格の背の高い男が言った。

「儲けやしたね、アニキ」

「そうなんだな」

「へへへ、そこの貴族のお嬢ちゃん」

「な、なによ」

思わずたじろぐルイズに向かって、男は無茶な要求を突き付ける。

「俺たちと取り引きしないか？ この可愛い女の子を傷つけたくなけりゃ、お嬢ちゃんたちの有り金、全部出しな」

「もちろん、その杖もだ」

「なっ！？」

キユルケが怒った。

「汚いわよ！」

「へえ、そうかい。それならそれで、こっちにも手はあるぞ。おい、デク。しっかりと抑えておけ」

「わかったんだな」

そして、あるうことが、抑えつけられて無防備な朱里に向かって、卑しい笑みを浮かべながら近づき始めたのである。

「はわわ……」

朱里は恐怖でどうすることもできない。すなわち、貞操の危機である。

「やめなさい！」

ルイズがそう叫んで、思わず杖を振り上げようとしたときだった。

「痛てえ！？」

突然、朱里に刃物を突き付けていたチビ男が悲鳴をあげたのは。見ると、彼の掌には、一本の串が刺さっていた。

「な、なんだ？」

動揺する男たち。そんな彼らを見下すかのように、近くの建物の屋根の上に、人影が現れる。

「か弱き少女を、路地裏に連れ込んで、狼藉を働こうとする悪党どもめ！」

「なにい！？」

声をあげる男たち。だが、次の瞬間、屋根から華麗に飛び降りてきた「誰か」が、朱里を抑えつけていた大男の頭を踏み台にした。大男が倒れた隙に、朱里はルイズたちの方に駆け寄る。そしてさっきまで自分のいた所を見た瞬間、石になった。

「だ、誰だ、貴様！」

リーダー格の男の問いに、その謎の人物は答える。

「ある時は霧に溶けた謎めいた美人武者。またある時はさすらいの狩人。しかしてその実態は……」

その答えを聞く前に、朱里は普段だったら絶対に出さない馬鹿力でルイズたち三人を引っ張って逃げてしまった。一刻も早く、自分の知っている人と会いたいはずの朱里だったが、今回だけは話が別だ。

結局、自称、「謎の美人武者」が悪党たちを片付け終えたときには、朱里たちはとくに行方をくらましていたのであった。入れ替わりに、一部始終を見ていた男子軍団がサインを求めてきて、快く応じたのは別の話である。

なお、後でルイズたちがその人物の恰好について評したが、芳しいものはなかった。

「何よ、あれ。かつこ悪い仮面付けて」

これはルイズである。

「美人なのは認めるけど、あれはちょっとねえ」

これはキュルケである。

「……変態仮面……？」

これはタバサである。

こんな有り様であった。そんなわけで、ついに朱里が「謎の人物」と知り合いである、と話すことはなかったのであった。

余談だが、翌日、ルイズ、キュルケ、タバサの各々の部屋の前に、大量の「おみやげ」が置かれた。特にルイズの部屋の前に置かれた「コウメイ」宛のプレゼントの中身に、朱里は大変戸惑う羽目になった。一方、ルイズへのプレゼントは棒状の「飴」だけだったことで、彼女はこの不公平さに激怒したという。

なお、その日の食堂で、とあるカップルが仲良くしていたとか、
していなかったとか。

第十四席 孔明、買い物を楽しまんとすること（後書き）

とある武器屋にて

「おい、俺様の出番はどうした!？」

「うるせえ、デル公。お前なんか、あとがきで出てるだけかもしれません! 世の中にはなあ、本編と違って、この話ではあとがきにさえ出られないヤツだっているんだよ!」

「なるほどって納得できるか! 出番くれ!」

おしまい

第十五席 孔明、趙雲と再会すること（前書き）

お久しぶりです！

卒論が終わり、やっと書けました。

今回は、朱里がようやくあの人と再会します。

少し無茶かもしれませんが、お楽しみください！

第十五席 孔明、趙雲と再会すること

トリスティン王国、とある街道

なんとかオーク鬼をまいた袁家一行は、日が差し込む森の中の道を歩き続けていた。歩くこと既に数日。ろくに食事も取れてない一行は、誰が見てもわかるほどやつれ果てていた。麗羽、猪々子、斗詩の三人組が装着している金ぴかの鎧はとくに色あせ、元の輝きは微塵とも感じられない。それだけではなく、一行全員の着ている服も所々汚れ、麗羽と美羽に至っては、普段よく手入れしてもらっているであろう、長い髪は痛んでぼさぼさになりつつあった。仮に、ハルケギニアの住人が、今の彼女たちの姿を見れば、「落ち武者か浮浪者」の一行と間違えるであろう。（数日前なら、「貴族と従者」の一行にも見えたであろうに）

そんな彼女たちを嘲笑うかのように、空の太陽は明るく照りつけた。

「のどが渴いたのじゃ……」

美羽がうなだれながら言った。無理もない。ただでさえ一行の中では最も幼い上に、ここ数日、ろくなものにありついていないのだ。

「蜂蜜……、誰か、蜂蜜水をくれたも……」

「ダメですよ、美羽さま」

七乃が残念そうに言った。

「あるのは、地の水。そうでなければ血の水だけです」

「そんなの飲みたくないのじゃ!」

美羽は今にも泣き出しそうだった。

「うわーん、誰か蜂蜜を……!」

「お黙りなさい、美羽さん! あなたのような小娘の泣き声を聞いとると、こっちまでのどが渇くじゃありませんの!」

「ふ、二人とも落ち着いて!」

「大声出したら、よけいにのどが渇きますよ!」

「うわーん、蜂蜜う!」

「うるさいですわね!」

「美羽さま、もう少しの辛抱ですよ」

「張勳。妾はその台詞はもう、聞き飽きたのじゃ……!」

こうして、一行の旅は続くのであった。

トリスティン魔法学院

学院長室の一階下にある宝物庫の扉の前で、秘書のミス・ロングビルは突っ立っていた。

ただし、ぼうつとしているのではない。指揮棒くらいの長さの杖を手に、なにやら呪文を唱えているところであつた。

彼女が唱えたのは、扉の鍵を開ける魔法、『アンロック』である。しかし杖を振っても、錠前はなんの反応も示さない。

ミス・ロングビルも、それくらいは最初からわかっていたらしく、次の呪文を唱えた。

次に唱えたのは、『鍊金』の呪文である。詠唱を完成させ、再度杖を振った。

だが、扉には何の変化も見られない。

「スクウェアクラスのメイジが、『固定化』の呪文をかけてるみたいね」

そう呟いた時、誰かが階段を上ってくるのに気付いた。ミス・ロングビルは杖を折りたたみ、ポケットにしまった。

やがて、足音の主が現れた。

「おや、ミス・ロングビル」

やってきたのはコルベールだった。

「ここでなにを？」

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているのですが……」

ミス・ロングビルは愛想のいい笑みを浮かべながら言った。

「はあ。それは大変だ。一つ一つ見て回るだけで、一日がかりですよ。何せここはお宝ガラクタひつくるめて、所狭しと並んでいますからな」

「でしょうね」

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか」

「それが……、ご就寝中なのです。まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし……」

「なるほど。ご就寝中ですか。あのジジイ、じゃなかった。オールド・オスマンは、寝ると起きませんからな。では、僕も後で伺うことにしよう」

コルベールはそう言うと言ったが、なにを思ったのか、すぐに立ち止まり、ミス・ロングビルの方を振り向いた。

「その……、ミス・ロングビル」

「なんででしょう?」

「もしよかったら、なんですが……。昼食をご一緒にいかがですかな?」

男性から女性への、さりげないお誘いである。ミス・ロングビルは少し考えたあと、にっこりと微笑んで、申し出を受けた。

「ええ、喜んで」

そんなわけで、二人は並んで歩きだした。

「ねえ、ミスタ・コルベール」

ミス・ロングビルが、気をよくしたコルベールに話しかける。

「は、はい? 为什么呢」

「宝物庫の中に、入ったことはありません?」

「ありますとも」

「では、『屠龍の宝剣』をご存知?」

「ああ、あれですか。あれは、なかなか珍しい剣でしたなあ」

ミス・ロングビルの目が光った。

「と、申されますと?」

「なんというか、この辺では見ない綺麗で立派な飾りつけが施されていますし、なにより、その辺の店で売られているような剣とは違った威厳みたいなのが伝わってくるような……」

「それは一目見てみたいですわ」

「まあ、それでしたら、また今度、オールド・オスマンにでも頼んでみましょう。それより、何をお召し上がりになります？ 本日のメニューの中には、なんでも、『フカヒレ入りスープ』とかいう珍しいものが出るそうですが……。うん、しかし最近珍しい料理が多くなりましたな。ま、美味しいからつい食べ過ぎてしまうのが癪の種ですが。ま、今度コック長のマルトー親父に会ったときに作り方でも聞いておきましょう。なに、僕はマルトー親父に顔が利きましてね……」

「ミスタ」

ミス・ロングビルは、コルベールの話を遮った。

「は、はい？」

「料理の作り方の話はまた今度お聞かせ願えないですか」

「おっと、つい喋りすぎましたな」

「しかし、宝物庫は立派なつくりですわね。あれでは、どんなメイジを連れてきても、あけるのは不可能でしょうね」

「そのようすな。メイジには、あけるのは不可能と思います。な

んでも、スクウェアクラスのメイジが何人も集まって、あらゆる呪文に対抗できるよう設計したそうですから」

「ほんとに感心しますわ。ミスタ・コルベールは物知りでいらつしやる」

ミス・ロングビルがコルベールをおだてあげるように言った。

「え？ いや、……。はは、暇にあかせて書物に目を通すことが多いもので……。研究一筋と申しましょうか。はは。おかげでこの年になっても独身でして……。はい」

コルベールが苦笑まじりに言うと、ミス・ロングビルがさらにおだてた。

「ミスタ・コルベールのそばにいられる女性は、幸せでしょうね。だって、誰も知らないことを、たくさん教えてくださるんですから……。」

「いや、もう！ からかつてはいけません！ はい！」

こうして、コルベールはすっかり気分を良くしたのである。その後、彼はミス・ロングビルをユルの曜日に開かれる「フリッグの舞踏会」に誘いたいあまりに、彼女からの質問に軽々しく答える運びとなった。その答えたことの中には、彼とオスマン氏しか知らない、宝物庫の重大な欠陥に関することがわずかに含まれていたのだが、悲しいかな、その時のコルベールは、つい口を滑らせてしまったのである。むろん、それが原因で、少し後に騒動が起こることなど、彼は知らない。

*

一方その頃、朱里は人気のない洗濯場にいた。

どうして人気がないのかというと、ルイズをはじめ、学院の生徒たちは授業中。シエスタたち、学院内で働くメイドたちは昼食の準備中だからだ。

朱里はなにやら一枚の紙切れを手にしていた。その紙は、今朝、朱里が洗濯をしていた際に、突然彼女の目の前に投げ込まれたものであった。

そこには、この学院内では朱里にしか読めない文字で、こう書かれていた。

「後で、一人でその木の前に来るように。合い言葉は、『常山じょうざんの登り竜』」

それを読んだ朱里は、一瞬で理解した。

そして、授業に行くルイズに一言断った後、こうして洗濯場に生えている一本の木の前にやってきたのだ。そして、その木の枝の下に足を踏み入れた時であった。

「合言葉は？」

突然、朱里のものではない、女性の声が入った。

「『常山トウサンの登り竜』」

朱里は紙に書いてある「漢文」の通り、そう答えた。すると、木の上から何かが地面へと降り立った。それを見た朱里は、安堵の表情を浮かべる。

「お久しぶりです」

「ああ、本当だな。『朱里』」

地面に着地した「それ」は、朱里のことを、「諸葛亮」でもなく、「孔明」でもなく、真名である「朱里」で呼んだ。朱里にとって、自分のことを真名で呼ばれたのは、本当に久しぶりのことであった。念のため言っておくが、彼女はハルケギニアに来て以来、誰にも自分の真名を教えていない。ルイズはもちろん、親しくなったシエスタにさえ、未だに教えておらず、字の「コウメイ」で呼んでもらっているのだ。

それはつまり、朱里の目の前にいる人物が、先ほどの会話でもわかるとおり、「ハルケギニア」の住人ではないかつ、互いに真名を授けあった人物であることを意味していた。

「本当にお久しぶりです。『星さん』」

朱里はそう言った。朱里の目の前にいるのは、彼女より年上な外見の、スタイルのいい体つきと不思議な雰囲気とを持ち合わせた、

青い髪の少女。自称、「メンマ好きな美人武芸者」。またあるときは、「美と正義の使者、かちょうかめん華蝶仮面」。その実態はいうまでもなく、「常山の趙子龍」こと、趙雲（字は子龍。真名は星）だ。ちやうしりゅう

朱里にとっては、愛紗や鈴々と同じく、桃花村で互いに真名を授けあった仲間たちのうちの一人である。また、以前には共に旅をたし（途中はぐれたが）、太平要術封印の決戦では共に肩を並べて戦ったのだ。朱里にとって、この再開が嬉しくないはずはない。

「もう二度と会えないかと思いましたよ！」

朱里は喜びのあまり、涙を流しながら再会したばかりの仲間、星に寄りかかった。そんな朱里の頭に、星はポンッと優しく片方の手を置く。

「私もまさか、こんなところで朱里と会うことになるとは思わなかったな」

囁くような声で、星が言った。

「本当ですよ！ それにしてもよかったあ……」

なかなか嬉しさから抜け出せない朱里。当然と言えば当然であろう。だが、それも終わらせなければならぬ。彼女の頭の中で、いくつかの疑問が生じたからだ。

「ところで星さん」

朱里は喜びもそこに質問した。

「星さんがここにいるってことは、もしかすると愛紗さんや鈴々ちやんたちも……」

期待のこもった声で聞いたが、星は首を横に振った。

「いや。おぬしには悪いが、今のところは私だけだ」

「そうですか……」

朱里は少し残念そうな表情になった。そんな朱里に星は声をかける。

「まあ、そう落ち込むな。せつかくの再会の場面で落ち込むなんておぬしらしくもないぞ」

「そうですよね」

せつかくの再会にお茶を濁すわけにもいかないなので、再び笑顔をとり繕う朱里。すると、今度は星の方から聞いてきた。

「しかし、朱里。おぬし、どうやら、いろいろと大変な目に遭っているようだな」

「え、あ、はい。そうでしゅ……あう……」

思わず舌を噛んだ後に、朱里は今までのことを掻い摘んで話した。霧の中で崖から転落したこと。気が付いたら、わけのわからない国にいて、しかもルイズという少女の「使い魔」にされていたこと。おでこに謎の鰐（刺青）みたいな模様が描かれていたこと。いろいろ困難もあったが、なんやかんやで今のところは上手くやっている

ことなど、全部話した。

「おぬしも大変だな」

一通り聞いた星は、そう呟いた。

「ついこの間は、仮にも三万もの大軍の指揮を執った軍師が、一夜にして名家の小娘の召使い、とは。笑うに笑えんぞ」

「でも、最近は慣れましたし、大丈夫ですよ」

「まあ、おぬしはそう言うが……」

（これを愛紗や鈴々たちが知ったらどういう騒ぎになるか）

星は言いかけたが、止めた。たしかに、愛紗や鈴々たちがこれを知ったら、とんでもない騒動が起きるのは必須であろう。危ういかな、ルイズ。

「私は平気ですよ。仲のいい人もできましたし。それより……」

今度は朱里が質問する番だ。

「星さんは、どうしてここに？」

「ああ、聞いてくれるか、朱里」

そう言つと、星は語り始めた。

＊

星の話によると、こうだ。

朱里たちと共に、水鏡先生の屋敷に向かう途中、またしても霧の中ではぐれてしまった。

皆を捜してしばらく歩いていたとき、突然、その場が金色に輝き、星は気を失った。

そして目が覚めると、目の前には一人の怪しげな道士風の男。彼が言うには、

「今まで汝が見てきた世界は、全てまやかしかだ。私は汝を、『真実の世界』へと案内したい」

「『真実の世界』へ行きたければ、この『赤い丹薬』を吞めばいい。今までのまやかしの世界へ帰りたければ、こっちの『青い丹薬』を吞めばいい」

馬鹿馬鹿しいので、星は青い丹薬を吞もうとしたが、その怪しげな道士はこう言った。

「いいのか？ 汝は『まやかしならぬ、本物のメンマの味』を知りたくないのか？」

それを聞いた星は、飛びつくように、赤い丹薬を呑んだ。すると、体全体が冷たくなったような感触に襲われ、気が付いたら、この世界に来ていた。

*

「と、いうことだ」

全てを話し終える星。だが、朱里は半信半疑だった。

「あの、本当なんですか。それ」

すると、星は自信満々にこう言った。

「いや、ウソだ」

それを聞いた瞬間、朱里は盛大にずっこけた。

「あ、相変わらずですね……」

起き上がりながら、朱里は苦笑を混じらせた。

「ところで、朱里。街でこのような噂を聞いたんだが……」

朱里が起き上がるのを見計らって、星が唐突に話を始めた。

「なんですか？」

「ああ。なんでも最近、盗賊が出てるらしいぞ」

「盗賊、ですか？」

訝しがる朱里に向けて、星は情報を渡し続ける。

「街の人間の噂だと、『めいじ』とかいう妖術使いの仕業で、『土くれのふーけ』とかいうそうだ」

「『土くれのふーけ』ですか？」

「ああ。その盗賊は神出鬼没で、この『とりすていん』とかいう国の貴族たちから、いろいろと財宝の類を盗んでいるそうだ」

「なんですか、それ」

朱里は詳しく聞きたいと思った。いつの世も、他人事として情報を聞き逃すのは、極めて恐ろしいものだ。

星が教えてくれたのは、その「土くれのふーけ」は、繊細に屋敷に忍び込んだかと思えば、貴族の別荘を「妖術」で粉々に破壊したりと、盗み方に一貫性がないこと。主に「鍊金」の術を使い、扉や壁を粘土や砂に変えたり、時には巨大な土の「ごーれむ」とかいう巨人みたいなものを使ったりすること。正体が男か女かは不明なこと。犯行現場には「領収書」とやらを残していくこと。そして、「

強力な魔法が付与された高名なお宝」、マジックアイテムが何より好きということであつた。

「そうですか」

朱里は仕入れた情報を、頭の中で何度も反芻させながら頷いた。

「星さん、ありがとうございます。私も用心します」

「ああ、そうした方がいいぞ」

たがいに頷きあつた。朱里が用心すると言つたのは、ここが「魔法学院」だからだ。「魔法」に関係することを教えている以上、「土くれのフーケ」に狙われやすい「お宝」がない方がおかしいであろう。それに自分がいつ巻き込まれるかわからない。用心しておくにこしたことはないのだ。

「さて、私は一旦行くか」

一通り語り終えた星が、今度はそう言つた。

「え、行くのですか？」

朱里は寂しくなった。せっかく再会できたのに、もう行ってしまふと思つたからだ。そんな朱里を見た星は、微笑みながら言つた。

「なに。私がいつまでもここに居たら、おぬしの邪魔になるだろう。それに……」

突然、星が怪しい笑みを浮かべた。それはそれは怪しい表情だ。

「おぬしのおもしろい姿が、いろいろと見れそうだからな」

「はわ!？」

朱里は慌てた。まさかと思ったからだ。

「ま、まさか……」

「ああ。街でのおぬし達の行動、全部見てたぞ。あれはあれでもしろかったな」

「はわわ、忘れてください！ 私があんな本に夢中になってたなんて……」

「なんの本だ？ たしかにおぬしは何やら真剣に読み漁っておったが」

「な、なんでもないですう！ 忘れてください！」

どういうわけか、「趙雲の罾」にはまってしまった朱里。なんとかこの状況から逃れようと、慌てて話題を変えようとした。

「星さん。そんなことより、大丈夫なんですか？」

「なにがだ？」

「ほら、星さんが大好きな」

「あー、アレのことか」

星は何度が頷くと、言った。

「アレなら大丈夫だ。きちんと確保できる場所も見つけたからな」

朱里は絶句した。この世界には竹などないはずなのに、どうして「アレ」があるのだろうか。

「よ、よかったですね……」

そう言うことしかできなかった。

「うむ。そう言えば朱里。もう一つ聞きたいことがある」

「な、なんですか？」

思わず問いかける朱里に、星はかまわずに言う。

「この間、街でおぬしを救った『華蝶仮面』の件だが、あの時おぬしと一緒にいた者たちは何と言っておったか？」

それを聞いて、朱里は凍りついた。ルイズたちはまともな評価をしていなかったからだ。

「いえ、その……。凜々しくてカッコいいって言ってましたよ……」

もちろん、嘘である。だが、星は飛びきりの笑顔で嬉しそうに言った。

「そうであつたか。『凜々しくてカッコいい華蝶仮面』か。『美と

正義の使者、華蝶仮面』は世界の壁を越えようと、皆の人気者だな」

そう言って一人で大笑いする星。ちなみに朱里は知らなかったが、この間の一件のせいで、この魔法学院の一部の男子生徒の間では既に、「華蝶仮面」は大人気を博していたのであった。それはもちろん、ギーシュやマリコル又たちの集団である。

「さて、朱里。おぬしのおもしろいところを見たい……もとい、おぬしの邪魔にならぬよう、一旦別れるが、いざという時は、この『常山の趙子龍』がおぬしの力となろうぞ。では、さらばだ！」

こう決め台詞を残して、星は先ほどの木の上に飛び乗ったかと思いきや、そのまま城壁を飛び越えて学院内から姿を消した。

それを見送った朱里は、ものすごく不安だった。もちろん、星の頼もしさは知っているのだが、それとは別の意味での話だ。

（皆さん、なんだかとても不安ですう……）

せつかく頼もしい味方が来てくれたというのに、素直に喜べない朱里であった。

ちなみに、星は朱里に盗賊の噂話をしたが、トリスティンのとある料亭にて、「土くれのフーケ」とは比べものにならないほどしょうもない「食い逃げ事件」が、五人の女性たちによって引き起こされたのは別の話である。

第十五席 孔明、趙雲と再会すること（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ちよつと急すぎたかもしれません。

まさか、ここで星と再会させることになるとは……。

ただ、混乱は避けたいので、星には後ろから朱里を見守ってもらおうと思います。

さて、華蝶仮面はハルケギニアに流行るのか？

そして、「屠龍の宝剣」とは？

次回をお待ちください。

第十六席 フーケ、屠龍の宝剣を手に入れんとすること（前書き）

お待たせしました。

長引いてしまつて、本当にすみません。

それではお楽しみください。

第十六席 フーケ、屠龍の宝剣を手に入れんとすること

トリスティン王国、とある村

いつの世も、どこへ行っても、子どもほど元気で純粋なものはないであろう。

広大な草原を望む場所に位置するこの村でも、それは例外ではなかった。現に、村近くの草原にある花畑では、何人かの子どもたちが集まって、仲良く遊んでいた。追いかけてっこをしたり、お花を摘んだり、それは、それは楽しそうだ。

そんな子どもたちに、呼び掛ける声があった。

「みんなー！」

それは、女の子の声だった。むろん、遊んでいる子どもたちの中で、この声の主を知らない者はいない。何事かと、皆遊ぶのを止め、声がした方へと駆け寄った。

やがて、声の主が姿を現した。やって来たのは、黒眼黒髪の女の子だ。ここにいる子どもたちにとっては、いつも一緒に遊んでいる遊び仲間で、知った顔である。だから、彼女がここに来ることは珍しくないばかりか、いたって普通のことである。

「どうしたの？」

遊んでいた女の子の一人が、やって来た友達に声をかける。する

と、黒髪の女の子は、ニコツと嬉しそうに微笑んだ。その時、皆が気付いた。自分たちの友達が、一人の見慣れない女の子の手を引いていることに。

「今日はみんなに、新しいお友達を紹介しまーす！」

黒髪の女の子はそう言うと、自分が手を引いてきた、一人の女の子を、友達たちの前に出した。その女の子は、長いリボン付きの大きなとんがり帽子を被っているなど、この村の子どもたちとは似ても似つかない服装をしていた。子どもたちの誰もが、その少女の奇抜な恰好に見とれた。

「……あわわ……うう……」

人見知りか、激しいのか、恥ずかしがって三角の帽子を目深に被ろうとする女の子。だが、そんな彼女などお構いなしと言わんばかりに、黒髪の女の子は大声で皆に紹介した。

「わたしの新しいお友達の、ヒナちゃんです！」

本当に威勢のいい声だった。ここまで来ると、もういたしかたない。「ヒナ」と呼ばれた、緑色の瞳に、紫がかった長いツインテールの髪の女の子は、自ら自己紹介と挨拶をするしかなかった。

「あわわ……。……わたし、ヒナといいます……。うう……。その……。よろしくお願いします……。あう……」

顔を真っ赤にして話すツインテール少女。かなり恥ずかしいのであろう。顔は俯き加減で、しかも真っ赤である。彼女は一瞬、挨拶に失敗したかと思った。

だが、子どもたちの反応は、彼女の予想の斜め上をいった。次の瞬間、たくさんの拍手が鳴り響いた。「ヒナ」と名乗った少女が顔を上げると、彼女と同じ年くらいの女の子が駆け寄って来た。そして、右手を前に突き出した。握手を求めているようだった。

「ヒナちゃん、ていうんだ。よろしくね」

それを見た「ヒナ」は、恥ずかしがりながらも、相手の手を握った。それを見た子どもたちは、我も我もと、「ヒナ」に握手を求めた。彼女は困惑しつつも、一人一人の手を握り返した。それが済むと、皆はどうするかを話し合った。

「何して遊ぶ？」

「追いかけてこしょう！」

「それよりお花摘もうよ！」

「待つてよ、ヒナちゃんを『秘密基地』に案内してあげようよ」

「そうだね。山とかよく見えるし」

そんな皆の姿を見た「ヒナ」は、なぜかわからないが、嬉しく思った。

（皆、初めてなのに、わたしなんかのために……）

そう思ったときだった。

「よし、行こう、ヒナちゃん」

そう言って、黒髪の女の子が腕を引いたのは。

「あわわ……、どこへ……？」

「『秘密基地』だよ。みんなが案内してくれるから、大丈夫！」

尋ねる「ヒナ」に、女の子はニコツと笑って返した。

*

トリスティン魔法学院

時間は既に夜。二つの月からの明かりが、魔法学院の本塔の外壁を照らしている。

そんな本塔の壁に、垂直に佇んでいる、フードを被った人物がいた。この人物こそ、王国中で噂になっているメイジの盗賊、「土くれのフーケ」である。

フーケがどうして魔法学院の本塔の壁にいるのかといえば、理由はただ一つ。この本塔の五階に、お目当てのマジックアイテムが保管されている、宝物庫が存在するからである。

しかし、強力な『固定化』の呪文のかかったその壁は、ちょっとやそつとでは崩れそうにはない。

「これじゃ、どうしようもないね……」

フーケは悩んだ。もちろん、この壁の「弱点」は知っていた。知っているつもりだったのだが、実際に見てみると、はたして通用するのか、疑問である。

「あの、禿頭め。^{はげあたま}なにが、『物理衝撃』が弱点ですって？　こんなに厚かったら、馬鹿でかい大砲でも持ってこないとダメじゃないの。それに、この私が、『穴掘り』なんてするのもなんだかねえ……」

フーケは他人から聞いた「弱点」を頭の中に反映しながら呟いた。その「禿頭」曰く、塔の外壁は物理的な力に弱く、例えば、巨大なゴーレムとかに殴られたりすれば、崩れ落ちるかもしれないのとだった。しかし、こうやって実際に調べてみると、確かに傷くらしいはつくかもしれないが、壁そのものは厚く、簡単には壊れそうになかった。

また、もう一つ弱点があることも聞いてはいたが、そっちは、塔の下を、地中深くまで掘ってしまえば、いずれは地軸の限界まで達するだろうから、どんな塔でも崩れ落ちるというものだが、これは笑止千万と言わねばならない。そもそも、戦で軍勢を使って敵の城壁を根元から掘り起こすのならともかく、たった一人で、この巨塔を掘り起こすなど、いくら「土のエキスパート」たるフーケであっても、できない相談であった。

考えただけで、笑いたくなる話である。

「よわったね。やっとここまで来たってのに……」

フーケは齒噛みをした。

「かといって、『屠龍の宝剣』を諦めるわけにやあ、いかないね……」

そう独り言を呟きながら考えていた時、ふと、すぐ真下の中庭に、誰かが近づく気配がした。それを察知したフーケは、壁をけつて、すぐに地面に飛び降りた。高いところから飛び降りたので、地面に落ちる直前に、『レビテーション』を唱えるのを忘れない。

そうして着地したフーケは、すぐに近くの植え込みに、その姿を眩ました。

*

中庭にやって来たのは、四人の少女たちであった。

四人と言うのは、もちろん、ルイズ、キュルケ、タバサ、そして朱里である。

朱里はともかく、ルイズたち三人は魔法学院の生徒である。もち

ろん、こんな夜に出歩くのはおかしい話だ。本来ならば寢床に居るべき彼女たちが、どうしてこんな所にいるのであろうか。

その理由は、呆れるほどに単純なものだった。

ことのきつかけは、朱里がルイズの部屋の前の廊下で、たまたまキュルケに出会ったことに起因する。

雑用を終え、ルイズの部屋に戻る途中だった朱里は、偶然にもキュルケに会った。それだけならよかったのだが、その際、キュルケは朱里をその場に呼びとめておいて、一度自分の部屋に戻り、また戻って来たのである。

そして戻って来たキュルケが、ちよつとしたものをプレゼントしたのだ。なんでも、彼女の故郷、ゲルマニアのお菓子らしい。（これが何か、朱里は知らなかったが、むいた栗の実をブランデーで蒸したものだっただ）

とりあえず、珍しいものを貰ったから食べようと、お礼を言っ、ルイズの部屋に入って食べようとしたとき、それをルイズに見つかって問い詰められたのだ。

そして、朱里の口から、キュルケの名前が出たとたん、彼女は自分の部屋を飛び出し、キュルケの部屋へと怒鳴りこんだのである。私の従者に、何の許可もなく、勝手に食べ物を与えるとは何事かといつものように、ケンカ、と言うよりは、一方的に怒鳴り散らすルイズと、それをからかうキュルケとの三文芝居になった。

もともと、ルイズはキュルケ個人のことが嫌いである。

また、キュルケがトリステイン人ではない、隣国ゲルマニアの間であることもあって、当たり前はよけいに凄まじいものといえた。ただ、これについては、ルイズ一人の責任と言うには、酷と言わべきである。

そもそも、ルイズの実家、ヴァリエールの領地は、ゲルマニアとの国境沿いにある。しかも、国境を挟んだゲルマニア側の土地こそが、キュルケの実家がある、フォン・ツエルプストー家の領地であったため、この両家は、過去何度も争いを繰り返してきた、因縁ある関係なのだ。

争いというものもまちまちで、恋人の奪い合いから始まったかと思えば、国同士の戦争で、命をかけた殺し合いまで繰り返しているのである。

朱里の世界でいえば、農耕民族の国「漢」と、北の草原の遊牧民族の国「匈奴」みたいな関係と似ていると言えはいいであろうか。

そんなこともあって、その日もルイズとキュルケは口論を繰り返したのである。

だが、ルイズがとうとう、魔法での決闘を申し込むまでの事態になってしまった。

しかし、生徒同士での決闘は禁止されており、これが先生に見つかると、大変なことになる。

だから、朱里は慌てて止めようとしたが、ルイズたちは言うても聞いてくれそうになかった。

仕方なしに、朱里はことをできるだけ小さく済ますべく、ちょうど通りかかったタバサの協力のもと、自分が提案した「決闘」で白黒つけて貰うことにしたのであった。

「それでコウメイ」

中庭に出てきて早々、ルイズが口を開いた。

「それはなにかしら？」

そう言って、朱里が抱えている、円形の板を指さした。

「これが、今回の『決闘』に必要な『的』ですよ」

朱里が答えた。彼女はその辺に転がっていた木材の破片で、一枚の的を急いで作ったのである。それにしても、相変わらず器用なものであった。

「コウメイちゃん。あなたって、本当に器用ね。どこかの誰かさんと違って……」

キュルケが朱里を褒める一方、チラッとルイズを見た。ルイズは今にも堪忍袋の緒が切れそうな様子であった。

「それで、それをどうしろというの？」

苛立ちの表情を見せつつ、ルイズが言った。気のせいか、自分が爆発するのを、自分なりになんとか抑えているようにも見えた。

「はい。では説明します」

できるだけ早く、穩便に始めようと、朱里が急いで説明し始めた。

「まず、こちらの的を、タバサさんの魔法で、空中に浮かせてもらいます」

「それで？」

「その浮かんだ的を、ルイズさん、キュルケさん、お得意の魔法で、射抜いて貰います。順番はお二人で決めてください。とりあえず、先到的を射抜いた方を『勝者』とします」

「なるほど、ようするに『的当て』ね。簡単じゃない」

ルイズが腕を組みながら言った。このとき、彼女はたかが的当てと
思っていた。

「じゃ、さつさと始めましょう」

「そうですね。では、タバサさん。お願いします」

キュルケが催促したので、朱里はタバサに軽く頭を下げてお願いした。タバサは、コクリと頷くと、短く呪文を唱えた。彼女が唱えたのは、浮遊魔法の『レビテーション』である。タバサが自分の身長よりも長い杖をサツと振ると、円形の的は、夜の闇の、空中真っ只中に浮かび上がった。つい先ほどまでは朱里たちの足元にあったのに、みるみるうちに離れていく。そして、月明かりでなんとか見えるかというところで、そのまま停止した。

それを見たルイズは、顔をしかめた。ついさっきまでは自信满满だったのだが、実際に闇の中に浮かび上がった的を見ると、果たしてうまくいくかわからないものである。わずかな月明かりで照らされながら浮かんでいるそれは、あたかも「外せ」とでも言っているかのようだった。

「準備ができましたよ。どちらが先に挑戦されますか？」

朱里が聞いた。

「なら、あたしは後攻。ヴァリエール。あなたが先にやりなさい」

「いいわ」

ルイズは杖を構えた。たかが的当てごときで負けてたまるものか、という気になっていた。少なくとも意気込みは十分と言ってもよい。しかし、彼女には問題があった。それは、魔法が成功するかしないかである。

空中に浮いている目標に攻撃を命中させようと思うのなら、『ファイヤーボール』等の魔法が望ましいのだが、ルイズの場合、その魔法自体が成功するかわからないのである。

いったいどんな呪文を使えば、憎きキュルケに先立って적을撃ち落とせるのか。彼女は悩んだ。しかし、結局有効な手立ては思いつかない。せいぜい、「水」や「土」の属性の魔法では的を落とせない、ということだけである。

悩んだ末に、ルイズは『ファイヤーボール』を使うことにした。むろん、失敗は許されない。

空中に浮かんだのを、憎きキュルケの顔だと思い浮かべながら、短くルーンを呟き、気合を入れて杖を振った。

だが、結果は彼女の思い描いたものとは大きく異なるものであった。杖の先からは何も出てこず、一瞬遅れて、的のはるか後方で爆発が起こっただけだった。

それを見たキュルケが、腹を抱えて笑った。

「ゼロ！ ゼロのルイズ！ 的じゃなくて『空気』を撃ってどうするの！」

無然とするルイズを余所に、言葉を続けた。

「あなた、メイジを辞めて、花火職人になった方がいいんじゃない？ その方が、みんな喜ぶわよ！」

「はわわ、キュルケさん、その辺で……」

ルイズが落ち込んでいるのを見た朱里が注意を促したので、流石にキュルケもからかうのをやめた。

そして、自分の番が来たので、空中の的を見上げると、狩人が如き目つきで、宙の的を見据えた。闇夜に浮かぶ的は狙いが付けづらいが、キュルケは余裕の笑みを浮かべる。ルーンを短く唱え、手慣れたしぐさで杖を突きだす。使用したのは、彼女の十八番、『フアイヤーボール』だ。

キュルケの杖先から現れた、瓜うりくらいの大きさの火球は、あたか

も吸い寄せられるかのように、的のど真ん中に命中した。

「お見事です」

手際の良さに、朱里も賞賛の声をあげ、タバサがそれに頷いた。

「あたしの勝ちね！ ヴァリエール！」

ルイズはよほど悔しかったのであろう。しょぼんとして、完全に座り込んだ。だが、このとき座り込んだことが、とんでもない事態の引き金になるうとは、誰も予想していなかったのである。

ルイズが座り込んだまさにそのとき、何かが彼女の顔面に張り付いたのである。それは、薄い粘液に覆われていて、ヒヤツとするものであった。

何かが付く感触をルイズが感じた時、彼女は一瞬、それは夜露に濡れた葉っぱかと思った。しかし、それは、明らかに植物ではなかった。なぜなら、それはルイズの顔の上を動いていたのである。

（この感触……）

ルイズは戦慄を覚えた。冷や汗を流している彼女には、今や先ほどの悔しさは感じられない。いずれにせよ、背筋の凍る感じであった。そんなルイズに釘を刺したのは、彼女の「使い魔」たる朱里の、何気ない言葉であった。

「はわわ、ルイズさん。顔にカエルが付いていますよ」

それを聞いた瞬間、ルイズの頭の中で、何かがはじけた。実は、

ルイズの嫌いなものは、キュルケ以外にもあった。それは、「ゲコゲコ」と鳴く生物で、虫を食べる夜行性の動物である。身近な所では、あのギーシュ騒動の関係者にして、同級生のモンモランシーが使い魔にしている、あの動物だ。そう、カエルである。

「い、いやあああ！！？」

ルイズは悲鳴をあげて走り回った。それはそれは、凄まじい声である。

「カエルなんてあっち行けえええ！！！」

必死にカエルを払おうとするのだが、どうすることもできない。そうこうしているうちに、彼女は杖を取り出し、当たりかまわず振り回したのである。

結果、暴発した呪文のせいで、あちこちの地面が爆発と煙が噴き出した。

「はわわ、ルイズさん！ 落ち着いてください！」

「ちょ、ヴァリエール！ あなた、危ないわよ！！！」

見かねた朱里やキュルケが止めようとしたが、危なすぎてどうすることもできない。

そうこうしているうちに、暴発した呪文のうちの一発が、近くの本塔の壁に命中した。頑丈な塔の壁にひびが入った。直後、やっとカエルはルイズの顔から離れ、ルイズは杖を納めて溜め息をついたのである。

「ヴァリエール、危ないじゃないの！」

キュルケが怒ったが、ルイズはカッとなって言い返した。

「うるさいわね！ わたしのせいじゃないわ！ カエルのせいよ！」

だが、そんな口論も、すぐに終わりを告げた。そんな悠長なことをやっていられるような状況ではなくなったからである。

「お二人とも、どうか落ち着いて……！？」

朱里が駆け寄って来た時であった。何やら、得体のしれない、大きな気配がしたのは。

「な、なにこれ！」

キュルケが悲鳴をあげた。どこから現れたのか、巨大なゴーレムが、三人のいる方向に向かって来たのだ。

「きゃああああ！」

キュルケが真っ先に逃げ出した。策なしにあんなものと戦って勝てるとは、到底思えない。

「はわわ……！？」

「何、突っ立っているのよ、コウメイ！ 早く走って！」

朱里たちも一度身を引こうとした。ところが、慌てていたためか、

朱里は転んでしまった。しかも、そこにゴーレムの足が迫ってくる。

「何やっているのよ！ ほら、早く立って！」

ルイズが朱里の片方の手を掴んで立たせた。しかし、そうこうしているうちにも、ゴーレムの足が接近してくる。絶体絶命であった。

その時、離れてルイズたちを見ていたタバサが、見かねて「ピイイ！」と、口笛を吹いた。すると、何かが物凄いスピードで飛んできた。それは、タバサの「使い魔」である、ウインドドラゴンであった。タバサのウインドドラゴンは、空中から、この状況を眺めると、わかったと言わんばかりにルイズと朱里のいるほうへと降りてきた。そして、地表すれすれを滑空しながら、その大きな両足で二人を拾い上げたのである。直後、二人のいた所に、ゴーレムの巨大な足がめり込んだ。間一髪であった。

「あれが、『ゴーレム』……？」

空中でぶら下がった状態で、朱里が呟いた。この間に皆と戦った、始皇帝の「兵馬妖」など比べものにならないほどの巨大さを誇るゴーレムに、彼女は戦慄を覚えたのである。

しばらく、それを眺めていたが、一通り落ち着くと、彼女はいつもの彼女に戻った。

「はわわわ！？」

ふと気が付けば、朱里は今、ずいぶん高い所にいるのである。そう言えば、彼女は高いところは苦手であった。

「なに？ あんた、高いところはダメなの？」

すぐ隣で、ドラゴンの足にぶら下がっているルイズが言った。

「は、はい」

朱里は震えながら言った。

「まったく、世話掛けるわね。高いところが苦手なら、先に言っときなさいよ」

やれやれ、と言った表情で、ルイズが言った。すると、震えつつも、朱里が口を開いた。

「あの、ルイズさん」

「なによ？」

「先ほどは、起き上がるのを手伝ってくれて、ありがとうございまして」

「そんなの当然じゃない」

なんだ、そんなことが、と言わんばかりの表情で、ルイズはそっぽを向いた。

「使い魔を見捨てて逃げるメイジはメイジじゃない。礼を言われる筋合いはないわ」

そう言っている間に、二人を運んでいるウィンドドラゴンは、安

全な場所にいた「主人」の元へと、降り立ったのであった。

なお、あのゴーレムを作りだした張本人は、近くに潜んでいた「土くれのフーケ」であり、その後、ルイズのせいでひび割れた壁に打撃を加えて破壊し、宝物庫にあった、「屠龍の宝剣」を盗みだしたことは、言うまでもなかった。

*

その日の日中、トリステイン王国、某所

袁紹、袁術一行は、必死で逃げていた。彼女たちの後ろからは、ミツバチの大群が追ってくる。

「ひいひい！　だれかお助けを！！」

「美羽さま、どうするんですか！？」

「妾のせいではない！　断じて妾のせいではないぞ！　大体、張勳！　『とある国の、無口で、犬耳と犬の尻尾を持った娘を見習って、野生の蜂の巣から蜂蜜を取ろう』などと言いだしたのは、お主ではないか！？」

「さっすが美羽さま！　『なるほど、それは名案じゃ』とか言って、

まったく反対もしなかったのに、いざという時はすべてを部下に丸投げされるなんて！ 本当に惚れ惚れしますわ！」

「わけのわからないことを言っていないで、もっと速く走りなさい！ 八ちに追いつかれますか！？」

「うわ、麗羽さまがまともなこと言った！」

「言ってる場合じゃないよ！」

『い、いやあああ！！？』

こうして、今日も日は過ぎるのであった。

第十六席 フーケ、屠龍の宝剣を手に入れんとすること（後書き）

第六回「ルイズと孔明のムダ知識講座」

ル「あれ？ こんなコーナーあつたかしら？」

朱「無理もないですよ。何力月もなかったですし……」

ル「まったく、いきなり何の予告もなしに復活させるなんて、一体どういう風の吹きまわしかしら？」

朱「まあ、とりあえず、せつかくですから、付き合つてあげましょう」

ル「仕方ないわね」

朱「それではまいりましょう。今回のお題は、こちらです！ 」

ル「今日は囃まなかったわね」

『隣国との付き合い』

ル「隣国って、まさか、本編でわたしと、あのキュルケの関係が出てきたから、とか言わないわよね？」

朱「残念ながら、その通りのようです」

ル「まったく、物好きもほどにしてほしいわよ。で、今回はどんな話？」

朱「はい。では説明に入っていきますよう」

朱「今回、本編で、『トリステイン人』のルイズさんと、『ゲルマニア人』のキュルケさんとの仲が大変悪い、というお話が出てきました。ルイズさん、どうしてもいつもキュルケさんとはケンカばかりするのですか？」

ル「そんなの、当たり前じゃない！ まず、個人的に気に入らないし、おまけに、あの野蛮なゲルマニアの人間よ。おまけにわたしの家とキュルケの家は国境を隔てて隣り同士。先祖代々因縁あるんだからね！ おまけに……」

朱「はわわ、もうその辺で……」

ル「まあ、そうね。こんな所で言っても仕方ないし……」

朱「とりあえず、このように、いつもどこでも、民族、風習の違う隣国とお付き合いは、難しいということはわかりましたでしょうか？ さて、今度は私の国、『漢』での事例を紹介しましょう」

ル「あんたの国にも、そういうのはあるのね」

朱「はい。私の故郷の『漢王朝』は、北に『草原の国』の『匈奴』きょつと国境を接しています」

ル「キョウド？ どんな国かしら？」

朱「はい。まず、私たちが住む『中原』は、農耕民族が暮らす土地であり、人々は土地を耕して生活しています。一方、北の草原は、

主に遊牧で生計を立てる『騎馬民族』たちが縄張りを張っています。つまり、『漢』は農耕民族の国。一方の『匈奴』は遊牧民族の国と言う風に、生活習慣も言葉、風習も全く違うというわけです」

ル「なるほどね」

朱「なお、『匈奴』という国が出現するよりも前から、（中国）大陸北部や西部には、様々な遊牧の部族が暮らしていました。匈奴は、それらの部族を統合して生まれた国といえるでしょう」

ル「で、その国にも、王様とかいたわけ？」

朱「はい。例えば『漢』では、『皇帝』がいるように、匈奴には『単于^{ぼんう}』という首長がいました。匈奴にあつては、単于の言うことは絶対であり、何人たりとも逆らうことはできませんでした」

ル「なるほどね」

朱「では話を進めましょう。中原の農耕民族にとって、辺境の遊牧民族たちは、全く異質なものでした。まず、生活習慣は違いますし、言語や衣服、食べ物も異なります。彼らの存在は、漢王朝（前漢）が誕生するよりはるか昔の『春秋・戦国時代』から問題になっていました」

ル「問題？」

朱「もちろん、それは国境紛争です。匈奴を含めた辺境の遊牧民たちは、食べ物が不足すると、別の部族を襲い、それでも足りないときは、中原にまで押し寄せ、様々な乱暴を働きました。国境沿いの街や村を襲い、略奪を行い、農作物や家畜などを奪いました。それ

ばかりか、住民や官吏を殺し、あるいは捕えて奴隷にし、さらには女性まで連れ去っていく有様でした」

ル「なにそれ、野蛮じゃない！」

朱「むろん、当時の遊牧民族の縄張りに接した国々は、なんとか撃退しようとしてはますが、歩兵中心の農耕民族軍団では、機動性の高い遊牧民族の軍には勝てませんでした。なにしろ、草原の人々は幼い頃から馬に乗り、弓の練習をするので、戦い慣れています。おまけに、遊牧民は保存食（干し肉やチーズなど）を携行し、わざわざ重い兵糧・輜重を持ち歩く必要はないので、風のように移動することができました」

ル「それじゃ、一方的にやられてばかりじゃない。なんというか、ハルケギニアの『人間』と『エルフ』の関係みたい……」

朱「ですから、中原の街は高い城壁で覆われていることが多いのです。そのうち、街を囲むだけでは飽き足らず、各国は遊牧民族を防ぐために、国境付近に長い石積みや土塁を築くようになりました。のちに中原が『秦王朝』によって統一された際、秦王政（後の始皇帝）がこれらの土塁を、東から西まで、延々と繋ぐ、大改良工事を行いました。これが、『万里の長城』の起こりと言われています」

（長城の地図と絵が出る）

ル「なにこれ？　こんなの、ハルケギニアでは見たこともないわよ！」

朱「とにかく、長いとしか言いようがありません。ほかに、始皇帝は弩（^どクロスボウに似た兵器）を改良させるなど、敵の騎馬軍団

を挫くため、射撃兵器の開発・量産を行わせています」

ル「こんなに凄い『長城』なら、国も安泰じゃないかしら？」

朱「いいえ。むしろ、逆でした？」

ル「は？ どういうことよ」

朱「これだけの長城を、短期間で作らせたのですから、莫大な労力と経費がかかったことは、言うまでもありません。結果、秦帝国内部は、大勢の民の怨嗟の声で満ちることになったのです。結局、秦帝国そのものは、始皇帝が崩御して、四年後に、国内部の反乱によって滅亡してしまいます」

ル「……」

（絶句し）

朱「さて、秦が滅んだあとの中原では、後に漢の高祖となる劉邦さんと、西楚霸王・項羽との天下争いが繰り広げられました。この時、北の匈奴では、一人の英雄が誕生しました。冒頓^{ぼくとんぜんう}単于です」

ル「ボクトツゼンウ？」

朱「彼は、父親の頭曼^{とうばんぜんう}単于を殺害して、匈奴の単于となり、素早い行動力と、優れた騎馬軍団を以て、草原の諸部族を統一しました。そして、草原を統一した後、まだ劉邦さんが建国して間もない漢の領域に、40万と称する大軍で攻め込んできたのです」

ル「40万!？」

（腰を抜かす）

朱「もつとも、実際より誇張されている可能性はあります。いずれにせよ、大軍だったことに違いありません。結果、国境に近い代^{だい}を守っていた功臣諸侯王の韓王^{かんおう}・信^{しん}が寝返り、劉邦さんはそれを討つために、30万を超える軍勢を組織して、自ら出陣します」

ル「始祖自ら出陣なら、勝てたんでしょうね？」

朱「残念ながら、勝てませんでした。劉邦さんは、主力部隊に先だって、わずかな数の軍勢と共に冒頓単于を討とうとしました。ところが、匈奴は戦わずに逃げるばかりだったので、そのまま追撃したのです。結果、これは罨で、劉邦さんの本陣は、極寒の地・白登山で匈奴軍に包囲されてしまいました」

ル「だらしないわね」

朱「相手をなめてかかると、こういうことになります。包囲は1週間に及び、多くの兵士が飢えや凍傷で倒れました。そこで、劉邦さんの部下、陳平が単于の婦人に賄賂を贈って、ようやく包囲を解かせたのです」

ル「始祖が敵に賄賂を贈るなんて……」

朱「結局、漢は匈奴と和平を結ぶ際、毎年貢物をする、匈奴単于に公主（皇帝の娘）を嫁がせるなど、自分にとって不利な条件で結ぶ羽目になりました。しかも、匈奴はその後もたびたび問題を起こしました」

ル「せっかく和平を結んだのに？」

朱「国付き合いとは、やはり簡単にはいきません。匈奴はその後もたびたび国境を犯しましたし、また、漢帝国内で問題を起こした政治犯や盗賊が、匈奴の縄張りに亡命するという、治安上の問題もありました。また、呉楚七国の乱（漢王朝の皇族諸侯王の反乱）の際には、匈奴に接した趙王が、匈奴に援助を頼みましたし、他にも匈奴に派遣された宦官の中行説ちゅうぎんせつが、漢王朝への逆恨みから匈奴单于に仕え、和平など無視するようけしかけたという話もあります」

ル「ひどい話ね」

朱「やがて、七代目の武帝さんの時代になると、我慢の限界だと言わんばかりに、武帝さんは匈奴にたびたび出兵するようになりました。武帝さんの皇后・衛子夫えいしふの弟だった衛青將軍えいせい（元々の身分は奴隷の羊飼。後に大將軍となる）や、その甥の、驃騎將軍ひょうきしやうぐん・霍去病將軍などが活躍し、匈奴に打撃を与えます」

ル「それでようやく終わったかしら？」

朱「いえ、まだです。武帝さんの時代は、匈奴に打撃を与えましたが、屈服させるには至りませんでした。しかし、武帝さんの曾孫の九代・宣帝さん（中国史上、王朝建国者を除くと、唯一の庶民皇帝）の時代になると、匈奴内部で单于の座を巡った後継者争いが起こり、結果、分裂した匈奴の南半分を率いる单于が漢に帰順を申し込みました。宣帝さんは喜び、匈奴单于に漢の皇族以上の待遇と地位を与えました。これで、しばらくは友好的な関係が続いたのです」

ル「めでたし、めでたし……」

朱「ところが……」

ル「まだあるの!？」

朱「このせつかくの友好関係を全部破壊してしまった人間がいました。漢（前漢）から皇帝の位を篡奪した、王莽おうもうです」

ル「どういうことよ」

朱「王莽は衰退した漢王朝から位を奪った後、極端な儒教政治を行い、時代に合わない復古主義政策を取りました。その際、匈奴の単于や人々を貶めるようなことをしています」

ル「どんなことをしたの？」

朱「例えば、『中原の人間ではない野蛮人』が『王』を名乗るなどおかしいという理由で、『王』の印綬を取り上げ、『侯』に格下げするということをしました。結果、怒った匈奴が報復として国境を犯すと、王莽は『匈奴単于』の称号を貶め、『降奴服于』にしたのです」

ル「いや、子どものケンカじゃあるまいし……」

朱「むろん、『降奴』にされた匈奴の人々は怒りました。それを見た王莽は、今度は『恭奴善于』に改名するということをしています。ほかにも、東にある国、『高句麗』を貶め、『下句麗』にするという、あまりに稚拙なことまでしています」

ル「なんでこんなのに国を乗っ取られたのかしら？」

朱「よつぽど国が弱体化していたとしか、言いようがありません。後の豪族や農民の反乱によって王莽政権が滅ぼされた後、漢王朝を

復興した光武帝・劉秀さんは、これらの国々との関係を修復するの
に苦労したと言います」

ル「他人の尻武具いなんてイヤね……」

朱「さて、今回はこの辺で終わりにしましょう。次回をお待ちくだ
さい！」

ル「ああ、長かったわ……」

終わり

第十七席 孔明、犯人を突き止めんとすること（前書き）

お待たせしました。

今回は、朱里の推理ショーです。

初陣はまだ次回に引き延ばしです。

それでは、お楽しみください。

第十七席 孔明、犯人を突き止めんとすること

荊州の街、襄陽。

五斗米道ゴットウエイドの名医こと華佗が水鏡宅を訪問してから五日目。彼は、襄陽の料亭にて、五斗米道教団の同志と、最後の打ち合わせをしていた。

「これが、張衡様よりお預かりした、『ブツ』だ」

そう言つて、華佗と対面して座っている、道士風の男が、一つの包みを手渡した。

「いいか、絶対に抜かるなよ。全ては、お前たちにかかっているのだからな」

「わかつている」

華佗が包みを受け取りながら言つた。

「俺たちは今度こそ、あの『術書』との因縁を絶ち切る。それまでは、絶対に帰らんからな」

それはあたかも、自分自身に言い聞かせているかのような言葉だった。

それを聞いた道士風の男は、勘定を置いて料亭を立ち去り、それを見届けた華佗は、ただちに水鏡宅へ向かうべく、その場を發つた。

桃花村の恋姫たちの、旅立ちの時は、刻一刻と迫っていた。

＊

トリステイン魔法学院、本塔の前

「おい、見たか？」

「ああ。ありゃ、ひでえな」

「なにをどうやったら、ああなるんだ？」

まだ日が昇って間もないというのに、本塔の前には人だかりができていた。それもそのはずで、頑丈に作られ、昨日までは傷一つ見受けられなかった塔の壁には、今や大きな穴が開いているのだ。それはもう、ぽっかりとである。

「どうやら、あの『土くれのフーケ』の仕業らしいぞ」

どこから情報を仕入れてきたのか、男子生徒の一人が友人にそう話した。いつの世も、噂が広まるのは早い。

「おいおい、うそだろ!？」

「バーカ、他にいつたい、誰がこんなことやるんだよ」

「しかし、おっかないわねえ」

「ほんと。こんな頑丈な塔に穴を開けるなんて、どんだけ恐ろしい魔法かしら？」

「想像できないよ」

皆が自分勝手な意見を述べる。彼らから野次馬としての話題が尽きることはないだろう。

たしかに、この塔に大穴を開けたのは、ほかならぬ「土くれのフーケ」である。

しかし、流石に彼らは知る由もなかった。彼らとほとんど年齢の変わらない、一人の女子生徒の「魔法」によって、塔に穴が開く原因ができたことなど。もっとも、その女子生徒にとっては、それを他の人間に知られてなくて幸いなのだが。

*

一方、こちらは塔内の宝物庫の中。

そこでは、学校中の教師たちが集まり、壁に開いた穴を呆然と眺めていた。破壊された壁は、内側から見ると、よけいに悲惨極まりないものであった。それを見れば、三才の子どもにだって、「土くれのフーケ」の攻撃手段が、いかに恐ろしいものであるかということがよくわかるものであろう。

しかも、壁の無事な部分には、フーケからの犯行声明文が刻まれていた。その内容は、

『屠龍の宝剣、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

という、非常にふざけたものだった。

「おのれ、土くれのフーケ！」

教師の一人が怒った。

「あの、貴族たちの財宝を荒らしまくっているという盗賊が！ 魔法学院にまで手を出しおって！ 随分と舐められたもんじゃないか！」

それを皮切りに、他の教師たちも騒ぎ始めた。

「衛兵はいったい何をしていたんだね？」

「衛兵？ そんなもの、元々当てにならん！ 所詮は平民じゃないか！ それより、当直の貴族は誰だったんだね！」

「ミセス・シュブルーズ！ 当直はあなたなのではありませんか！」

「も、申し訳ありません……」

「泣いたって、お宝は戻ってはこないのですぞ！」

教師たちの怒りはエスカレートして、とうとう責任の押し付けにまで発展した。こんな状態が、学院長ことオスマン氏の注意が飛ぶまで続いたのである。

この間、朱里はといえば、彼女同様、この事件の「目撃者」であるルイズ、キュルケ、タバサの三人とともに、宝物庫の隅の方で控えていたのだが、この光景をみて呆れてしまっていた。

無理もない。大事な宝物が盗まれたというのに、今日の前で起こっているのは、陰湿な責任の押し付けである。そのようなことよりも、今はフーケと、盗まれた宝の行方を、皆で力を合わせて探るべきであるというのに。

それだけでも十分呆れるというのに、さらに朱里をがっかりさせたのは、現在、ここにいる教師たちの中で、まともに当直をしたことのある者が皆無だったということだ。朱里たちの暮らす桃花村では、絶対に夜の警戒は怠らない。桃花村周辺が物騒すぎる所なのか、魔法学院が平和すぎたのかはともかく、開いた口のふさがらない話であつた。

だが、過ぎたことを考えていても仕方がない。

オスマン氏を始め教師たちが、事件の目撃者であるルイズたちから話を聞いている間、朱里は一人で犯人について考えていた。

（もし、私が犯人なら、どうしようか）

彼女はまず、そこから考えた。

（自分の欲しい物が、この学院の中にあるとして、それなら、どうやってそれを手に入れようか）

朱里は、この事件を解決するためには、自分が「土くれのフーケ」になって考えるしかない、と思ったのである。

孫子の兵法曰く、

「敵を知り、己を知れば、百戦錬磨危うからず」

である。これは何も、戦場に限った話ではない。いつの世も、自分の力量を顧みず、相手の力を軽視すれば、とんでもないしっぺ返しに遭うことは明白なのだ。

（そもそも、宝物庫の中のお宝の中に、自分の欲しい物の名前があるかなど、その辺の街や村とかで聞けるはずがない。そうになると、お宝の名前を知っているのは、学院の中の人たち……）

その通りである。魔法学院の宝物庫の中に、何と言う名前のお宝が入っているかなど、その辺の平民たちは知っているはずがない。まして、ここは城下町から離れた草原の真っ只中に位置する魔法学院である。それはつまり、魔法学院を出入りする人間だけが、「学院内の宝物庫」の存在を知っているということである。しかも、その中の宝の名前まで知り尽くしている人間となると、数はさらに限定される。学院長と、それに近い人間だけである。

（そもそも、昨日みたいな、あんな大胆なことを、その場の思いつきだけでできるはずがない）

朱里の推理はそこまで行き着いたのである。フーケがいかに優れたメイジであろうと、昨日みたいな大がかりなことを、突然やってきて、嵐のように去るかのようにできるであろうか。どう考えても、前もって準備したり、作戦を立てたりする必要があるのだ。それはつまり、学院長の周辺に、どんなに短くても数日前、長くて数力月か数年前から、フーケ本人、あるいは彼女の放った内通者が潜んでいた、ということに思い当るのである。太い大木が、いつかは倒れるのはなぜか。キツツキがどんなに外側から穴を開けても、その程度で枯れることはない。むしろ、キツツキがエサにする、白蟻しろありや木喰虫くいむしが、幹を内側から食い荒らすからである。

（学院長に近しい人と言えば……）

朱里は考えた。学院長のオスマン氏に近しい人間と言えば、その数は自然と限られてくる。それはつまり、ここにいる教師や秘書たちということである。その中において、「土」系統の魔法の使い手となると、さらに限られてくるのだ。

それがいったい誰なのかと考えていた時であった。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたね？」

オスマン氏が言った。そう言えば、ここにいる教師たちの中に、オスマン氏の秘書である、ミス・ロングビルの姿はない。

「それがその……、朝から姿が見えませんか」

「この非常時に、どこに行ったのじゃ」

「どこなんでしょう?」

そんな風に噂していた時であった。その、ミス・ロングビルが現れたのは。

「ミス・ロングビル! どこに行っていたんですか!」

コルベール先生が、まくし立てた。それに対し、ミス・ロングビルは落ち着き払った態度で、オスマン氏に告げた。

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの」

「調査?」

皆が首を傾げる中、ミス・ロングビルは語り始めた。

彼女の話によれば、今朝来てみれば、宝物庫はこのとおりで、しかもフーケの犯行サイン。これが国中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業だと知り、すぐに調査を始めたのだというのだ。そして、フーケと盗まれた宝の手掛かりを捜していたところ、なんと、フーケの居所がつかめたのだという。

「な、なんですと!」

コルベールが、素っ頓狂な声をあげた。

「誰に聞いたんじゃない? ミス・ロングビル」

「はい。近在の農民に聞きこんだところ、近くの森の廃屋に入っていた黒ずくめのローブの男を見たそうです。おそらく、彼はフーケで、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」

それを聞いた、ルイズが叫んだ。

「黒ずくめのローブ？ それはフーケです！ 間違いありません！」

オスマン氏は、目を鋭くして、ミス・ロングビルに尋ねた。

「そこは近いのかね？」

「はい。徒歩で半日。馬で四時間といったところでしょうか」

それを聞いて朱里は、「あれ」と思った。

（さっき、ロングビルさんは、今朝方起きて騒ぎに気付いて、調査に行ったと言っていたのに、どうしてこんなに早く戻ってこれたのかな）

その通りである。ミス・ロングビルは、今朝方起きて調査に行つたはずなのに、「馬で四時間」かかるところから、もう帰って来たのである。普通なら、どんなに早くても昼過ぎくらいになるはずだ。しかも、魔法学院周辺で聞き込みをやっていたのなら、さらに時間がかかるはずなのだ。どう考えても、計算が合わない。

（まさか！？）

朱里は、のどから出かかっていた声を、辛うじて殺した。彼女は、この事件の犯人が誰なのか、大体の想像はついたのである。だが、

今の段階では、あくまでも想像の域を出ない。

（でも、そうとしか考えられない）

彼女はもう一度考え直した。確かに確固たる証拠はない。おまけに、この世界の常識では「一平民」に過ぎない朱里が、今この場で発言しても、信じてもらえるかわからない。それどころか、「子ども戯言」と笑われそうである。

（今はがまん……）

朱里は、冷静に自分を抑えた。今ここで焦ってしまえば、全てがパーになるのだ。そうならないためには、誰もが納得する、確固たる証拠を抑えなければならぬ。それに何より、盗まれた「屠龍の宝剣」を取り返さなければならぬのだ。そのためにどうしようかと、考えようとしたとき、ここで捜索隊の編成が行われたのである。

その結果、あろうことが、学院の教師たちは、「案内役」のミス・ロングビルを除いて誰も行かず、代わりに、生徒でしかないはずのルイズ、キュルケ、タバサの三人が志願して、行くことになってしまったのである。オスマン氏の話によれば、タバサは実力のある称号、「シュヴァリエ」を持つ騎士なのだというが、やはり生徒であることに変わりはない。

（このままでは、ルイズさんたちが危ない！）

直感からそう感じ取った朱里は、やむを得ず、一計を用いることにした。例え、それが卑怯な手段だと言われようと、やらなくて後悔するよりはいい。そう思っただけの謀りごとである。

出発を目前に控えた時、朱里はルイズに話しかけた。

「ルイズさん」

「何よ、コウメイ」

「その、準備がまだできていないので、少しだけ待っててもらえま
すでしょうか？」

「まったく、早くしなさいよね」

「はい！」

返事をする、朱里は走った。時間が少ない以上、できることは
急いでやっておかねばならない。

「楊震ようしん曰く、『天知る、神知る、我知る、子知る。何ぞ知る無しと
謂いわんや』。フーケさん。あなたは誰にも知られていないつもりで
すが、ちゃんと見られているんですよ」

子どもとは思えないことを考えながら、朱里は「フーケ退治」の
準備に取り掛かるのであった。もっとも、その代償として、出発が
遅れたため、ご主人様であるルイズに、こっぴどく叱られる羽目にな
ったが。

王都トリスタニアの、とある武器屋にて

「おい、その姉ちゃん！ 何、俺のことじろじろ見てんだ!？」

「ほう、喋る剣とはおもしろい」

「じろじろ見てねえで、さっさと帰りやがれ！」

「やい！ デル公！ 『美人な』 お客様に失礼なことを言うんじゃない！」

「いや、待て。ご主人。少し、これに触れさせてもらおう」

「え、まあ、ご自由に」

「おい、こら！ 勝手に触るんじゃない！」

「おぬし、口が減らないようだな」

「……おでれーた。見損なつてた。姉ちゃん、『使い手』か」

「たしかにそうかもな。もっとも、私の場合は、剣よりも槍の方がむいているかな」

「姉ちゃんも一言多いじゃねえか」

「ま、こんなおもしろいものは、持ってて損はなかるう。『帰った

時』の、ちょうどいい土産くらいにはなるであろつし。ご主人、これはいくらだ？」

「へえ、そのインテリジェンスソードでしたらお安くしますぜ。ちようど、いい厄介払いでさあ」

「そうか。ところで、おぬし、名前とかはあるのか？」

「俺の名は、デルフリンガーさまだ！ おきやがれ！」

「なら、私も名乗らなくてはな。わが名は趙雲。字は子龍だ」

「変な名前で、呼びにくいじゃねえか」

「なら、趙子龍でよい。又の名は……」

第十七席 孔明、犯人を突き止めんとすること（後書き）

いったい、いつ、朱里はコ○ンになったんだ？

そして、デルフが登場しました。

出さない言っていました、気が変わりました。
やっぱり出します。

さて、これからどうなるのか。

今後もよろしくお願いします。

第十八席 フーケ、苛々すること（前書き）

長らくお待たせしました。

ただ、正直言つて、今回のお話は、中身がない感じがします。

しかも、どうも見苦しい言い訳が混じっているようなお話です。

それでも読んでくださる方々に、幸あらんことを。

第十八席 フーケ、苛々すること

水鏡宅

華佗が襄陽の街で五斗米道ゴットウエイドオ教団の同志と打ち合わせをしていた時の頃。

「愛紗、桃香お姉ちゃん」

「なんだ、鈴々？」

「どうしたの？」

「この間、華佗のおじちゃんが言ってた、朱里を連れ去ったっていうヤツのことなのだけど……」

「ああ、確か華佗殿の持ってきた予言書に書いてあったな」

「うん。えっと、たしか、『なんとかの術士』だったかな？」

「そう、それなのだ！」

「それで、その術士とやらが、どうかしたのか？」

「うん。鈴々はね、その朱里を『大秦』とかいう所に連れ去ったヤツが、どんなヤツなのかって、すっごく気になっているのだ」

「なるほど。たしかに気になるな」

「たしかに気になるよね。もし、華佗さんの持ってきた予言書が正しいのなら、孔明ちゃん、もしかしたら鳳統ちゃんも、今頃その人と一緒にいるかもしれないし……」

「そうなのだ。もし、その『なんとかの術士』とかいうヤツが、朱里のことをいじめていたら、鈴々がケチヨンケチヨンにしてやるのだ」

「鈴々ちゃんって、本当に友達思いなんだね」

「別に、鈴々はちつとも優しくなんかないのだ」

「相変わらず素直じゃないな、鈴々」

「愛紗まで何を言うのだ？」

「まあまあ。それより、その『術士』って人、要は、妖術とか使えるんだよね？」

「妖術か……」

「ん、どうしたのだ、愛紗？」

「いや、妖術と聞いて、なぜか不安になったのだが……」

「妖術使いと言ったら、この間の于吉うきつ、がそうだったよね」

「まさか朱里のヤツ、あんなヘンテコ眼鏡をかけた、怪しいヤツに……」

「なっ！ そんな！？」

「落ち着いて、愛紗ちゃん。妖術使いと言っても、みんながみんな、悪い人たちじゃないでしょう？」

「ん、ああ、そうだったな、姉上」

「そうなのだ。それを言ったら、華佗のおじちゃんや、張三姉妹もそうだったのだ」

「でしょう？ 孔明ちゃんのことだから、きっといい人に拾われているはずだよ」

「はたしてそうかな……？」

「え？」

「馬岱ちゃん？」

「もしかすると、その『術士』ってヤツ、本当におっかないヤツかもしれないよ？」

「なに言ってるのだ！ どんなヤツが来ようと、鈴々と愛紗の手にかければ、ちよちよいのちよーい、なのだ！」

「そうだ。だいたい、『予言書』には、『大秦国の戦乱を鎮めんとす』って書いてあったであろう。少なくとも、于吉のような悪人ではないはず……」

「でも、予言って、そうそう当たるのかな？　もしそれが外れて、とんでもない化け物だったりしたら、どうする？」

「決まっているのだ！　鈴々がケチヨンケチヨンにしてやるのだ！」

「でも、もしかしたら、全身が血のように真っ赤で、顔には赤くてギラギラーっとした目が一つだけあって、身の丈七丈（おおよそ21、2m）で、頭のとっぺんには一本の角があって、しかも馬の三倍もの早さで駆け回る化け物を出してくるかもしれないよ？」

「そ、そんなものいるわけないのだ！　ねえ、愛紗！」

「あ、ああ。そうだぞ、鈴々！」

「そのわりには、やけに震えているように見えるけど、気のせいかな？」

「き、気のせいなのだ！」

「そ、そうだ。こ、これは、武者震えだ！」

「へえ」

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん。大丈夫だよ、きっと」

「あ、姉上まで！　わ、私は別に、こ、恐がってなんか　！」

「そ、そうなのだ！　馬の三倍も速いやつなら、り、鈴々は、さらに三倍の速さでや、やっつけてやるのだ！」

「二人とも落ち着いて。とりあえず、お茶でも飲んで落ち着こうよ。私、水鏡さんに頼んでくるから」

「ち、違う！ 私は別に恐くなんか　　！」

「そ、そうなのだ！　鈴々は、お、お化けなんか、ちーつとも恐くないのだ！」

「……えへへへ……これはおもしろいぞ……」

*

トリスティン王国の、とある街道

「クシユン！？」

荷馬車の上で、ルイズは盛大にくしゃみをした。

「はわわ、大丈夫ですか、ルイズさん？」

「ヴァリエール。あなた、風邪でもひいたの？」

「んなわけないでしょう！？」

声をかけてきた朱里とキュルケに向かって、ルイズは恥ずかしさのあまり、大声で怒鳴り返した。

（まったく、いったい、なんなのよ）

やむを得ず、高そうな絹のハンカチで鼻をかみながら、ルイズは思った。

（なんだかわからないけど、どこか遠いところで、誰かがわたしの噂話をしているような気がしたわ……）

我ながら馬鹿馬鹿しいと思いながらも、そう考えずにはいられない。

すると、そんなルイズを見ていた朱里が、ふと空を見上げた。そして、こう言った。

「なんだか、雲行きが怪しくなってきましたね」

それを聞いた、ルイズとキュルケもつられて見上げる。確かに、朱里の言うとおりだった。

学院を出発するときは、雲もほとんどない、きれいな青空が広がっていたのに、時間が経つにつれて、みちみち雲が多くなってきたのである。すでに空全体が、灰色の厚い雲に覆われていて、いつ雨が降り出してもおかしくない状態だった。

「言われてみれば、そうよね」

キュルケが言った。

「雨とか降らなければいいけど」

「いやよ、そんなの」

迷惑そうに、ルイズが言った。

「学院に帰るのに、ずぶ濡れで帰るなんて、まっぴらだわ」

たしかにその通りである。出発するとき、彼女たちは、まさか雨など降るまいと思っていたので、雨具の類は、まったく持ち合わせていなかったのだ。しかも現在、彼女たちが乗っている荷馬車は、屋根など付いてないのである。もしひと雨でも来られたなら、全員、全身ずぶ濡れになることは間違いないであろう。

「まったく。こんなことになるのも、きつとどこかに『雨女』でもいるんじゃないかしら？ それも案外近くに」

ルイズはそう言つて、自分の嫌いなクラスメートの方を横眼でチラッと見た。むろん、それに気付かぬキュルケではない。

「あーら。少なくとも、あたしではないわ。だって、あたしは『水系統』のメイジじゃないもの」

「誰がアンタなんて言っただかしら？ 自己解釈もいいところじゃない」

お互いに火花を散らしあう二人。荷馬車の上は、たちまちのうちに、曇り空以上の嫌悪な雰囲気包まれる。

「はわわ……、喧嘩はダメですう」

一触即発の空気の中、見かねた朱里が仲裁に入る。

「あら、大丈夫よ。コウメイちゃん」

キュルケがそう言ったので、朱里はホッとした。しかし、それもつかの間のことであった。

「あたしは『雨女』なんかじゃないから安心して。だって、今ここで雨を降らせたら、『カエル嫌いのルイズ』に、吹き飛ばされてしまっわ」

「う、うるさい！」

キュルケのよけいな一言に、ルイズが噛みついた。昨日の塔の前での一件の事を言われたからだ。

「だったら、今すぐ吹き飛ばしてあげるわ！」

「はわわ、ルイズさん、落ち着いて、落ち着いてください!!」

広々とした野原の真っ只中だというのに、騒がしい荷馬車である。

そんな喧騒を背景に、タバサは一人、自分は関係ないと言わんばかりに、本に読みふけていた。

*

（なんで、こんなバカなことに！？）

「土くれのフーケ」は、苛立っていた。

昨日、塔に開いた穴から宝物庫内に侵入して、お目当てのお宝であつた、「屠龍の宝剣」を手に入れたまではよかったのだ。その後の余計な行動がなければ。

まったく、私としたことが、今回に限って、どうしてこんなことをしたものかね……。

後になって考えてみれば、考えてみるほど、後悔の念が浮かぶ。

宝剣を盗みだし、それを学院の外に持ち出したまではよかったのだ。いつもだったら、そのまま事件現場から姿をくらまし、そしてそこには一生戻ってこないのである。

それなのに、どうしてまた戻ってきてしまったのであろうか。それは、大怪盗、「土くれのフーケ」とはいえ、逃れることのできない、人間としての性のせいであつた。

まったく。何を血迷って、こんなことを考えたのか……。

実は、朱里が推理した通り、「フーケ本人」は、学院内に潜んでいて、今までじつと、目的達成の機会を伺っていたのである。その

間、ずっと本性を隠して、おとなしい人物を装っていたのだ。その間には、いろいろな思い出もあったし、そこその対人関係も築き上げていたのである。だが、それらの思い出や関係が、全て良かったかと言えば、必ずしもそうでもない。

どうして彼女は事件現場に戻ったのかと言うと、その理由は二つあった。

一つは、一部の教師たちへの「お礼返し」のためであった。

フーケは学院内に潜入していた際、様々な教師たちと話したり、食事したりしていたのだが、中には、どうしても嫌な人間もいるものである。学院長のオスマンや、禿頭のコルベールなどは自分によくしてくれた（オスマンはセクハラまがいなこともした）が、魔法学院の教師連中の貴族の中には、権勢を恃んで傲慢なふるまいをする者も多かったのである。しかも、フーケ自身は「貴族の身分を無くした流れ者」としてさすらっていたところを、オスマン氏に拾われた、と周囲からは認識されていたこともあって、そういった連中が彼女を見る目は、どこか冷やかなものがあつた。いや、それだけならまだいい方だ。時には、陰口を言う、本当に嫌な奴もいたのである。

このまま帰ってしまえば、連中に一矢も報いることができない。

そう思ったフーケは、仕返しを思いついたのである。

連中は誰よりも栄華を求めている。だから、「フーケ」の情報を聞けば、我も我もと手柄目当てに捕まえに来るに違いない。そして、のこのことやって来たところを、叩いてやる。

これが計画だったのである。

のこのことやって来た連中に、私の力を見せつけければ、驚いて腰を抜かすに違いない。そして、絶望に染まった顔で逃げていくことだろう。ある意味、殺すよりも痛快だわ。

そう考えていたのである。だが、現実はそのはいかない。連中のボンクラ具合は、フーケの予想の遙かに斜め上を言ったのである。

連中は戦う前から恐がって、誰一人として来なかったのである。そして現在、空には曇天をいただき、背後には、ガキの喧嘩と言わんばかりの喧騒である。こんな展開になるなど、誰が予想できたであろうか。

怒りのあまり、途中でこの四人を放り出してやろうかとも思った。しかし、なぜか思いとどまってしまっているのである。

まったく、私もいつの間に物好きになったものかしらね。

我ながら馬鹿馬鹿しいと思いつつも、どうしても考えてしまっているのである。

どうして、あの宝剣が、「屠龍の宝剣」などという、物騒な名前と呼ばれているかである。

おそらく、何か秘密があるに違いない。しかし、盗んだ剣を調べたところ、なんの魔力反応も無いし、見たところでは、実戦向けの剣ではなく、どちらかと言えば、装飾向けである。しかし、長年、様々なお宝を扱ってきたせい、どうしても気になってしまう

ものである。

これも怪盗の性つてものかしらね。まあ、ダメでもとどだし、実験くらいはしてみる価値はあるかも……。

フーケはそう考えていた。そしてこの後、フーケは、自分でもわからない期待を胸の内に秘めながら、「実験」を行う運びになるのである。

だが、流石のフーケも、まさかこの「実験」が、大成功に終わるなど、夢にも思っていなかったのである。

そして、フーケはもう一つ、気付いてないことがあった。現在、ルイズたちが乗っている荷馬車の遙か後方に、馬車の車輪跡をこっそりと追いかける、騎馬の一団が存在していたことに。

*

同時刻。トリスティン王国、とある村の近く

「ヒナちゃん。これはなに？」

「これは、『セイロ草^{そう}』。おなかが痛い時に使うんだよ」

「こっちは、こっちは？」

「こっちは、『サロンパ草』。足をくじいた時に、よく効くの」

「すっごーい。じゃあ、このきれいなお花は？」

「『オタイサン』のお花だよ？ 食べ過ぎた時、すりつぶして、お水と一緒に飲むと、スッキリするよ。凄く苦いけど……」

「へえ。ヒナちゃん、物知りなんだね！」

「あわわ……、そんなことないでしゅ、あう……。私も、最近覚えただけなの……。前に、いろんなことを知ってる、私の大切なお友達に教えてもらって……」

「すっごーい！ どんな子なのー？」

「うん。すっごく優しくて、そして、いろんなことを、たくさん教えてくれる子だよ……」

第十八席 フーケ、苛々すること（後書き）

いかがでしたでしょうか？

グダグダとすみません。

本当に、朱里の初陣を引き延ばしてしまつて、読者の皆様にも、そして朱里にも申し訳ない気持ちでいっぱいです。

せめて、最後の雛里たちのほのぼのとした雰囲気には癒された方がおられましたら、幸いです。

これからも、微力を尽くしてまいりますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4712p/>

三顧の零 ～伏龍、魔法使いに召喚されるのこと～

2011年5月16日01時19分発行